

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書 第12集

はる  
原 の つじ  
辻 遺 跡

原の辻遺跡調査研究事業調査報告書

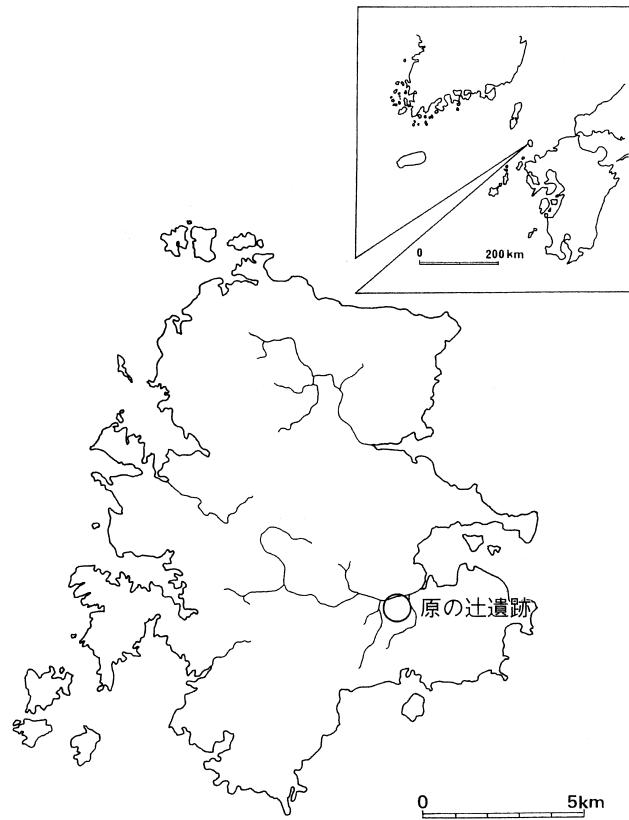
2 0 1 4

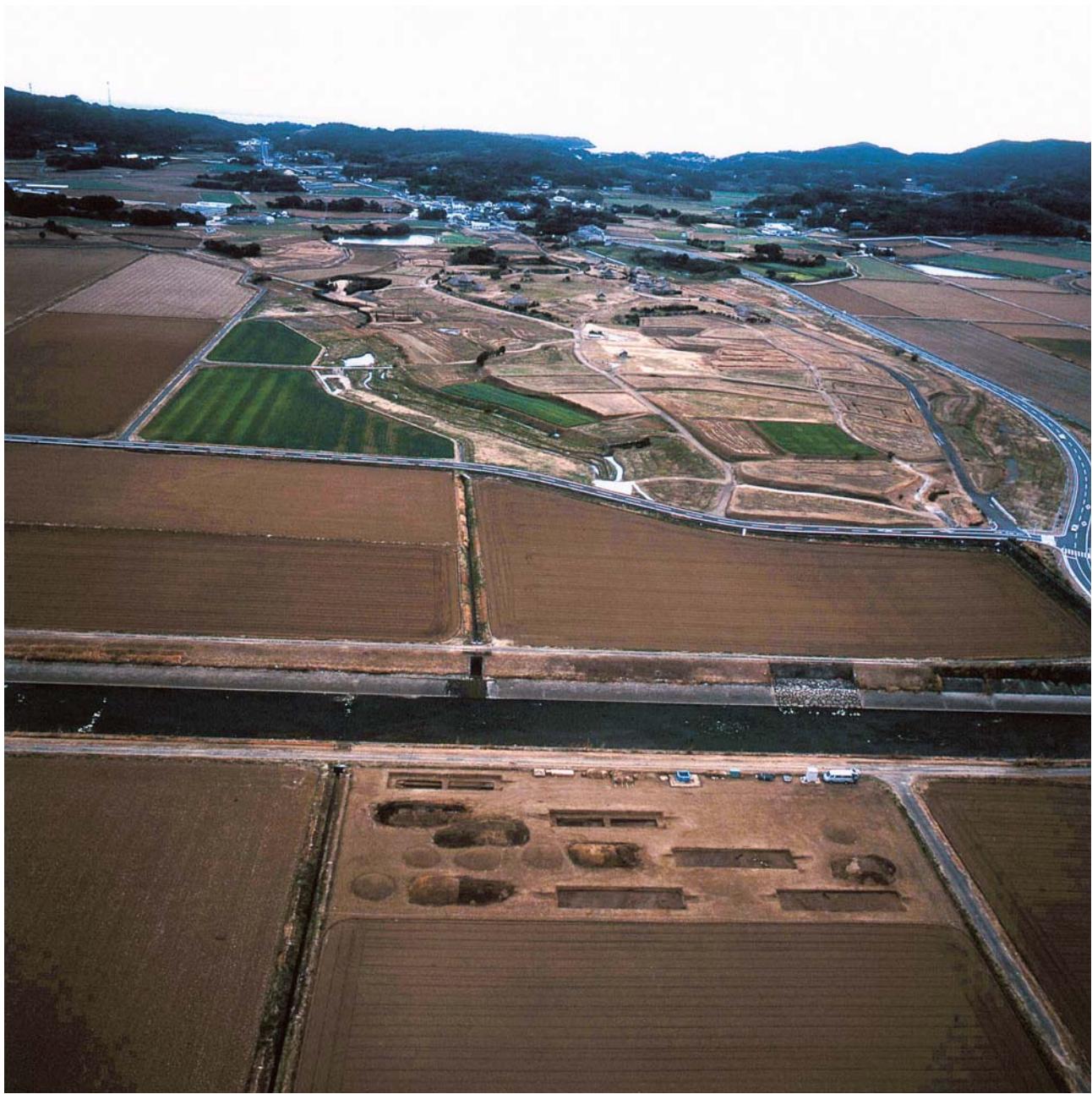
長崎県教育委員会

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書 第12集

はる つじ  
**原の辻遺跡**

原の辻遺跡調査研究事業調査報告書





カラー写真1 2013年度原の辻遺跡川原畠地区調査区（北から）

カラー写真2 1号竪穴建物跡遺物出土状況



カラ一写真3 1号豎穴建物跡床面状況





カラー写真4 1号竪穴建物跡炉跡



カラー写真5 1号竪穴建物跡炉跡壺（1）出土状況



カラー写真6 1号竪穴建物跡鉄器（91）出土状況



カラー写真7 1b区西壁土層

## 発刊にあたって

本書は、国庫補助を受けて実施した、平成25年度原の辻遺跡調査研究事業の報告書です。

原の辻遺跡は、これまでの調査で、多重の環濠や日本最古の船着き場跡などが確認されるとともに、中国や朝鮮半島との盛んな交流を物語る数多くの遺物が出土していることから、中国の歴史書「魏志倭人伝」に記載された「一支國」の國邑と特定されました。 「魏志倭人伝」の中には30余りの国の名前が記されていますが、国邑が特定されたのは原の辻遺跡だけで、当時の国の規模や構造を解明できる非常に学術的な価値の高い遺跡とされ、平成12年11月には弥生時代の集落遺跡としては全国で3例目の特別史跡として指定を受けました。また、昭和49年以降の発掘調査で出土した原の辻遺跡の遺物の中で、遺構や場所が明確で遺跡の時代や対外交流の歴史を裏付けることができる資料1670点が、平成25年6月19日に重要文化財に指定されました。

平成25年度の範囲確認調査は、壱岐市芦辺町深江鶴亀触字川原畠で実施しました。その結果、弥生時代の多数の土坑や河川跡のほか当該地区では初めて竪穴建物跡が発見されました。また多数の弥生時代の土器や石器、鉄器なども出土し、この地域の歴史を復元する上で貴重な資料を得ることができました。

発掘調査の実施に当たり、ご理解とご協力をいただきました地元関係者の皆様方に深く感謝申し上げますとともに、これらの調査成果が学術的な資料として広く活用され、さらには地域の方々の郷土を理解する資料として役立てていただければ幸いです。

平成26年3月28日

長崎県教育委員会教育長  
渡辺敏則

## 例　　言

1. 本書は、原の辻遺跡調査研究事業として実施した、平成25年度の原の辻遺跡発掘調査報告書である。
2. 本事業は、遺跡範囲内の環濠や旧地形等の状況調査を目的として、平成14年度から実施している。
3. 本書に収録した調査区の所在地は、長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触字川原畠である。
4. 平成25年度の調査は長崎県教育委員会が主体となり、長崎県埋蔵文化財センター東アジア考古学研究室が担当した。

### 調査組織

調査指導委員会 委員長	西 谷 正	(九州大学名誉教授)
委 員 工 樂 善 通	(大阪府立狭山池博物館館長)	
委 員 佐 古 和 枝	(関西外国语大学教授)	
委 員 高 倉 洋 彰	(西南学院大学教授)	
委 員 武 末 純 一	(福岡大学教授)	
委 員 松 井 章	(独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所)	
委 員 村 上 恭 通	(愛媛大学教授)	

[委員記載は50音順]

### 長崎県埋蔵文化財センター

所 長	木 村 忠 男
東アジア考古学研究室長	川 道 寛 (調査担当)
東アジア考古学研究室 文化財保護主事	田 口 貴 久 (調査担当)
東アジア考古学研究室 文化財保護主事	古 澤 義 久 (調査・整理担当)
調査課 文化財保護主事	白 石 溪 泽 (調査担当)
調査課 文化財調査員	前 田 加 美 (調査担当)

今次の調査では、調査指導委員会のほか、九州大学大学院理学研究院地球惑星環境部門 下山正一助教、龍谷大学国際文化学部 徐光輝教授、株火山灰考古学研究所 早田勉所長から専門的事項についての現地指導を得た。また、龍谷大学大学院生 王達来、陳喜、ラーザール・マリアンナ、張雷、温穎、初陸平の各氏は研修の一環として遺構測図にあたった。

5. 本書で使用した遺構・遺物の実測、製図、写真撮影は、長崎県埋蔵文化財センターが行った。
6. 本書に収録した遺物・図面・写真類は、長崎県埋蔵文化財センターで保管している。
7. 本書で用いた座標は旧日本測地系である。
8. 本書で用いた方位は座標北である。
9. 本書の中国語要旨の校閲は王達来氏に依頼した。
10. 本書の執筆担当者は、本文目次に（ ）で示している。
11. 本書の編集は古澤義久が行った。

# 本文目次

I 遺跡の立地する環境	
1. 地理的・地質的環境	1 (川道 寛)
2. 歴史的環境	5 (古澤義久)
3. 民俗的環境	7 (古澤義久)
II 調査の経緯と進行	8 (古澤義久)
III 川原畠地区の調査	10 (古澤義久)
1. 調査概要	
2. 土層	
3. 遺構及び遺構に伴う遺物	
4. 自然河川跡及び自然河川跡に伴う遺物	
5. 中世～近世包含層出土遺物	
IV 総括	71 (古澤義久・川道 寛)
中国語・韓国語要旨	80
付 編	
平成25年度原の辻遺跡調査研究事業発掘調査における自然科学分析	
.....	87 (株式会社 古環境研究所)

## 挿 図 目 次

図1	壹岐島位置図と遺跡所在地	1
図2	原の辻遺跡周辺の地質図（長岡ほか2005改変）	2
図3	ナウマンゾウ臼歯	3
図4	ヤベオオツノジカ角	3
図5	原の辻遺跡周辺の沖積低地の分布（長岡ほか2005改変）	4
図6	2013年度調査研究事業調査区位置図（1/8,000）	9
図7	川原畠地区調査区位置図（1/1000）	11
図8	1区平面図・土層図（1/60）	13・14
図9	2区平面図・土層図（1/60）	15・16
図10	3区平面図・土層図（1/60）	17・18
図11	4区平面図・土層図（1/60）	19・20
図12	5区平面図・土層図（1/60）	21・22
図13	1号竪穴建物跡（1/30）	27・28
図14	1号竪穴建物跡②層出土遺物1（1/3）	29
図15	1号竪穴建物跡②層出土遺物2（1/4、1/3）	30
図16	1号竪穴建物跡①層出土遺物1（1/3）	31
図17	1号竪穴建物跡①層出土遺物2（1/3）	32
図18	1号竪穴建物跡①層出土遺物3（1/3）	33
図19	1号竪穴建物跡①層出土遺物4（1/3）	34
図20	1号竪穴建物跡①層出土遺物5（1/3、1/8、3/4）	35
図21	1号土坑（1/20）	37・38
図22	1号土坑出土遺物（1/3）	39
図23	3区土坑・ピット出土遺物（1/3）	41
図24	14号土坑（1/20）	43
図25	14号土坑出土遺物（1/20）	44
図26	4区土坑出土遺物（1/3）	46
図27	5区土坑出土遺物（1/3）	46
図28	1号溝・2号溝（1/20）	51・52
図29	1号溝出土遺物（1/3）	53
図30	2号溝出土遺物（1/3）	53
図31	3号溝（1/40）	54
図32	1号暗渠跡（1/40）	55
図33	1a区河川跡遺物出土状況（1/40）	57・58
図34	1a区河川跡出土遺物（1/3）	59
図35	2a区河川跡遺物出土状況（1/40）	60

図36	2 a 区河川跡出土遺物（1/3、1/2）	61
図37	遺物包含層出土遺物（1/1、1/2）	63
図38	1 b 区31層出土遺物（1/1）	65
図39	1 b 区34層自然木出土状況（1/3）	65
図40	弥生時代中期後葉の状況	74
図41	近世・近代の河川	76

## 表 目 次

表1	2013年度川原畠地区調査区地点一覧	10
表2	1号竪穴建物跡内土坑・ピット	26
表3	3～5区土坑・ピット	47
表4	遺物観察表（土器・陶磁器）	66
表5	遺物観察表（石器）	70
表6	遺物観察表（鉄器）	70
表7	中央部に炉跡・焼土をもつ竪穴建物跡	72

## 写 真 目 次

カラー写真1	2013年度原の辻遺跡川原畠地区調査区（北から）	
カラー写真2	1号竪穴建物跡遺物出土状況	
カラー写真3	1号竪穴建物跡床面状況	
カラー写真4	1号竪穴建物跡炉跡	
カラー写真5	1号竪穴建物跡炉跡壺（1）出土状況	
カラー写真6	1号竪穴建物跡鉄器（91）出土状況	
カラー写真7	1 b 区西壁土層	
写真1	1号竪穴建物跡遺物出土状況（1）	81
写真2	1号竪穴建物跡遺物出土状況（2）	81
写真3	1号土坑遺物出土状況	81
写真4	1号土坑完掘状況	81
写真5	14号土坑遺物出土状況	82
写真6	14号土坑完掘状況	82
写真7	4区土坑・ピット群検出状況	82
写真8	5区土坑・ピット群検出状況	82
写真9	1号溝・2号溝検出状況	83
写真10	1号溝遺物出土状況	83
写真11	1号溝土器（175）出土状況	83

写真12	2号溝完掘状況	83
写真13	3号溝完掘状況	84
写真14	1号暗渠跡断面	84
写真15	1a区河川跡堆積土層	84
写真16	1a区河川跡立ち上がり状況	84
写真17	1a区河川堆積土（20層）土器（179）・自然木出土状況	85
写真18	1a区河川堆積土（19層）土器（180）出土状況	85
写真19	2a区河川堆積土（9層）遺物出土状況	85
写真20	2a区河川堆積土（10層・11層）遺物出土状況	85
写真21	2b区近代河川跡	86
写真22	1b区31層出土細石刃	86
写真23	1b区32層噴砂現象	86
写真24	1b区34層自然木（222）出土状況	86

# I 遺跡の立地する環境

## 1. 地理的・地質的環境

壱岐島は、九州北西方の玄界灘に浮かぶ、主に新第三紀～第四紀中期の火山岩からなる島である。そのため壱岐島の地質研究は火山を中心に行われてきた経緯があり、更新世後期から完新世についての情報は乏しいのが実情である。本節では、稻田孝司らのナウマンゾウの研究（稻田編1998・2005）、長岡信治らの原の辻遺跡周辺の地形地質研究（長岡ほか2005）に依拠しながら、本年調査で得られたデータを加味して原の辻遺跡周辺の地理的・地質的環境に触れる。

壱岐市は、2004年に郷ノ浦町・勝本町・芦辺町・石田町の4町が合併してできた市で、本年4月に市制10周年を迎える。日本の島の中で21番目の大島と周辺の属島からなり、総面積138.57平方km、岳ノ辻の標高212.9mを最高点とする低平な島である。2014年1月現在の人口は28,952人、観光と農業・漁業を主な産業とする。来島者は年間55万人強である。気候は、玄界灘を北流する対馬海流が島の周囲を洗うため温暖で、年平均気温は15度台、年間降水量は約1900ミリである。

原の辻遺跡の位置する深江田原は、周囲を50m以上の溶岩台地に囲まれた盆地状の地形である。遺跡は盆地の東側、石田町と芦辺町にまたがっており、石田町側から北へ伸びる舌状の低平な丘陵とその周辺の低地部からなり、面積は100haである。座標軸では祭儀場跡付近で、東経129度45分7秒、北緯33度45分35秒である。

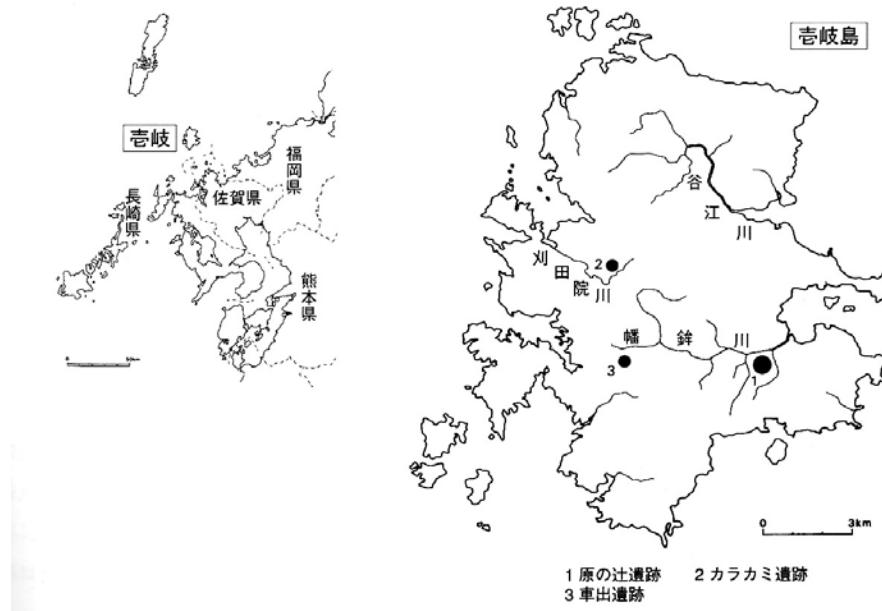


図1 壱岐島位置図と遺跡所在地

### (1) 原の辻遺跡丘陵部の地質的環境

丘陵部は、祭儀場跡周辺の標高17mを最高点とし、南北に標高を減じていく。北側の高元地区で10mあまりで標高5～6mの低地部に突き出る岬状の地形である。丘陵部の表層地質はこれまで壱岐の火山活動とあわせた研究にとどまっていた。長岡らが2002～2004年に行った本格的な研究は原の辻遺跡の『総集編』に記載された（長岡ほか2005）もので、丘陵周辺を隈なく調査し、数箇所のボーリン

グを実施したもので、原の辻遺跡の載る丘陵に具体的にメスを入れた画期的なものであった。考古学の発掘調査では表層地質の最上部の情報しか得ることができず、加えて地質的な情報は皆無と過言ではない。

長岡らは原の辻丘陵を構成する表層地質を5つに区分する（第2図）。舌状丘陵の先端部である高元地区には玄武岩E、原地区から萱ノ木地区・原の久保地区および西側の鶴田地区には河成礫層・土石流堆積物・火碎流堆積物・降下火碎物からなる礫層B、丘陵中央の祭儀場跡西側には玄武岩Fのキャップストーンがみ

られ、丘陵南東部の大川地区から柏田地区にかけては玄武岩Dが分布するに細分案を提出している。

多重環濠に囲まれた原の辻遺跡丘陵部の大部分は弥生時代以降の遺構が密集しており、あわせて古墳時代や中世～近世にかけての土地改変によって旧来の地形が変革されている。

その結果からか丘陵の至る所で旧石器時代～縄文時代の遺物が表面採集されたり、弥生時代遺構の遺構や包含層から検出されている。今までのところ縄文時代の包含層は確認されていない。旧石器時代の包含層は原地区・萱ノ木地区・鶴田地区の3箇所で確認されたに過ぎない。いずれの地点も表層地質では礫層Bの部分に当たることは興味深い。

縄文時代の包含層は不在である。その要因をこれまで後世の削平に求めてきたが、風化土層の形成速度が遅く厚い土層が形成なかった可能性などもっと根本的な原因がありそうである。

## (2) 低地部の地質的環境

これまで遺跡周辺の低地部は、地形分類では三角州および海岸平野に区分されていた（長崎県土地対策室1980）。ところが1992年にナウマンゾウの化石骨が発見されたことを契機に低地部の地質環境の研究が大きく進んだ。ナウマンゾウの発見は、稻田孝司を代表とする研究グループに注目され、考古学と古生物学等との学際的研究が行われた（稻田編1998・2005）。併せてそれに依拠した長岡らの研究もあった（長岡ほか2005）。それらを参考に低地部の地質的環境の概要を述べる。

原の辻遺跡周辺の沖積低地は、海拔ほぼ全域が圃場整備され起伏に乏しい。標高8～5m程度である。南から北へ舌状に伸びる丘陵をぐるりと取り囲んでいる。現在の幡鉢川は1939（昭和14）年に行われた河川改修によって直線化しているが、往時の幡鉢川は陸軍地図（大正9年）にみるとように大きく蛇行を繰り返しながら流れている。原の辻遺跡周辺の沖積低地には、ナウマンゾウ・ヤベオオツノ

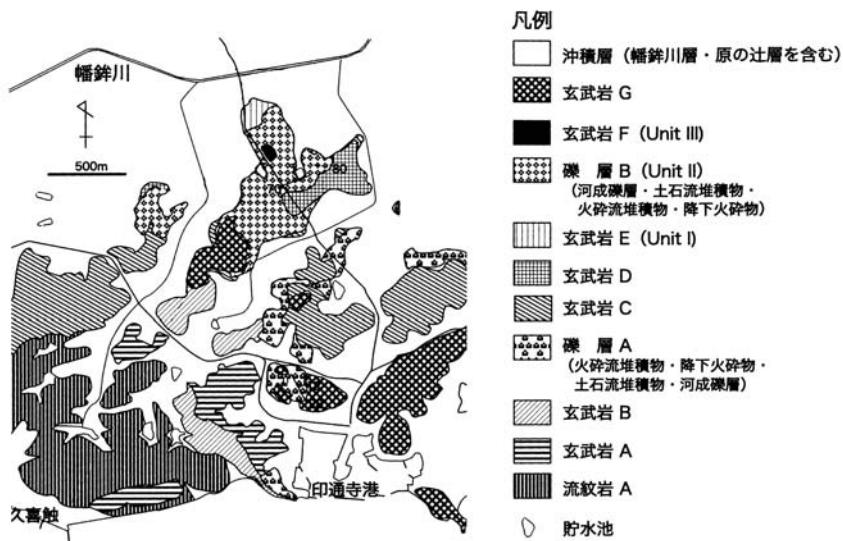


図2 原の辻遺跡周辺の地質図（長岡ほか2005改変）

ジカの化石骨を産出することで知られる下部の幡鉾川層とその上位に堆積する弥生時代以降の環濠等が構築された原の辻層の2層からなる。両層とも稻田らによって命名された（稻田編1998）。

### ①幡鉾川層

幡鉾川層は、原の辻ガイダンス横の津合橋付近から下流の田川渡橋付近の幡鉾川沿いを模式地とする。層の厚さは3m以上であるが下限が確認されておらず不明である。本層の下部は、やや固結した玄武岩を主体に安山岩・流紋岩・スコリアの礫層で、一部に砂の多い部分をラミナとして挟んでいる。こうしたラミナは東側に傾斜していることから西側からの流れによる堆積と思われる。

幡鉾川層の最上部には細礫の固結した部分が2~3cmあり、上面は侵食面となっており、この上に沖積層である原の辻層が不整合に堆積する。固結した部分の下位に青灰色を基調としたやや粗い砂層がある。この層には時折トラフ型斜交層理がみられることから河川堆積物と考えられる。この層中からナウマンゾウ・ヤベオオツノジカの化石が多数出土している。

出土した哺乳類化石は49点がリストされている。出土地点は津合橋付近から田川渡橋までの500m以上の範囲に広がっており、おおきく3地点とすることができます。その産状は、河川堆積と思われる砂層もしくは砂礫層から出土しており、河川によって運搬され堆積した可能性が高い。ナウマンゾウは、保存状態の良好なものが臼歯6点、下顎骨2点で、遺存状態の悪いものが多い。象牙質・セメント質が藍鉄鉱に置換しているものもみられる。ヤベオオツノジカは、角が3点、角の指状突起の破片2点と右踝骨。下顎骨が出土している。

本層からは化石化していない木材も出土している。その木片の<sup>14</sup>C年代値が公表されている。 $39920 \pm 440$ yBP(Beta-91193)という（古環境研究所1998）。こうしたことから幡鉾川層から産出する動物群

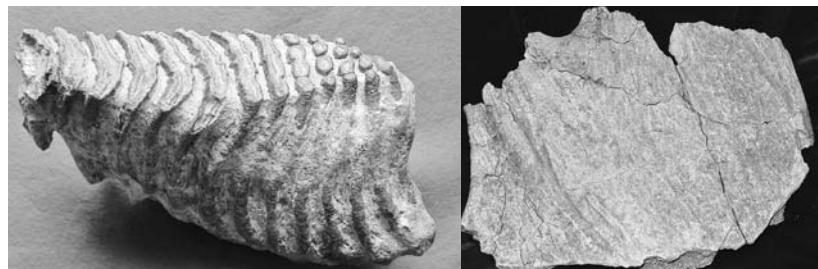


図3 ナウマンゾウ臼歯

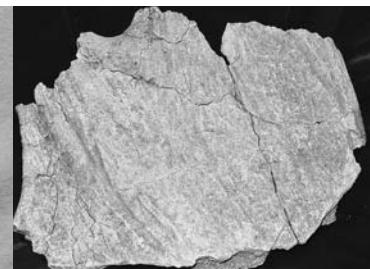


図4 ヤベオオツノジカ角

の年代は後期更新世と考えられる。

### ②原の辻層

原の辻層は、幡鉾川層と模式地を同じくする。層の厚さは3m以下である。層相は地点によって異なるが、泥層～シルト層を基本として、砂質の部分も介在する。木材等の有機質を多く含む部分もある。植物痕跡もみられることから、原の辻層の形成は、湖沼堆積もしくは河川堆積が繰り返し行われたことよると考えられる。現在の幡鉾川は下流部で玄武岩台地が迫る狭窄部となっており、そこを通つて幡鉾川は海に注ぐ。この狭窄部は両側とも地すべりになっている。ボーリング調査によつても、基盤の壱岐層群の泥岩、砂岩を覆つて、地表から深度11mまで地滑り移動体の崩壊堆積物が確認されている（長崎県壱岐支庁1991）。長岡は、地質情報が乏しいため、断定はできないと断りながら、地すべりや人為により幡鉾川が堰止められて上流側に湿地が出現し、そこに原の辻層が堆積した（長岡ほか2005）と指摘した。

長岡らは、原の辻層の形成年代を模式地で得られた<sup>14</sup>C年代を根拠にして $4200 \pm 40$ yBP (GX-24661、長岡未公表資料)、つまり縄文時代後期以降に堆積した想定する。ところで今年の調査である川原畑

1 b 区は津合橋から東へ200mほど離れた地点である。この区の28層から得られた炭化物の補正<sup>14</sup>C年代は  $6420 \pm 40$  yBP (Beta - 371844) であった。28層の下位には原の辻層が1 m弱堆積していることからこの地区の原の辻層の堆積年代はもっと古くなる。

原の辻層の形成はおよそ次のようになる。

後期更新世に形成された幡鉾川層の上面を浸食するイベントが少なくとも  $6430 \pm 40$  yBP 以前に起こったことは確実である。周辺地

形の分析によって盆地から海への流入は幡鉾川河口しか考えられないことから、長岡の指摘するように鶴亀地区の下流部が地すべりによって堰き止められてできた後背湿地に湖沼堆積による粘土・シルト層が堆積し、地すべり部分が開析され、海とつながった際には河川堆積と思われる砂質土層堆積したと考えられる。こうした堆積環境の違いは地すべりの頻度に関係するものと思われるが詳細は不明である。しかし複数回繰り返し生じた事象であろう。原の辻層の形成は、石田高原地区で弥生前期末に環濠の構築が開始されるのでそれまでには終焉したものと思われる。幡鉾川が當時海と通じるようになり、中期以降低地部への進出が顕著になり、川原畑地区に見られるように居住空間が形成したものと思われる。

#### [引用・参考文献]

- 長崎県土地対策室1978『土地分類調査 勝本』長崎県。  
 長崎県壱岐支庁・西日本技術開発株式会社1991『鶴亀地区地すべり調査委託報告書』  
 稲田孝司編1998『長崎県壱岐幡鉾川周辺の第四紀哺乳動物化石とそれに関連する第四紀層』『旧石器時代動物化石共伴遺跡の探索とタフォノミー研究』平成7年度～平成9年度科学研究費補助金〔基盤研究(B) (2)〕研究成果報告書  
 稲田孝司・河村善也・樽野博幸2005「原の辻遺跡下層(幡鉾川層)の後期更新世哺乳類化石」『原の辻遺跡総集編I』原の辻遺跡調査事務所文化財調査報告書第30集、長崎県教育委員会。  
 長岡信治2005「原の辻遺跡周辺の地形地質」『原の辻遺跡総集編I』原の辻遺跡調査事務所文化財調査報告書第30集、長崎県教育委員会。

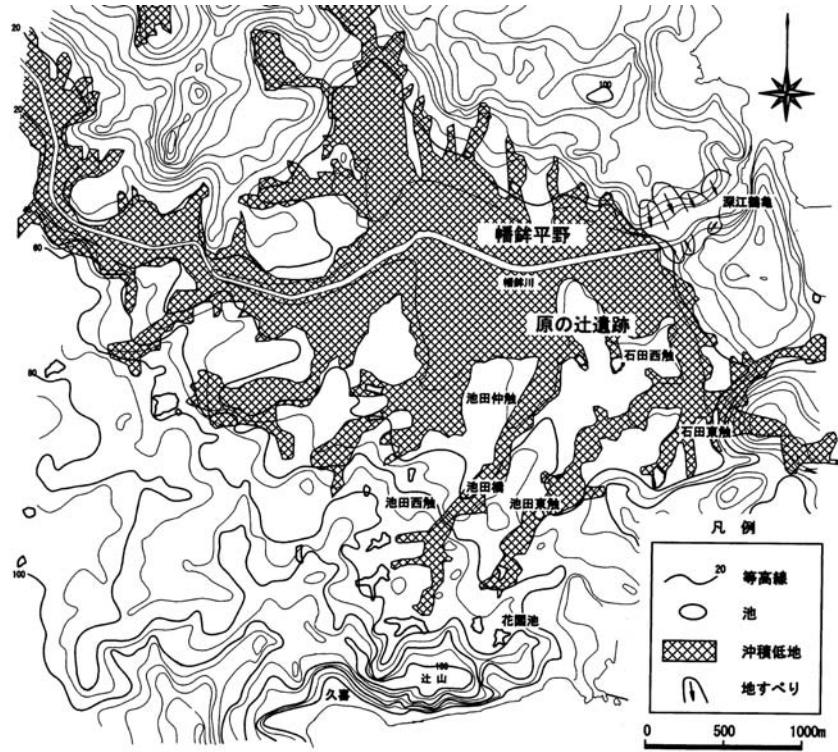


図5 原の辻遺跡周辺の沖積低地の分布（長岡ほか2005改変）

## 2. 歴史的環境

原の辻遺跡は深江田原平野に立地する約100haの広大な環濠集落遺跡である。ここでは、原の辻遺跡自体の歴史的な変遷について概観する。

### (1) 旧石器時代・縄文時代草創期

原の辻遺跡で最初に人類活動が確認されるのは旧石器時代ナイフ形石器文化期である。不條地区、八反地区、原地区、大川地区、柏田地区、池田大原地区、萱ノ木地区、原の久保地区、鶴田地区でナイフ形石器、剥片尖頭器、台形石器、石錐、抉入搔器などの遺物が出土している。遺構としては萱ノ木地区で落し穴状の土坑が1基発見されている。ナイフ形石器文化期における包含層が確認された地点の変遷はAT降灰直前の鶴田遺跡（萩原編年中期段階1）→AT降灰後の原3区（中期段階2）→萱ノ木地区（中期段階4）となる。このほか原位置から遊離した資料の中で時期が比較的明確なものとしては原の辻型台形石器、国府型、狸谷型ナイフ形石器、西北九州型角錐状石器が中期4期、基部裏面加工のナイフ形石器、枝去木型台形石器が後期段階2とみられる。原の辻遺跡ではAT降灰後に最初の人類の足跡がみられ、その後旧石器時代後・晩期まで連綿と継続している。

原の辻遺跡では川原畠地区、不條地区、八反地区、高元地区、原地区、芦辺高原地区、石田大原地区、大川地区、原ノ久保A地区で20点以上の細石刃、細石刃核が出土している。細石刃核には旧石器時代の野岳型が不在で、全てを縄文時代草創期の所産とみることができる。細石刃文化期の遺物は丘陵部での出土が激減し、低地部での出土量が丘陵部の5倍弱にのぼることから標高の低い地点への進出が進行したものと想定される。

### (2) 縄文時代

確実に縄文時代早期以降と考えられる遺物として、坂の下式土器、局部磨製石鎌、剥片鎌、石匙、楔形石器、鎌崎型スクレイパーが不條地区、八反地区、高元地区、石田高原地区、萱ノ木地区、石田大原地区、大川地区、原ノ久保A地区、原ノ久保B地区、池田大原地区、原地区で出土している。このほか多くの打製石鎌や磨石・凹石・敲石、石皿などが出土しているが弥生時代のものと判別が困難である。これまでのところ弥生時代以降の堆積層から出土しており、遺構等も確認されていない。時期としては坂の下式土器、剥片鎌、基部のみを研磨する局部磨製石鎌、鎌崎型スクレイパーなどから縄文時代後期前葉を中心とする時期に土地が利用されたことが想定されるが、石匙などの一部の遺物は縄文時代早・前期に位置づけられる可能性がある。これまで出土した縄文時代遺物は土器よりも石匙や石鎌などの石器が多く、原の辻遺跡周辺は一時的な野営地や狩猟場であった可能性が高いものと思われる。

### (3) 弥生時代・古墳時代

#### I期 原の辻遺跡形成期（弥生時代前期後葉～前期末）

弥生時代の原の辻遺跡における最古の遺物は板付II式であり、それ以前の遺物はほとんど知られていない。前項で述べたとおり縄文時代に拠点集落が確認されず、また弥生時代早期・前期中葉までの遺物もほとんど知られていないことから原の辻遺跡の集落は、前代から連綿と継承されたものではなく、弥生時代前期後葉に突如、誕生したものであるとみるのが穩当である。この段階の居住域は丘陵先端部の高元地区にみられ、東側低地部には大溝が掘削された。墓域は原地区に集約して形成され、後に大原地区に移動する。

## Ⅱ期 原の辻遺跡集落確立期（弥生時代中期初頭～中期中葉）

丘陵裾部に環濠が廻り、丘陵部全体で居住域がみられる。この時期には多くの外来系遺物がみられ北西低地部に多くの粘土帶土器が集中して出土する。西側低地部に船着き場が設けられる。北側丘陵の閨縁地区で列埋葬が確認されている。Ⅰ期から形成された大原地区の墓域が拡張する。

## Ⅲ期 原の辻遺跡集落第1次盛行期（弥生時代中期後葉～中期末）

Ⅲ期はⅡ期で確立した環濠集落が盛行する時期であり、集落自体の規模は拡張していく。丘陵頂部ではあまり建物が建てられず、公共性が高い空間であった。この最頂部を取り囲む形で有力者の居住域があったものとみられる。低地部では環濠が複雑化し、多重の環濠が掘りめぐらされる。小規模な青銅器・鉄器生産が行われていた可能性があるが、大規模な工房は確認されていない。この時期にも大陸系遺物は多く確認されており、対外交流の拠点であった。墓域は大原地区に加え、大川地区、原の久保地区、菅ノ木地区に拡がる。

## Ⅳ期 原の辻遺跡集落後退期（弥生時代後期前葉）

紀元前後を境に集落は一時衰退する。船着き場は機能を失っている。低地部で粒子の細かい灰白色の粘質土層が確認されており、大規模な水害に伴う低地部の水没によって衰退したという考えがある。墓域は大川地区、原の久保地区、菅ノ木地区で確認されていることから、集落の拠点がほかの地点に移動した可能性がある。

## Ⅴ期 原の辻遺跡第2次盛行期（弥生時代後期中葉～後期後葉）

環濠も再掘削され、丘陵部に生活拠点が戻る。丘陵頂部は祭儀場として利用された。居住区は祭儀場東側斜面に集中して築かれている。墓域はⅣ期に築造されたものが拡大する傾向にある。

## Ⅵ期 原の辻遺跡解体期（古墳時代初頭）

古墳時代初頭までは転地低地に環濠も存在し、環濠内で生活が営まれていたものの、その後、多重の環濠も埋没し、集落は解体する。

川道寛2014「旧石器時代～縄文時代草創期の原の辻遺跡」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』4

古澤義久・田中聰一2014「縄文時代の原の辻遺跡」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』4

松見裕二2013「原の辻遺跡の概要」『原の辻遺跡－原の辻遺跡出土資料集成－』壱岐市文化財調査報告書第21集

宮崎貴夫2008『原の辻遺跡壱岐に甦る弥生の海の王都』同成社

### 3. 民俗的環境

今次の調査では近現代の暗渠跡及び河川跡を確認したため、深江田原平野一帯における近現代の暗渠や河川について複数のインフォーマント（平触在住、筒城西触在住、1930～1940年代出生）から聞き取りを行った。

#### (1) 周辺の環境

川原畠地区には饅頭畠のほか小規模な水田があった。旧河川の川岸には樹木が生えていたが、その樹種はヤナギやポプラが多かった。

#### (2) 暗渠の目的と設置箇所

水田の剩余水を抜くために設置するのが基本である。このほか大水などのときに土地が崩れた際、排水が必要なときにも設置された。設置箇所は水が溜まりやすい水田の端の方で、特に排水路から離れた面に設置されることが多かった。

#### (3) 暗渠の構造

水田面から1m程度掘削し、数本の竹を設置し、女竹などで覆った。掘削時には法面をつける事例と傾斜をつけずに直線的に掘り込む事例の両者があるが、土質、掘削深度によって異なる。竹の節を抜くと通水が良いが、節を抜かなくても効果がある。唐津地域では、竹の上に糲を撒く事例がある。

#### (4) 竹製暗渠の年代

1970年代までは竹製の暗渠が設置されていた。その後、塩化ビニル製のパイプを使用するようになった。

聞き取りの結果と2b区で確認された1号暗渠跡の構造は非常に類似しており、層位上でも、周辺の住民の記憶においても当該暗渠跡が近現代のものであることが明確となった。

## II 調査の経緯と進行

### 1. 調査の経緯

原の辻遺跡は、壱岐在住の小学校教員松本友雄によって1904～1905年頃に発見された。1951～1964年には、九学会と東亜考古学会によって本格的な調査が行われた。1964年には、石田大原地区において耕地基盤整備に伴い長崎県教育委員会によって緊急調査が実施された。この時の調査では弥生中期を主体とする墓域が確認された。この発見に伴い、長崎県教育委員会は1975～1977年度に範囲確認調査を実施した。

幡鉢川流域総合整備事業に伴う1991～1992年の遺跡周辺の低地一帯を対象とした範囲確認調査を経て1993年以降、広大な面積の発掘調査が実施された。その結果、遺跡は100haの範囲にも及び、台地を多重環濠で囲む大規模環濠集落であることが判明した。1995年には、原の辻遺跡が『魏志』倭人伝に記された「一支国」の王都であることが確定し、1996年には、弥生時代中期前半に築かれた日本最古の船着き場遺構が発見された。この一連の発掘調査の成果により、1997年に原の辻遺跡は国史跡に指定され、2000年には特別史跡に指定された。2002年以降は、原の辻遺跡の集落構造の把握を目的とした調査研究事業が進められている。

今年度は、川原畠地区の調査を行った。川原畠地区では1992年に範囲確認調査が実施され、弥生時代の土坑群・柱穴群・溝状遺構が検出されている。この結果を踏まえ1994年に本調査が実施され、古代の道路状遺構1箇所、溝状遺構や旧河道が検出された（山下・川口1997）。2012年には弥生時代中期の河川、土坑・ピット群の広がりを究明することを目的とした調査が行われ、弥生時代中期の河川跡の延伸状況や、多数の土坑・ピット群の分布状況が確認された。（古澤・田口2013）。

今年度の調査は川原畠地区の河川や土坑・ピット群についてのさらなる解明を目的として実施した。

### 2. 調査の進行

2013年10月17日から12月27日まで調査を行った。10月17日と18日は調査区設定を行った。10月21日と22日の2日間で、バックホウにより表土及び客土の掘削を行った。10月21日から発掘作業員を雇用し、人力により発掘を進行した。11月7日には文化庁記念物課林正憲文化財調査官から現地指導を得た。11月25日、原の辻遺跡調査指導委員会が開催され、指導委員から現地指導を得た。11月27日には（株）火山灰考古学研究所早田勉所長から、11月29日には龍谷大学国際文化学部徐光輝教授から、12月12日には九州大学大学院理学研究院下山正一助教から専門的事項に関する指導を得た。

発掘調査期間中には、学生・生徒が発掘調査に参加した。11月13日及び11月20日の2日間、長崎県立壱岐高等学校東アジア歴史・中国語コース及び普通コースの生徒（3年生1名、2年生2名、1年生3名）が発掘調査実習として川原畠地区の発掘調査に参加した。また、龍谷大学大学院の留学生6名が11月13日から11月29日までの期間、2組に分かれて発掘調査に参加した。

調査終盤、12月14日に市民を対象とした現場説明会を実施した。12月16日には航空写真を撮影した。12月20日から12月27日までの5日間は発掘調査作業と併行してバックホウにより埋め戻しを行った。埋め戻しの際には、砂を満遍なく敷き、遺跡を保護した上で、鉄石灰を混ぜた土をバックホウ等で撒き固め耕作に支障が出ないよう配慮した。

古澤義久・田口貴久2013『原の辻遺跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第9集  
山下英明・川口洋平1997『原の辻遺跡・安国寺前A遺跡・安国寺前B遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告  
書第1集



図6 2013年度調査研究事業調査区位置図（1/8,000）

### III. 川原畠地区の調査

#### 1. 調査概要 (図3、表1)

当該地区は、東西方向に10m間隔で排水のための暗渠が設置されており、それをかわすために南北5m×東西20mの調査区を5箇所設定し、1区から5区の番号をつけた。

1区及び2区に関しては調査に伴う掘削深度が深くなることが予想されたため、周囲に1.25mの未掘削部分を設定し、階段掘りを行った。また、1区及び2区では中央に1mの未掘削部分を残し、西側をa区、東側をb区とした。その結果、1a区、1b区、2a区、2b区については南北2.5m×8.25m、について調査することとなった。

一方、3区～5区では遺構面までの深度が浅いので、調査区全面を掘削した。

調査は、重機を使い表土及び客土を除去した後人力で掘削を行った。1a区では、弥生時代の河川跡、溝2条を検出した。1b区では、弥生時代以前の堆積層のみが確認され、遺構は確認されなかつた。2a区では弥生時代の河川跡が検出された。2b区では近世以降の河川跡及び暗渠が確認されている。3区では弥生時代の堅穴建物跡、土坑、ピットが検出された。4区では調査区中央で近世以降の堆積土がみられたが、それ以外の部分では弥生時代の土坑、ピットが確認された。5区では調査区東側で近世以降の堆積土がみられたが、それ以外の部分では弥生時代の土坑、ピットが認められた。

調査終了後は、掘削面に砂を30cm程度、敷いた上で埋め戻し、遺構等の保護を行った。

表1 2013年度川原畠地区調査区地点一覧

		X	Y
1区	北西杭	84446.923	23474.800
	北東杭	84450.884	23494.402
	南東杭	84445.985	23495.393
	南西杭	84442.021	23475.781
2区	北西杭	84451.197	23445.372
	北東杭	84455.150	23464.973
	南東杭	84450.255	23465.965
	南西杭	84446.298	23446.352
3区	北西杭	84457.024	23423.780
	北東杭	84460.969	23443.389
	南東杭	84456.075	23444.376
	南西杭	84452.123	23424.774
4区	北西杭	84463.869	23407.095
	北東杭	84467.831	23426.696
	南東杭	84462.939	23427.695
	南西杭	84458.972	23408.087
5区	北西杭	84470.807	23441.417
	北東杭	84474.745	23461.023
	南東杭	84469.874	23461.999
	南西杭	84465.904	23442.400

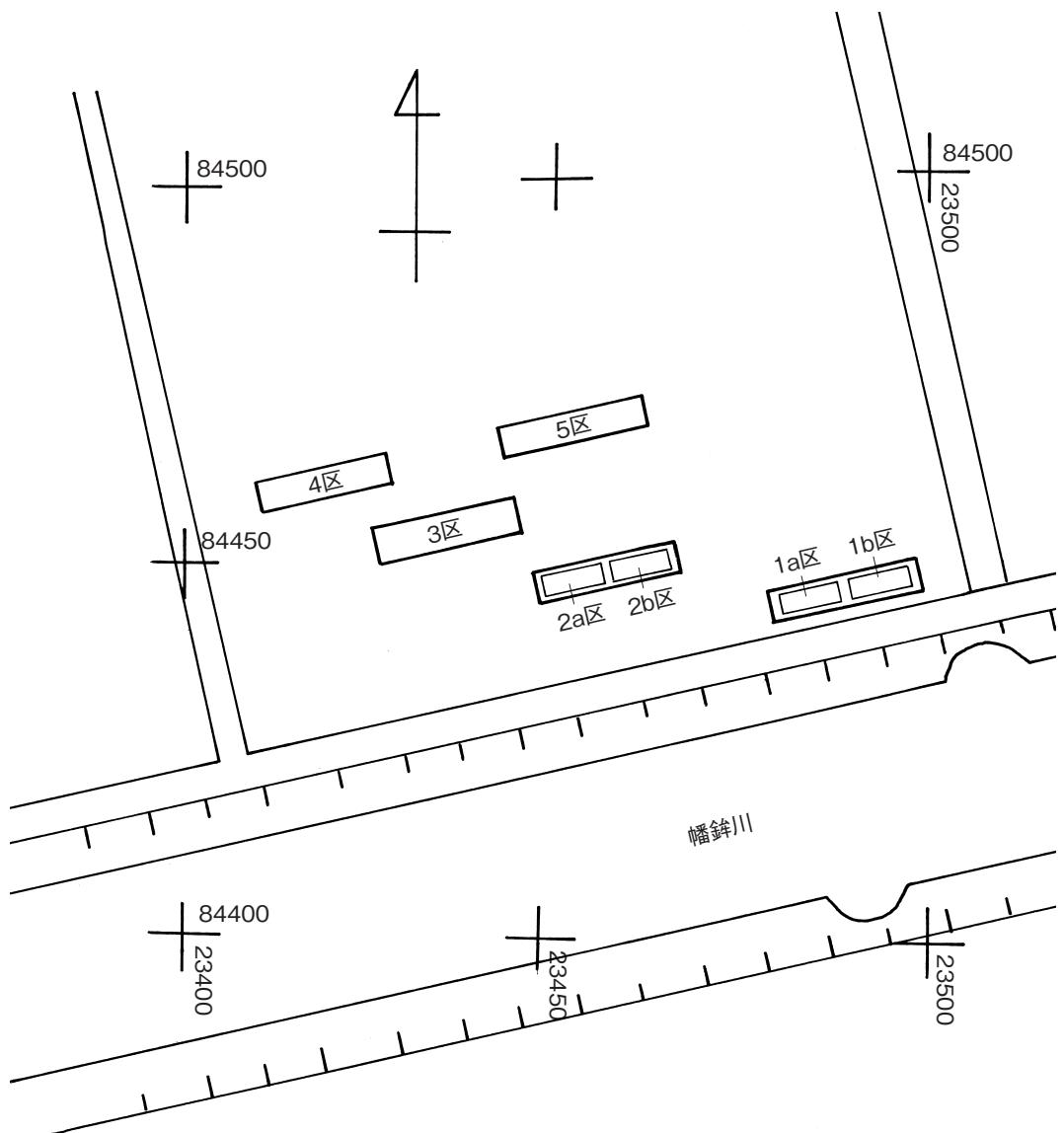


図7 川原畠地区調査区位置図 (1/1000)

## 2. 土層

### (1) 1区 (図8)

- 1層：にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘質土。粘性強い。しまり普通。やや砂混じり。
- 2層：灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土。粘性やや強い。炭化物を含む。1号溝埋土。
- 3層：暗灰黄色 (2.5Y4/3) 粘質土。粘性やや強い。しまり強い。やや砂混じり。
- 4層：暗褐色 (10YR3/3) 粘質土。粘性やや強い。2号溝埋土。
- 5層：灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土。粘性やや強い。しまりやや強い。橙色 (5 YR6/8) が多く斑に混じる。
- 6層：黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土。粘性強い。しまりやや強い。炭化物多く含む。橙色 (5 YR6/8) が多く斑に混じる。
- 7層：暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質土。粘性強い。しまりやや強い。炭化物を含む。
- 8層：暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質土。粘性強い。しまりやや強い。炭化物を含む。7層と比べやや明

るい色調を呈する。

- 9層：黄灰色（2.5Y4/1）粘質土。粘性強い。しまりやや強い。炭化物を含む。
- 10層：暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質土。粘性強い。しまりやや強い。炭化物を含む。
- 11層：灰黄色（10YR4/2）粘質土。粘性強い。しまり強い。
- 12層：灰黄色（10YR4/2）粘質土。粘性強い。しまり強い。
- 13層：オリーブ褐色（2.5Y4/4）粘質土。粘性普通。しまり強い。褐色（7.5YR 4／4）を斑に含む。
- 14層：暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土。粘性強い。しまり強い。粒度は細かい。
- 15層：暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土。粘性強い。しまり強い。14層とほぼ同質であるが、やや暗い色調で炭化物を含む。
- 16層：黄褐色（2.5Y5/3）粘質土。粘性強い。しまりやや強い。黄褐色を斑に多く含む。
- 17層：灰褐色（5Y5/3）粘質土。粘性強い。しまり強い。黄褐色を斑に多く含む。炭化物をやや多く含む。
- 18層：暗灰黄色（2.5Y5/3）粘質土。粘性強い。しまりやや強い。
- 19層：暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土。粘性やや強い。しまり強い。
- 20層：灰色（5Y5/1）粘質土。粘性強い。しまりやや強い。炭化物含む。大きな自然木を含む。下面で砂が検出された。
- 21層：灰色（5Y5/1）粘質土。粘性やや強い。しまり強い。橙色（5YR6/8）を斑に含む。粒子が小さい。
- 22層：黄褐色（2.5Y5/3）粘質土。粒子が極めて小さく粘性に富む。小礫等を含まない。あまりしまりがない。
- 23層：灰色（7.5YR6/6）砂質土。22層よりしまりがよく粘質も強い。
- 24層：にぶい赤褐色（7.5YR5/3）粘質土。極めて粘性が強く、しまりもよい。
- 25層：暗灰色（7.5YR7/1）粘質土。極めて粘性が強く、しまりもよい。
- 26層：灰白色（7.5YR7/3）砂質土。やや大きめの白色砂粒子を多く含む。
- 27層：暗橙色粘質土。粘性に富む。
- 28層：暗灰白色（10YR6/1）砂質土。部分的に粗い砂粒が混じる。
- 29層：暗褐色（7.5YR5/8）砂質土。粘性に乏しい。
- 30層：暗灰白色（5B4/1）シルト質土。レンズ状に入る。粘性に乏しい。
- 31層：灰白色粘質土。極めて粘性が高く、しまりが強い、東側に厚くなる傾向。
- 32層：黄褐色粘質砂。しまり強い。鉄分の沈着がみられる。液状化現象の痕跡がみられる。
- 33層：明黄褐色砂質土。極めて堅く固結している。
- 34層：青灰色砂質土。白い砂粒を多量に含む。自然木がみられる。下部は固結している。
- 35層：黄褐色砂礫。固結した砂礫。1～2cm大の礫を多量に含む。
- 36層：暗灰褐色砂礫。極めて堅く固結している。多量の礫を含む。

2層は1号溝の埋土で、4層は2号溝の埋土である。5～20層は弥生時代中期以降の河川堆積土であり、出土遺物は土器など弥生時代遺物に限定される。22層は1a区東側及び1b区全面にひろがる

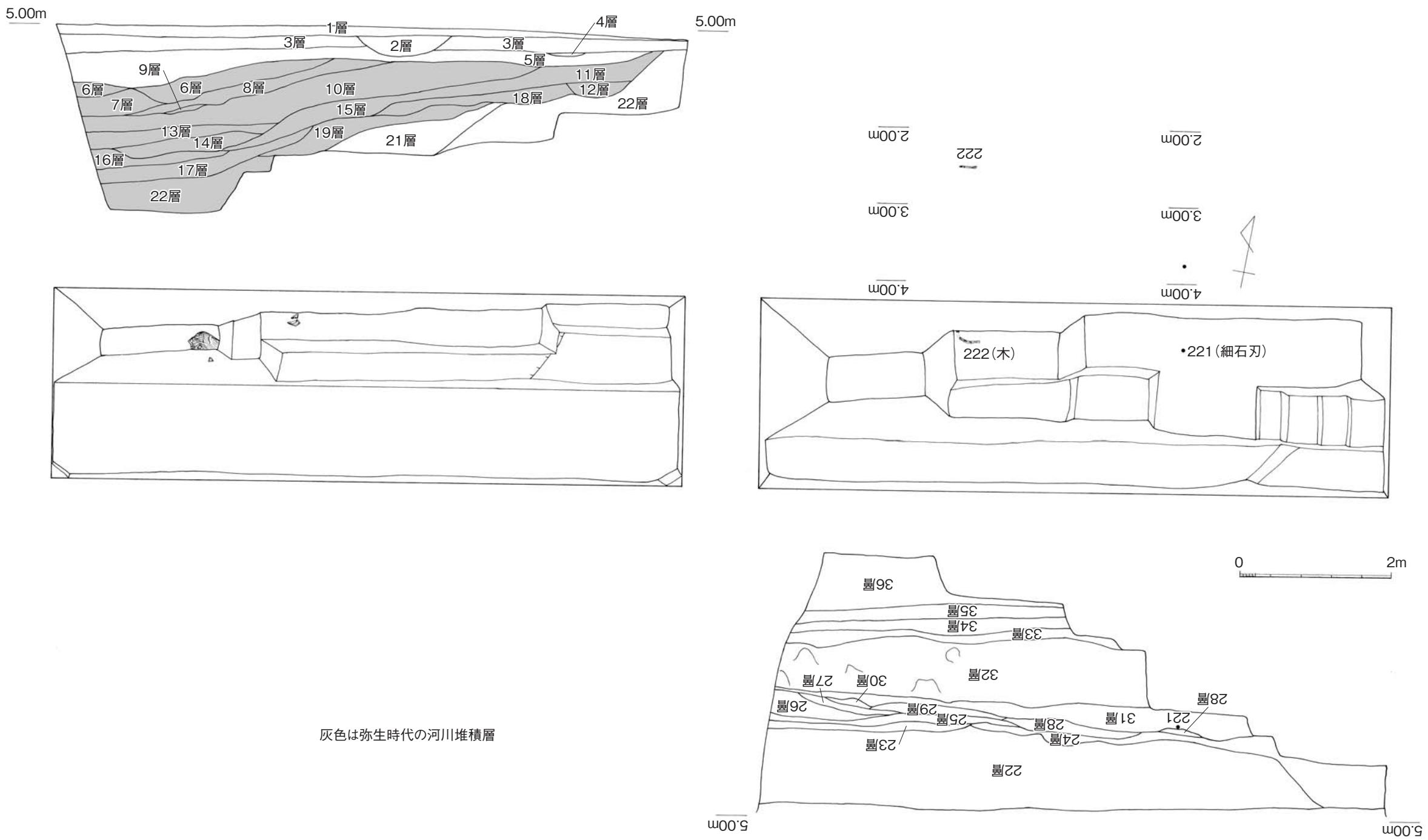


図8 1区平面図・土層図 (1/60)

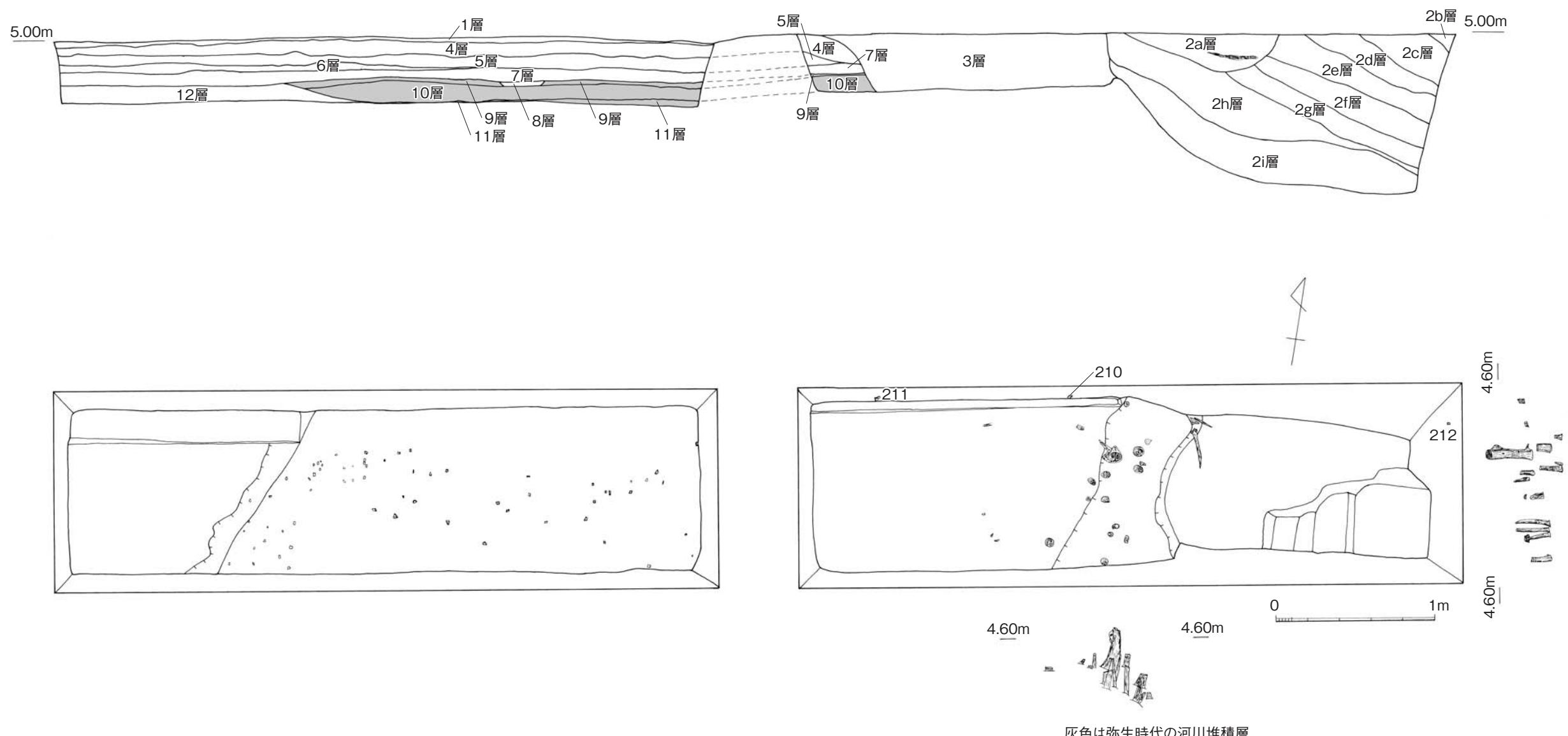


図9 2区平面図・土層図 (1/60)

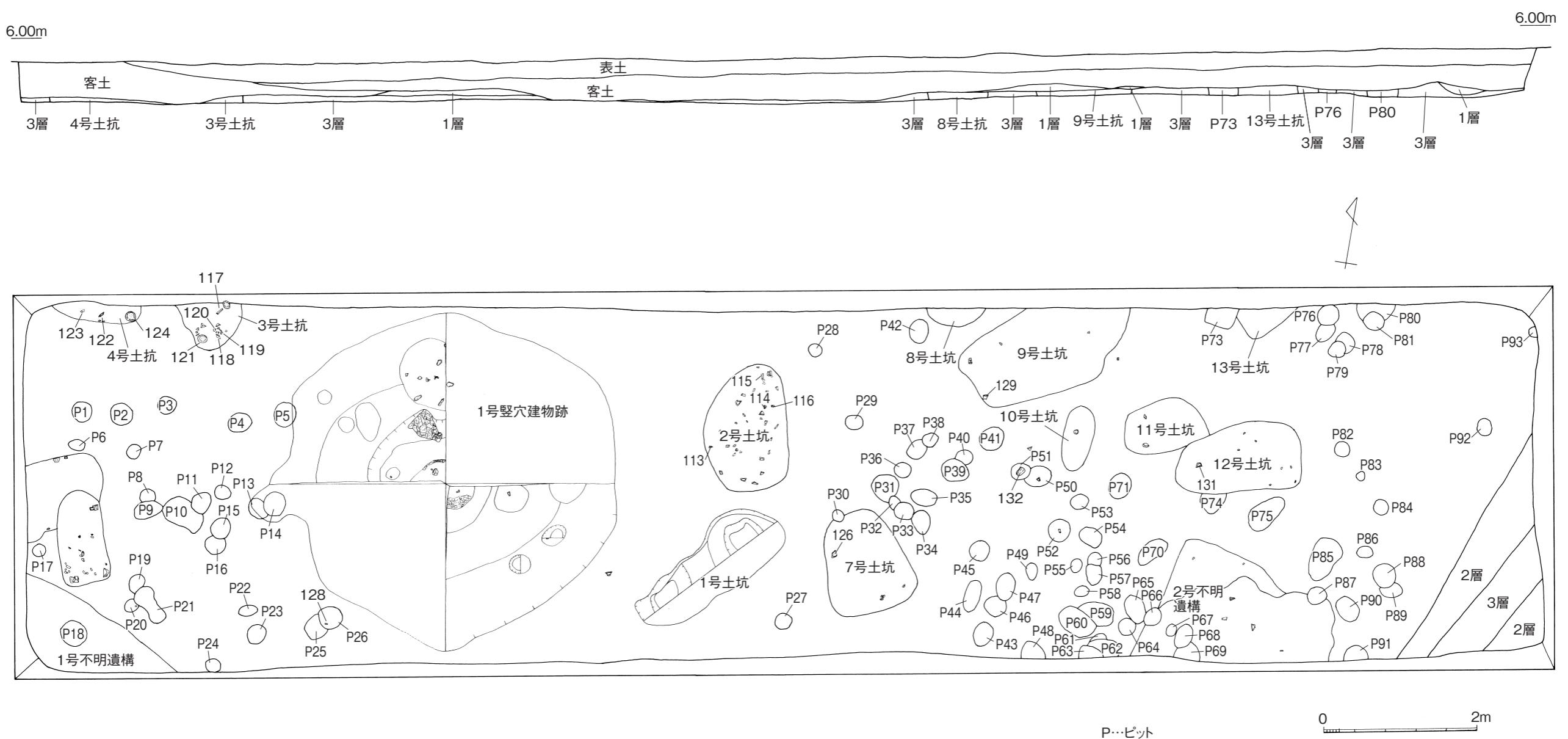


図10 3区平面図・土層図 (1/60)

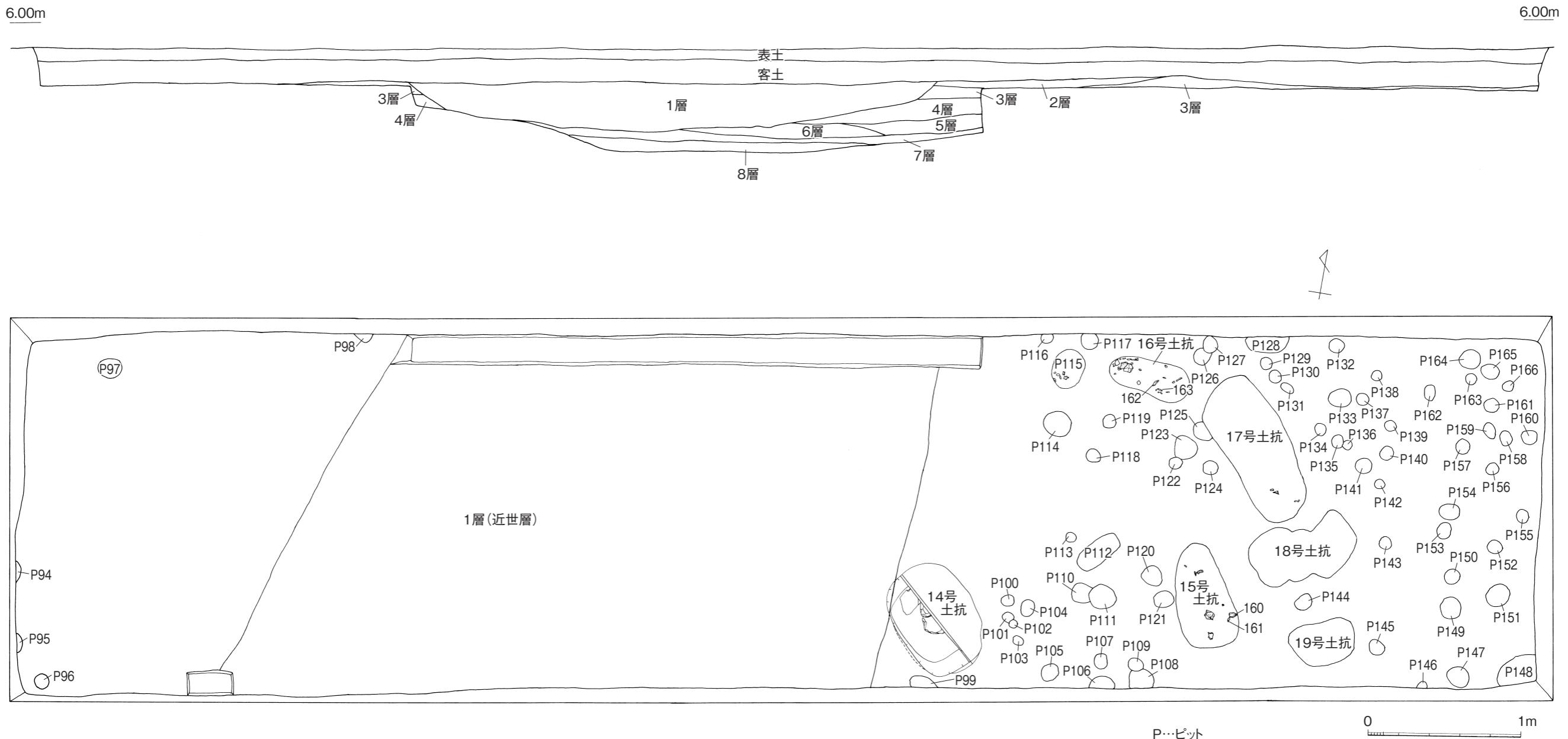


図11 4区平面図・土層図 (1/60)

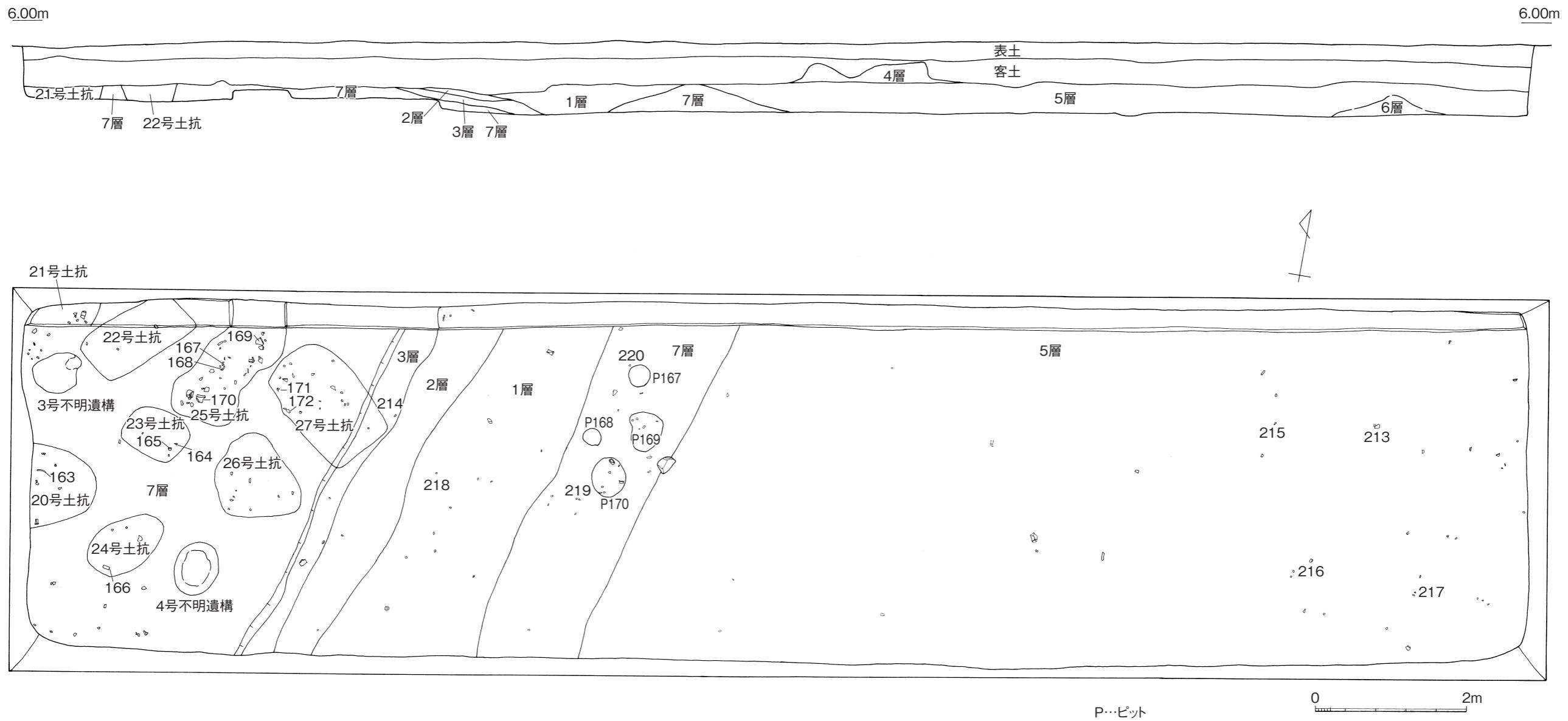


図12 5区平面図・土層図 (1/60)

弥生時代以前の無遺物層で、比較的均質な層が厚く堆積しており、湖沼堆積などが成因として考えられる。26~31層は砂層で細石刃が1点出土した。この層は縄文時代草創期以降弥生時代以前の河川堆積層である。32層では液状化現象がみられるのが特徴である。34層では自然木が確認されている。34層以下の層は更新統であるものとみられる。

## (2) 2区(図9)

- 1層：灰褐色（7.5YR4/2）粘質土。粘性やや強い。5mm程度の黒褐色が斑に多く含まれる。
- 2a層：黒褐色（10YR3/2）粘質土。
- 2b層：暗褐色（10YR3/3）粘質土。
- 2c層：にぶい赤褐色（5YR4/4）粘質土。
- 2d層：黒褐色（7.5YR3/2）粘質土。
- 2e層：灰オリーブ色（5Y6/2）粘質土。
- 2f層：灰褐色（7.5YR4/2）粘質土。
- 2g層：黄褐色（2.5YR5/4）粘質土。
- 2h層：黄褐色（2.5YR5/3）粘質土。
- 2i層：にぶい黄褐色（10YR5/3）粘質土。
- 3層：暗褐色（10YR3/3）粘質土。近世磁器を含む。
- 4層：灰褐色（7.5YR4/2）粘質土。粘性やや強い。しまり強い。5mm程度の黒褐色が斑にみられる。
- 5層：灰褐色（7.5YR4/2）粘質土。粘性やや強い。しまり強い。4層とほぼ同質であるが、粒子が細かく、鉄分を含む。
- 6層：灰黄褐色（10YR4/2）粘質土。粘性やや強い。しまり強い。5層にやや類似するが、やや淡い色調を呈する。
- 7層：褐灰色（10YR5/1）粘質土。粘性やや強い。しまり強い。赤褐色の粒子（鉄）を多く含む。
- 8層：黒褐色（7.5YR3/2）粘質土。粘性やや強い。しまり強い。3号溝埋土。
- 9層：灰黄褐色（10YR4/2）粘質土。粘性やや強い。しまり強い。赤褐色や黒色の粒子を密に含む。  
河川堆積土。
- 10層：黒色（10YR2/1）粘質土。粘性強い。しまりやや強い。炭化物を多く含む。河川堆積土。
- 11層：暗褐色（7.5YR4/3）粘質土。粘性普通。しまり非常に強い。黒色・褐色が斑にみられる。
- 12層：褐色（7.5YR4/3）粘質土。粘性やや強い。しまりやや強い。

2a層～2i層は1939年に河川を埋め立てた造成土である。このうち2a層は暗渠を埋設した際の覆土である。3層は近世磁器が出土していることから近世以降の層である。4～7層は中世磁器が出土しており、中世層であるとみられる。8層は3号溝の埋土であるが、7層が中世層で、9層が弥生時代層とみられることから、弥生時代以降中世までの堆積であると考えられる。9層及び10層は弥生時代の河川堆積層である。12層は弥生時代以前の無遺物層である。

### (3) 3区(図10)

- 1層：褐灰色（10YR4/1）粘質土。粘性やや強い。しまり強い。
- 2層：褐灰色（7.5YR4/4）粘質土。3区東南隅で確認される近世以降の堆積土。
- 3層：褐色（7.5YR4/4）粘質土。粘性やや強い。しまりやや強い。弥生時代以前の無遺物層。

3層は弥生時代の基盤層であり、4区3層、5区7層と対応する。弥生時代の遺構は3層を掘っている。

### (4) 4区(図11)

- 1層：黄灰色（2.5Y3/1）粘質土。粘性やや強い。しまり強い。赤褐色が斑に混じる。近世以降の堆積土。
- 2層：灰黄色（10YR4/2）粘質土。粘性やや強い。しまりやや強い。1mm程度の砂粒をやや多く含む。
- 3層：褐色（7.5YR4/3）粘質土。粘性やや強い。しまりやや強い。粒子は比較的均一である。弥生時代以前の無遺物層。
- 4層：褐色（7.5YR4/3）粘質土。粘性やや強い。しまりやや強い。3層とほぼ同質であるが、粒子が細かい。
- 5層：褐色（7.5YR4/3）粘質土。粘性やや強い。しまり強い。黒褐色（7.5YR3/1）を非常に多く含む。
- 6層：灰褐色（7.5YR5/2）粘質土。粘性強い。しまり強い。
- 7層：褐色（7.5YR4/4）粘質土。粘性強い。しまり強い。
- 8層：灰黄褐色（10YR4/2）粘質土。粘性強い。しまり強い。

4区中央でみられる1層からは近世の擂鉢片が出土しており、近世以降の堆積土である。3層は弥生時代の基盤層であり、3区3層、5区7層と対応する。3層以下は弥生時代以前の無遺物層である。弥生時代の遺構は3層を掘っている。

### (5) 5区(図12)

- 1層：褐灰色（10YR4/1）粘質土。粘性普通。しまり非常に強い。赤褐色が斑に混じる。
- 2層：灰黄褐色（10YR4/2）粘質土。粘性普通。しまり非常に強い。1層とほぼ同質だが、粒子が細かい。
- 3層：褐灰色（10YR4/1）粘質土。粘性普通。しまり非常に強い。1層とほぼ同質だが赤褐色真混じらない。
- 4層：黒褐色（10YR3/2）粘質土。粘性やや強い。しまり非常に強い。
- 5層：暗褐色（7.5YR3/3）粘質土。粘性やや強い。しまり強い。粒子が比較的均一で細かい。
- 6層：暗灰褐色（10YR3/3）粘質土。粘性やや強い。しまり強い。
- 7層：褐色（7.5YR4/3）粘質土。粘性強い。しまり強い。粒子が比較的均一で細かい。

1～5層では近世陶磁・中世陶磁が出土しており、近世以降の堆積土である。6層は畝状にみられるが、5層との境界は明瞭ではない。7層は弥生時代以前の無遺物層で、3区3層、4区3層に対応する。弥生時代の遺構は7層を掘っている。

### 3. 遺構及び遺構に伴う遺物

今次の調査では、竪穴建物跡1基、土坑27基、ピット171基、不明遺構4基、溝3条、暗渠1基が確認された。

#### (1) 竪穴建物跡

1号竪穴建物跡（図13、カラー写真2、3）

##### 【調査】

3区3層で検出した。南北軸および東西軸により4分割した内、北西部と南東部の2箇所を掘削した。北東部と南西部については保護のため表面観察と遺物の収集に留め、掘削は行わなかった。

##### 【構造】

平面はほぼ円形に近く、南北軸445cm、東西軸449cmである。深さは中央の最深部で21cmである。上部は大きく後世の削平を受けたものとみられ、明確な下場はみられない。本来は検出規模よりも大きかったものと考えられる。

##### 【竪穴建物内堆積】

- ①層：にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土。粘性大。褐灰色（10YR4/1）を部分的に含む。また少量の黒色（10YR1.7/1）を含む。建物跡全面に広がる。
- ②層：黒褐色（10YR3/2）粘質土。粘性大。粒子・色調とも均質である。焼土塊含む。焼土の直上に堆積しており、掘り窪められた炉跡の埋土である。
- ③層：灰黄褐色（10YR4/2）粘質土。粘性大。にぶい黄褐色（10YR5/4）を斑に含む。黒色（10YR1.7/1）の炭化物と焼土塊を含む。焼土の直上に堆積しており、掘り窪められた炉跡の埋土である。  
2層より外側（北側）に堆積する。
- ④層：にぶい黄橙色（10YR6/3）粘質土。粘性大。建物跡西側に広がる。
- ⑤層：にぶい黄褐色（10YR6/4）粘質土。粘性大。弥生時代以前の無遺物層。3区3層に対応。

##### 【竪穴建物内で検出した遺構】

###### ・炉跡（カラー写真4）

1基確認した。直径約158cmの円形の竪穴が竪穴建物跡中央に設けられている。焼土塊が部分的に認められ、特に北側では焼土が面的に拡がっていた。焼土の面が炉床であったものとみられ、本来は、炉跡全体に焼土が拡がっていたものとみられる。焼土面の下は5層であり3区2層に対応する。焼土の検出される面の色調は、北側外側から土色①：にぶい黄褐色（10YR5/3）、土色②：灰黄褐色（10YR4/2）、土色③：褐灰色（7.5YR4/1）、土色④：褐灰色（7.5YR4/1）、土色⑤：褐灰色（7.5YR4/2）、土色⑥：にぶい褐色（7.5YR5/3）に黒色（7.5YR5/2）が混じるとなっている。炉跡北側には被熱礫が3点みられる。これらの被熱礫には、炉における支脚として使用されたものとみられる。炉跡北側焼土面直上で底部を欠損した壺が出土した。炉廃絶時に底部を欠いた壺を供献した可能性がある。

###### ・土坑・ピット（表2）

堅穴建物跡床面で土坑4基、ピット5基を検出した。このうちVI号ピット及びVII号ピットの2基について半截し、残りの土坑・ピットについては表面観察に留めている。土坑・ピットの諸属性は表2のとおりである。炉跡を中心に土坑やピットが設けられており、炉跡を切ることはないことから、炉跡での活動に伴う遺構である可能性がある。

#### 【遺物】(写真1、2)

##### ・②層(図14、15)

炉跡内の堆積土層である②層からは土器、石器、被熱石が出土した。遺物の諸属性については表4、5のとおりである。

1は須玖Ⅱ式の壺である。炉跡北側で出土した。頸部に2条、胴部に3条の突帯が廻り、口縁部には浮文がつく。この壺は削平のため口縁部の一部は欠損しているが胴上・中部の遺存は良好である。しかし、底部については1片も出土しなかった。出土状況としては2箇所の焼土面に間の炉床直上にやや斜めに置かれた状況であったことが観察されていることから、底部を打ち欠いておかれたものと考えられる(カラー写真5)。壺は本来、炉で火にかける土器ではないことから、炉跡廃絶時に底部を打ち欠き、供献したものである可能性が高い。そのような観点から壺内に充填された土を慎重に洗浄したが、何らの人工遺物・植物種子等は確認することができなかった。2は弥生時代中期後葉の鉢である。炉跡南側床面直上で出土した。3、4は被熱がみられる自然石である。いずれも被熱は1面で甚だしく、3と4は炉跡北側の炉床直上で出土したが、互いに被熱面を向かい合わせにした状況で出土した。原の辻遺跡をはじめとする壱岐島の弥生時代遺跡では石製の支石であるクド石が著名であるが、3、4とも定型化していない。ただし3の形状はクド石にみられる把手のような形態を示している。定型化されるクド石の祖形である可能性もある。5は凹石である。炉床直上で出土した。

##### ・①層(図16~20)

堅穴建物跡全面を覆う堆積土である①層からは土器、石器、被熱石、鉄器が出土した。出土状況としては大半の遺物が堅穴建物跡床面から少し浮いた状態で出土しているため出土遺物の多くは堅穴建物跡廃絶後の堆積により流入したものとみられる。

土器には甕、壺、袋状口縁壺、蓋、高杯などがみられる。甕には須玖Ⅱ式が主体を占めるが、一部に須玖Ⅰ式も含む。遠賀川以西系が多いが、44~46のように少量の遠賀川以東系(註1)が含まれ、

表2 1号堅穴建物跡土坑・ピット

遺構番号	調査区・層位	調査	平面形態	直径等		残存深	底面 標高	覆土
				長軸	短軸			
I号土坑	1号堅穴建物跡⑤層	未掘削	楕円形	99cm	—	—	—	黒褐色(5YR3/1)と褐色(7.5YR4/3)の斑の粘質土。黒色(7.5YR1.7/1)の炭化物混じり。粘性大。
II号土坑	1号堅穴建物跡⑤層	未掘削	楕円形	50cm	32cm	—	—	褐灰色(7.4YR4/1)粘質土。黒色(7.5YR1.7/1)の炭化物混じり。粘性大。
I号ピット	1号堅穴建物跡⑤層	未掘削	円形	18cm		—	—	褐灰色(7.4YR4/1)粘質土。黒色(7.5YR1.7/1)の炭化物混じり。粘性大。
II号ピット	1号堅穴建物跡⑤層	未掘削	円形	20cm		—	—	褐灰色(7.4YR4/1)粘質土。黒色(7.5YR1.7/1)の炭化物混じり。粘性大。
III号ピット	1号堅穴建物跡⑤層	未掘削	不整形	19cm	16cm	—	—	黒褐色(5YR3/1)粘質土。灰褐色(5YR4/2)が混じる。
IV号ピット	1号堅穴建物跡⑤層	未掘削	円形	46cm		—	—	灰褐色(7.5YR4/2)粘質土。粘性大。
V号ピット	1号堅穴建物跡⑤層	未掘削	円形	48cm		—	—	褐灰色(7.4YR4/1)粘質土。粘性大。
VI号ピット	1号堅穴建物跡⑤層	半截	楕円形	34cm	22cm	10cm	5.01m	黒褐色(7.5YR3/1)粘質土。黒色(7.5YR1.7/1)混じり。粘性大。
VII号ピット	1号堅穴建物跡⑤層	半截	楕円形	28cm	24cm	11cm	4.98m	黒褐色(7.5YR3/1)粘質土。黒色(7.5YR1.7/1)混じり。粘性大。

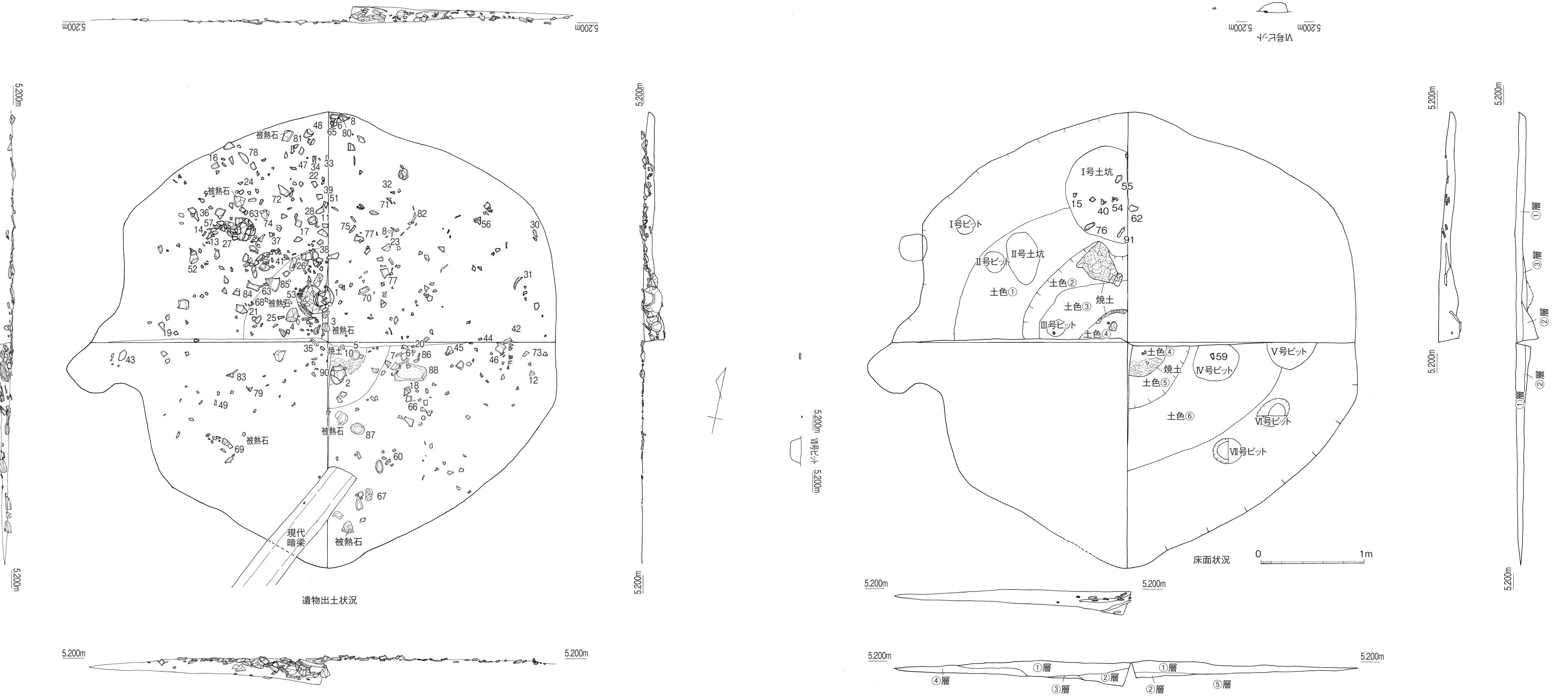


図13 1号竪穴建物跡 (1/30)

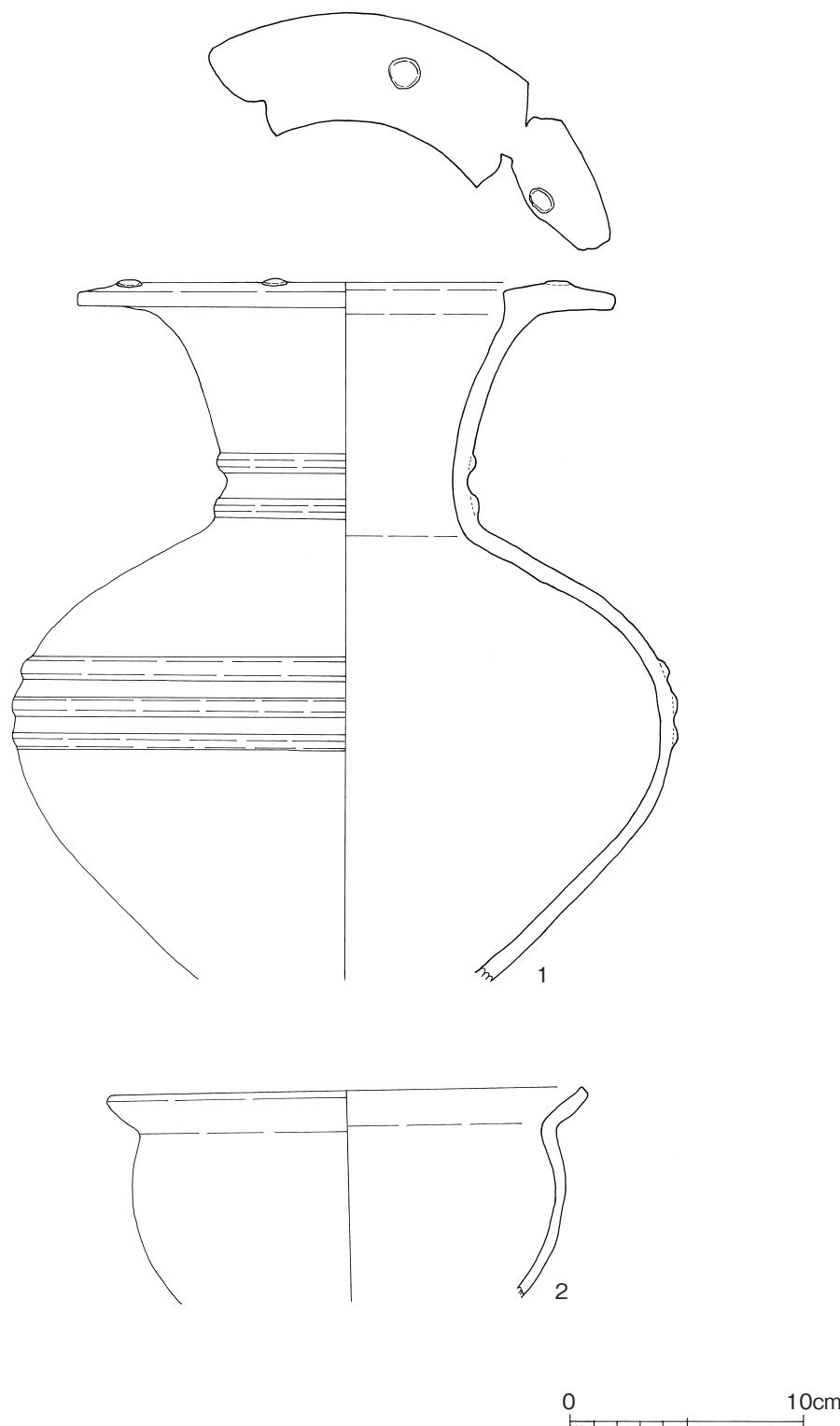
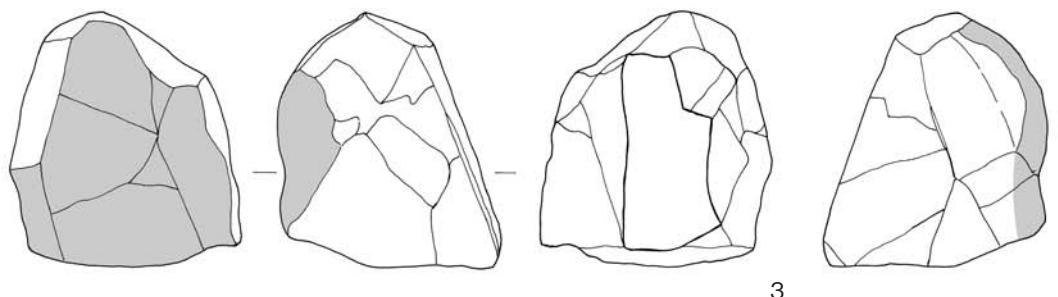
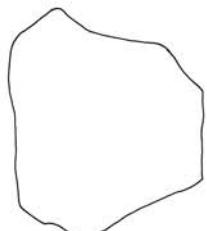


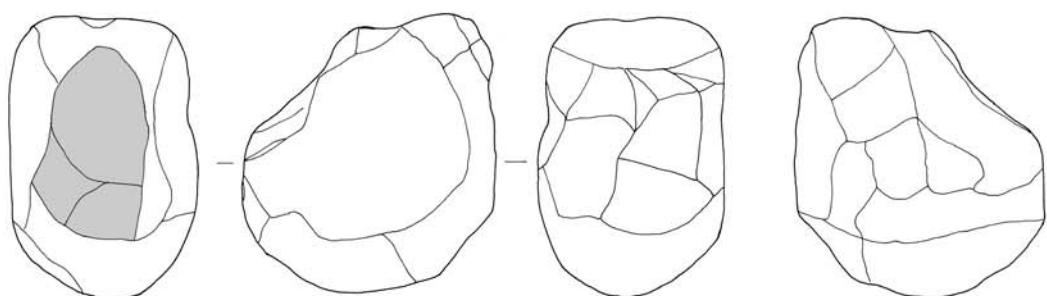
図14 1号竪穴建物跡②層出土遺物 1 (1 / 3)



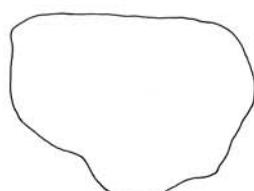
3



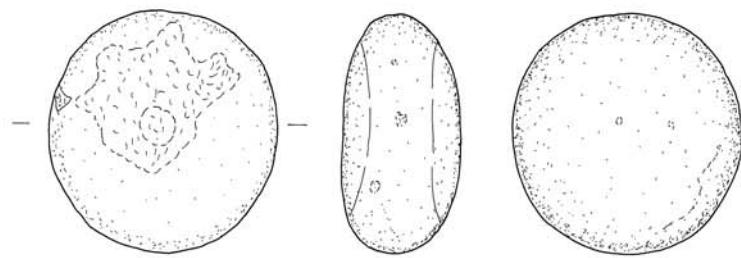
0 10cm  
3・4



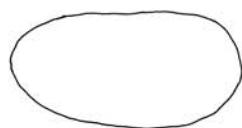
4



灰色は甚しい被熱部分



5



0 10cm  
5

図15 1号竪穴建物跡②層出土遺物 2 (1/4、1/3)

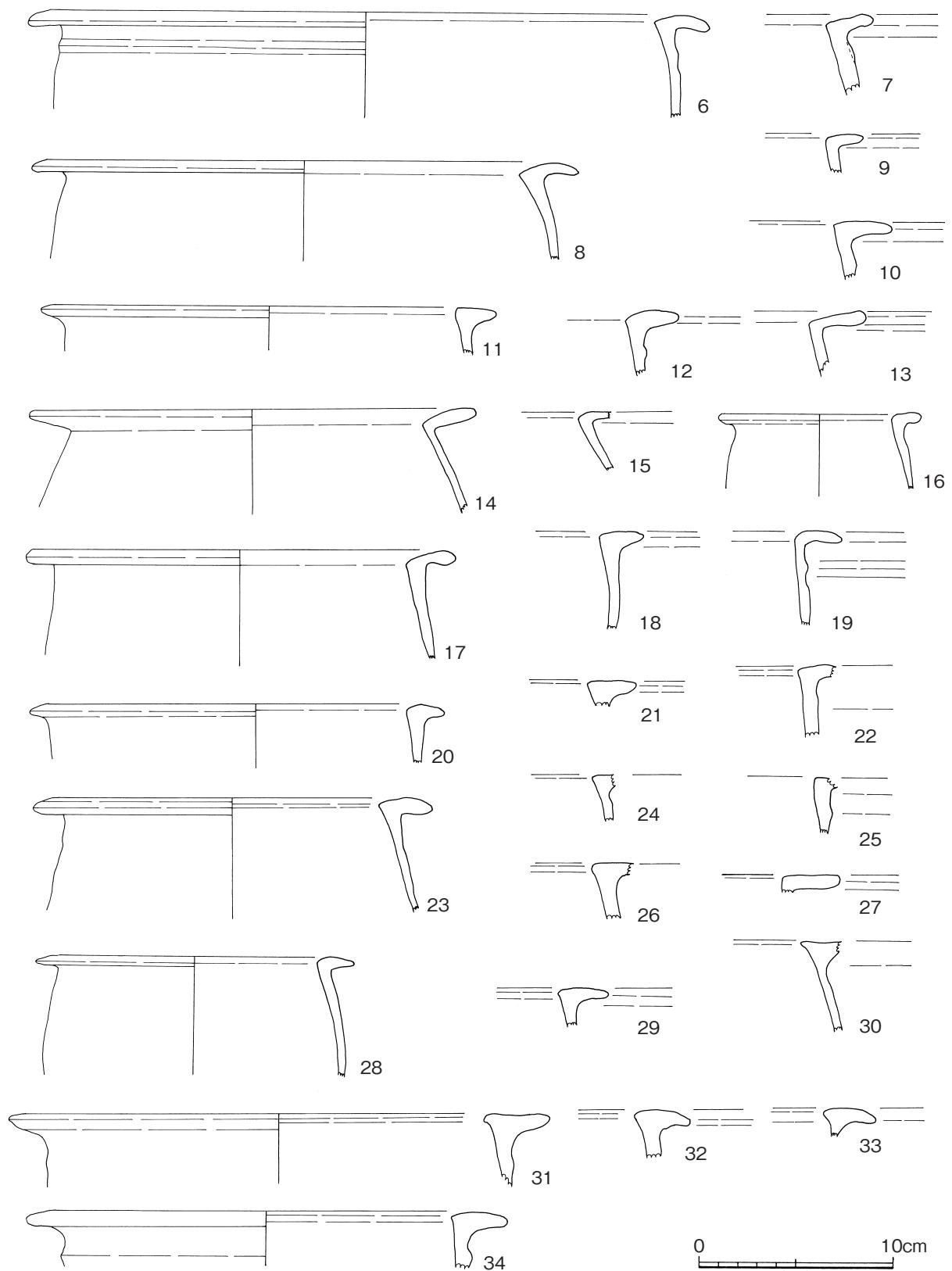


図16 1号竪穴建物跡①層出土遺物 1 (1 / 3)

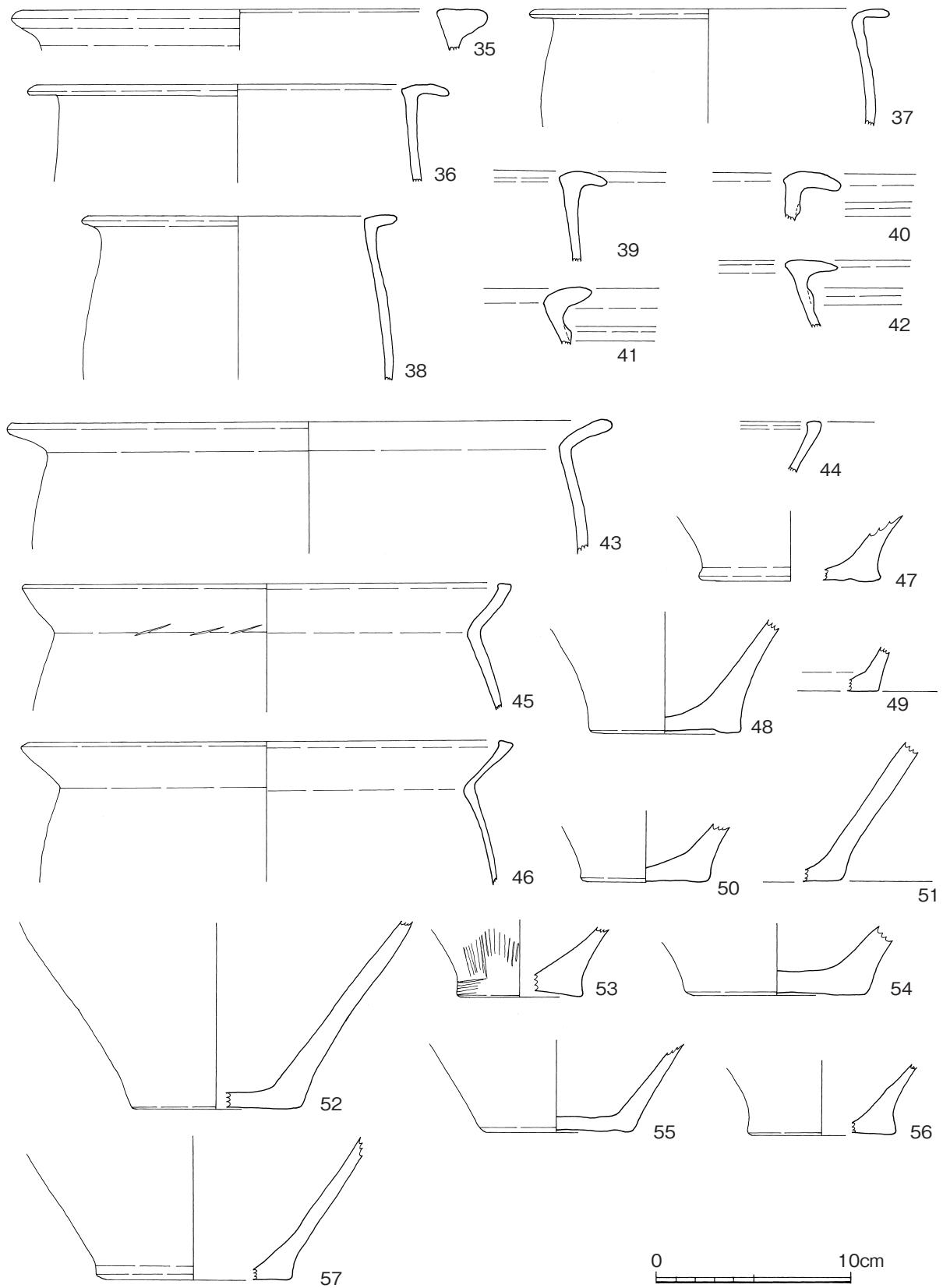


図17 1号竪穴建物跡①層出土遺物2 (1/3)

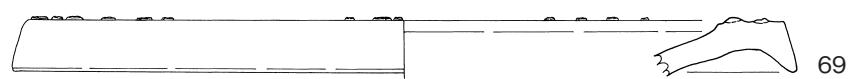
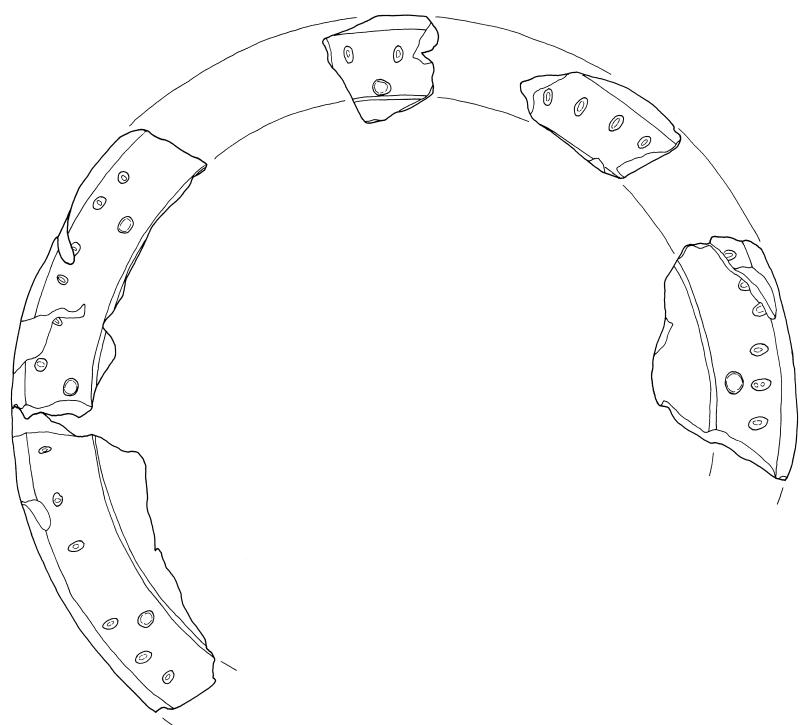
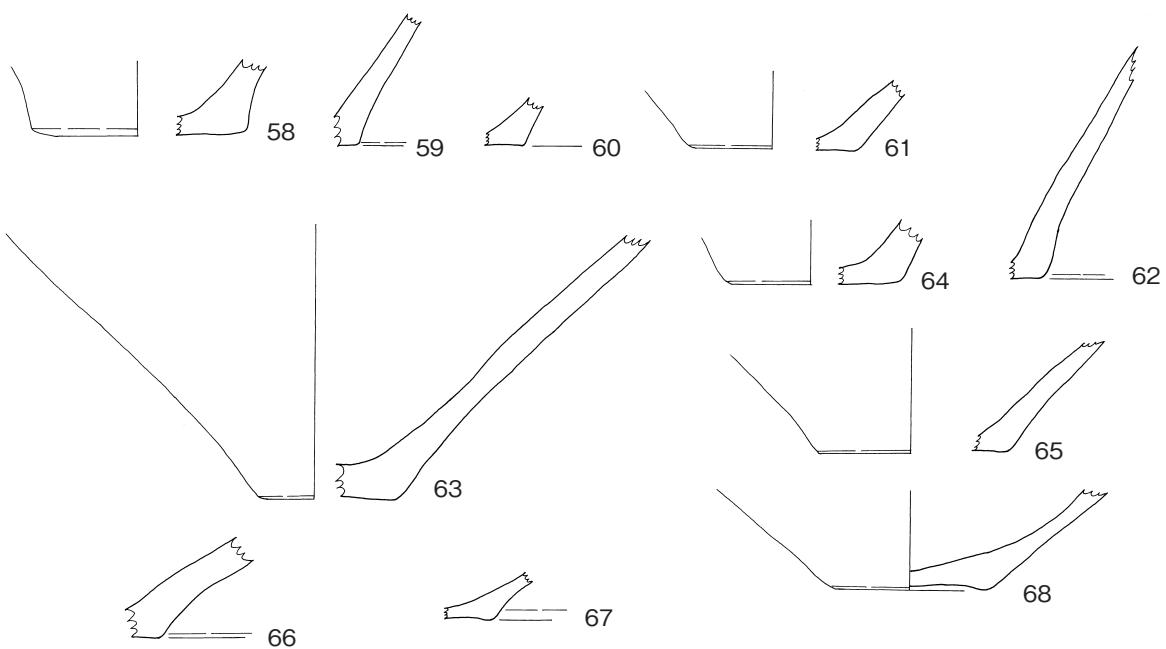


図18 1号竪穴建物跡①層出土遺物3 (1/3)

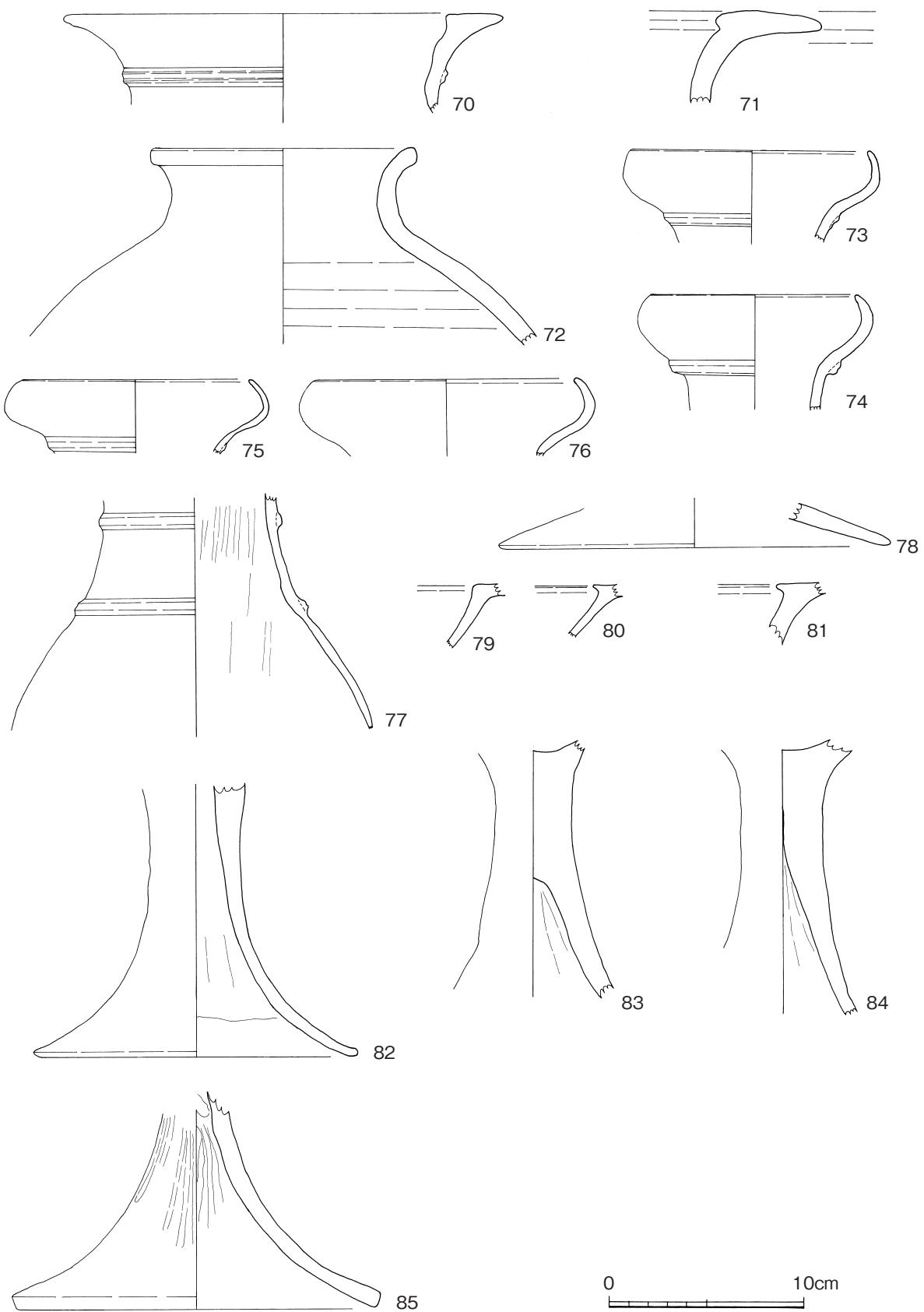


図19 1号竪穴建物跡①層出土遺物4 (1/3)

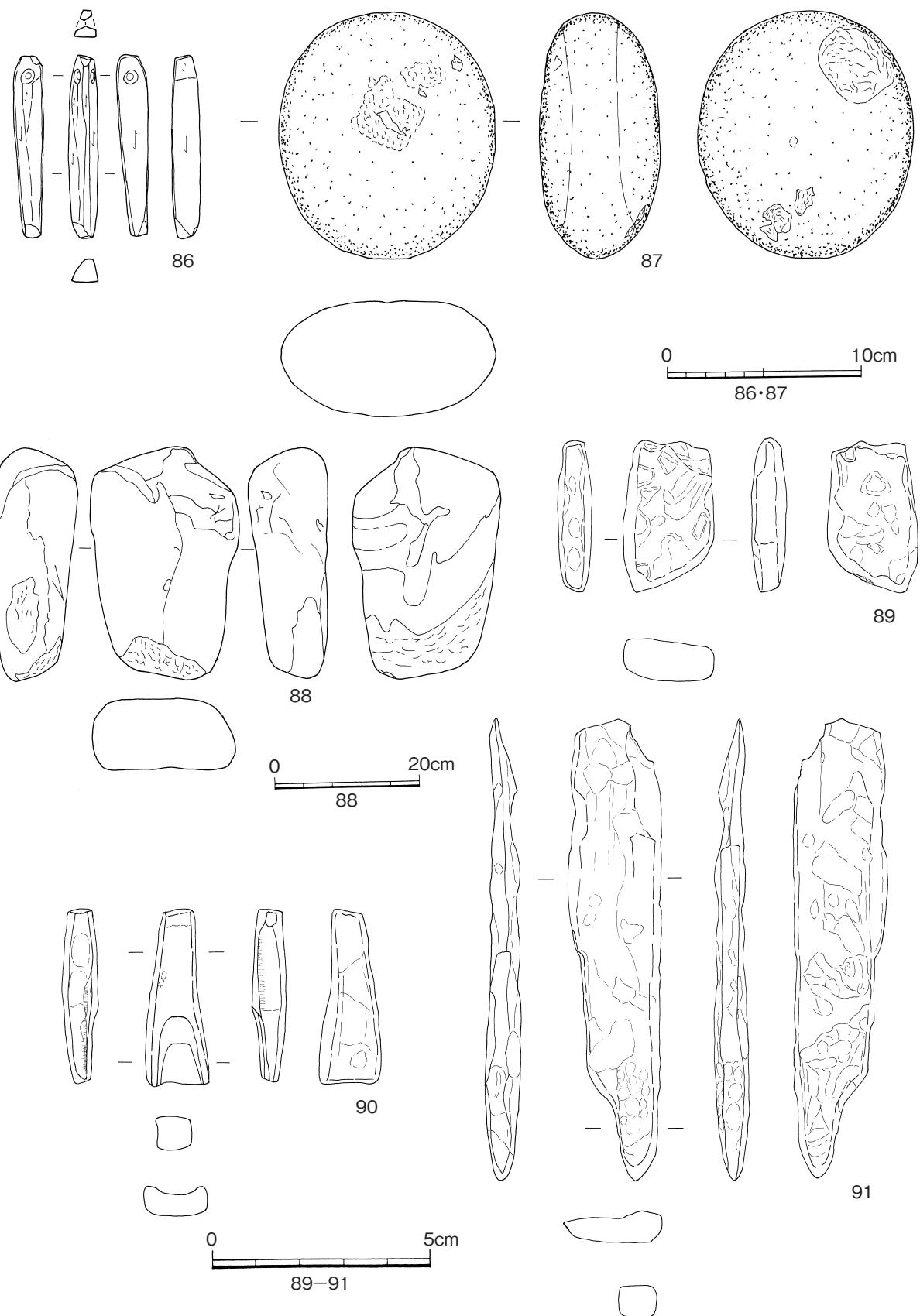


図20 1号竪穴建物跡①層出土遺物5 (1/3、1/8、3/4)

遠賀川以東系の口縁部個体比率は7.5%である。45の遠賀川以東系壺には口縁部から頸部にかけて約1.5cmの間隔で工具痕が廻る。

壺には須玖Ⅱ式の壺（70～72）が出土している。72は内面に粘土紐の痕跡が明瞭に残る。このほか西部瀬戸内系の壺口縁部（69）が1点出土した。口縁部に浮文が2列廻っており、外側の浮文は全周を廻る一方、内側の浮文は間歇的に配される。間隔から推測すると内側の浮文は8点配された可能性が高い。袋状口縁壺は口縁部が4点出土しており（73～76）、頸部・胴部片（77）も出土している。丹塗も認められる。

このほか蓋（78）と高杯（79～85）も出土した。

石器は錘または砥石、凹石、台石が出土した。86は断面三角形の錘または砥石である。研磨面が全周でみとめられる。外系8mm、内径4mmの両面穿孔の1孔が確認される。ほぼ欠損はないものとみられることから本来1孔であったと考えられる。86は石錘である可能性もあるが、研磨面が平らであることから持ち砥である可能性もある。持ち砥であった場合は刀子（削）などの小型の利器の研磨に用いられたものとも考えられる。87は凹石である。88は台石である。炉跡の東側で出土した。研磨面も認められるが、全面的ではない。

鉄器は形状が不分明である。89は鉄片である。90は半楕円形の窪みがみられる。袋状鋳造鉄斧の破片である可能性がある。91は刀子の可能性があるが明確ではない。出土位置は竪穴建物内I号土坑検出面であり、I号土坑に伴う可能性もある（カラー写真6）。

### 【時期】

竪穴建物跡の覆土、炉跡の覆土とともに須玖Ⅱ式が主体を占め、かつ最新遺物であり、加えて炉床直上出土遺物も須玖Ⅱ式であることから、竪穴建物跡及び建物跡内施設の使用年代・廃絶年代とともに弥生時代中期後葉であると考えられる。

### （2）土坑・不明遺構・ピット

3区3層では、土坑13基、不明遺構2基、ピット93基を検出した。4区3層では土坑6基、ピット74基を検出した。5区7層では土坑8基、不明遺構2基、ピット4基を検出した。土坑・不明遺構・ピットの諸属性は表3のとおりである。このうち1号土坑と14号土坑については半截した一方、残りの遺構については掘削せず、表面観察に留めた。土坑・不明遺構・ピットの検出面における覆土を表面観察すると次のとおり分類される。

- A……黒褐色（10YR 3／2）粘質土。しまり・粘性とも強い。炭化物を多く含む。
- B……暗褐色（10YR 3／3）粘質土。しまり・粘性とも強い。Aに比べやや明るい色調。
- C……暗褐色（10YR 3／4）粘質土。しまり・粘性とも強い。Bに比べ更に明るい色調。
- D……褐灰色（7.5YR 4／1）粘質土。部分的に黒色（7.5YR 2／1）を含む。炭化物を含む。
- E……にぶい黄褐色（10YR 7／2）粘質土。粒子が均質である。

### 1号土坑（図21、写真3、4）

#### 【調査】

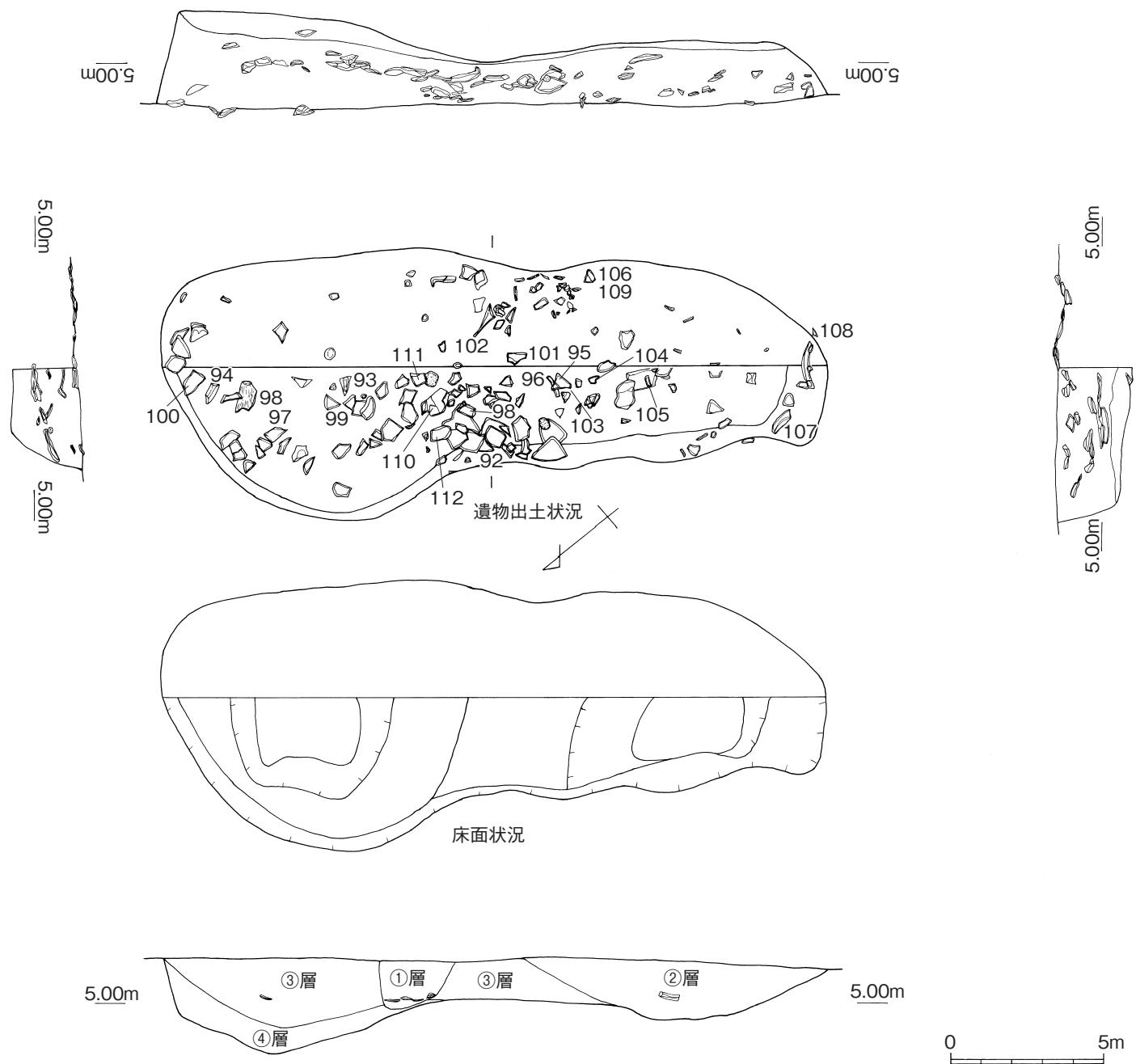


図21 1号土坑 (1/20)

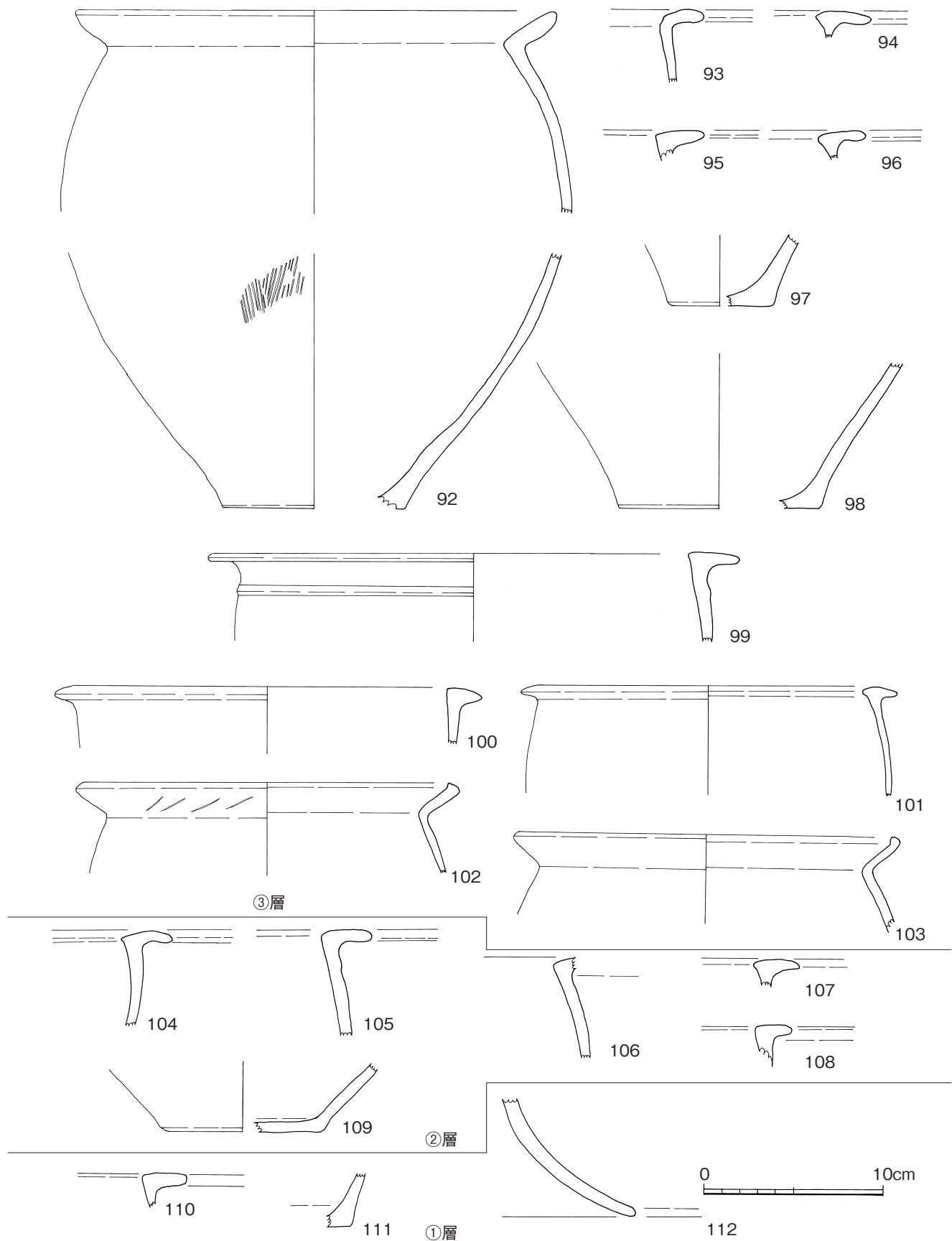


図22 1号土坑出土遺物 (1 / 3)

3区3層で検出した。1号竪穴建物跡の東側に位置する。長軸に沿って半截し、掘削を行わなかつた部分は表面観察と検出面での遺物収集に留めた。

#### 【構造】

平面は橢円形に近い不整形である。長軸218cm、最大短軸87cm、最小短軸63cm、残存深33cm、底面標高4.82mである。中央部がテラス状となっており、南北に2箇所の落ち込みがある。土層や中央部に遺物がみられることから、土坑が一度堆積した後、南側でさらに掘りなおされたものと考えられる。

#### 【土坑内堆積】

- ①層：褐灰色（5 YR4/1）粘質土。粘性大。黒色（7.5YR4/1）炭化物を多く含む。底面に土器が集中して出土する。第1次土坑堆積後、新たに掘られた第2次土坑の堆積土。
- ②層：褐灰色（7.5YR4/1）粘質土。粘性大。黒色（7.5YR4/1）炭化物を多く含む。第1次土坑堆積後、新たに掘られた第2次土坑の堆積土。
- ③層：にぶい褐（7.5YR5/3）粘質土。粘性大。④層に由来するとみられる黒褐色（5 YR3/1）粘質土が混じる。第1次土坑堆積土。
- ④層：黒褐色（5 YR3/1）粘質土。粘性大。黒色（7.5YR2/1）炭化物を多く含む。第1次土坑堆積土。

#### 【遺物】（図22）

遺物の諸属性については表4のとおりである。

- ・③層  
土器が出土した。器種としては甕がみられる。甕は須玖Ⅱ式を主体とし、少量の須玖Ⅰ式が混ざる。92は接合はしないが、胎土や出土位置から口縁部と胴部は同一個体であると判断した。遠賀川以西系（92～96、100、101）と遠賀川以東系（102、103）がみられ遠賀川以東系の口縁部個体比率は20%である。102の口縁部には約1.5cmの間隔で工具痕が廻る。
- ・②層  
須玖Ⅱ式の甕口縁が5点（104～108）、底部1点（109）が出土した。甕口縁部は全て遠賀川以西系である。
- ・①層  
須玖Ⅱ式甕口縁（110）、底部（111）、高杯脚部（112）が出土した。

#### 【時期】

①～③層の遺物は須玖Ⅱ式が主体を占め、かつ最新遺物であることから弥生時代中期後葉に構築・廃絶したものと考えられる。

#### 3区土坑・ピット出土遺物（図23）

遺物の諸属性については表4のとおりである。

- ・3号土坑  
須玖Ⅱ式甕口縁部（113～119）、底部（120）、凹石（121）が出土した。
- ・4号土坑  
須玖Ⅱ式遠賀川以西系甕口縁部（122）、遠賀川以東系甕口縁部（123）、凹石（124）が出土した。

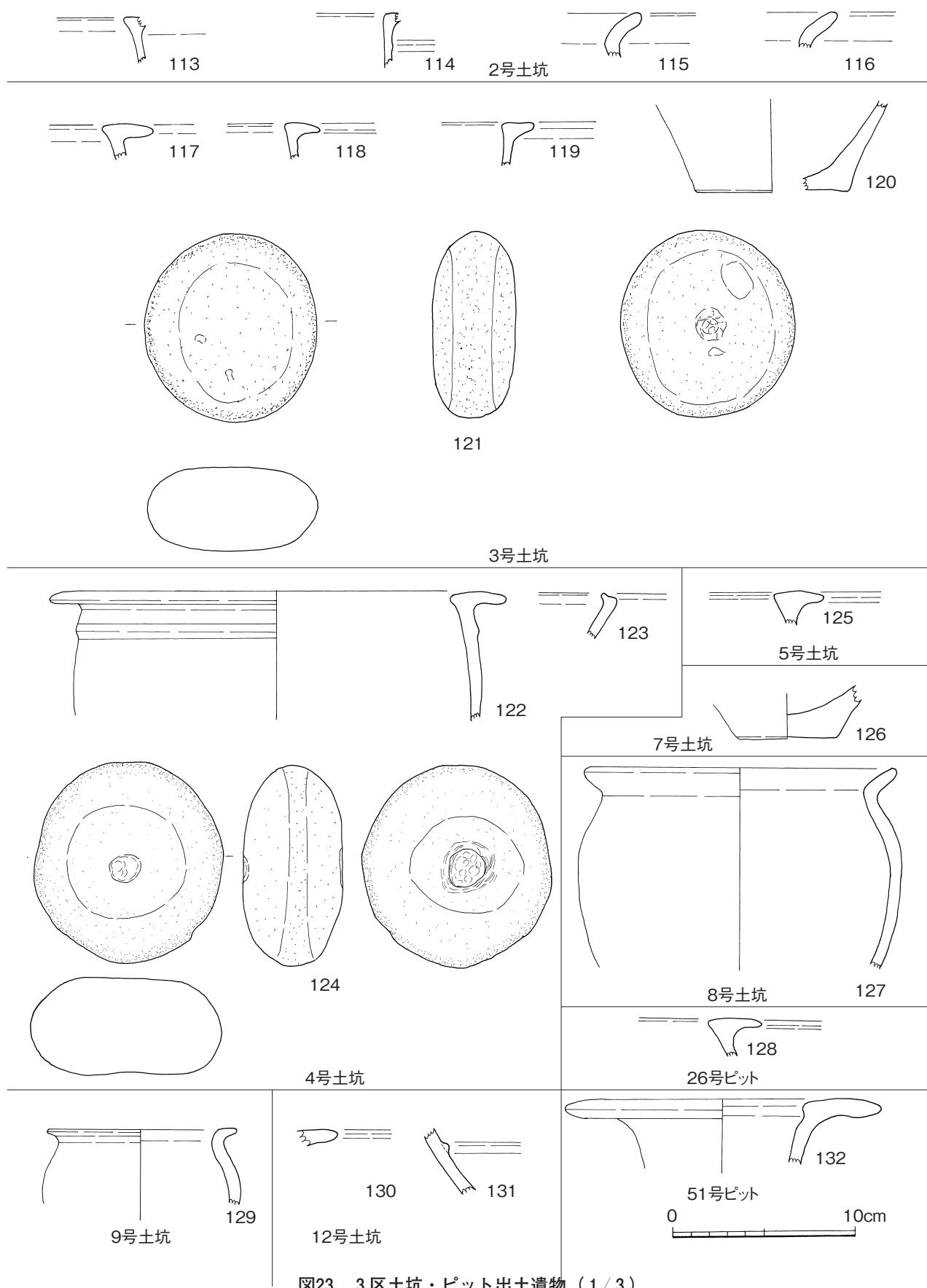


図23 3区土坑・ピット出土遺物 (1/3)

- ・5号土坑  
須玖Ⅱ式甕口縁部（125）が出土した。
- ・7号土坑  
底部（126）が出土した。
- ・8号土坑  
甕口縁部（127）が出土した。
- ・9号土坑  
鉢（129）が出土した。
- ・12号土坑  
須玖Ⅱ式甕口縁部（130）、突帯胴部片（131）が出土した。
- ・26号ピット  
須玖Ⅱ式甕口縁部（128）が出土した。
- ・51号ピット  
須玖Ⅱ式壺口縁部（132）が出土した。

#### 14号土坑（図24、写真5、6）

##### 【調査】

4区3層で検出した。4区中央に位置する。検出面では一部近世以降の削平を受けていた。長軸に沿って半截し、掘削を行わなかった部分は表面観察と検出面での遺物収集に留めた。

##### 【構造】

平面は橢円形に近い不整形である。長軸144cm、短軸104cm、残存深49cm、底面標高4.66mである。遺物は土坑内に満遍なく分布している。③層上面で3点の30cm内外の板石が出土した。

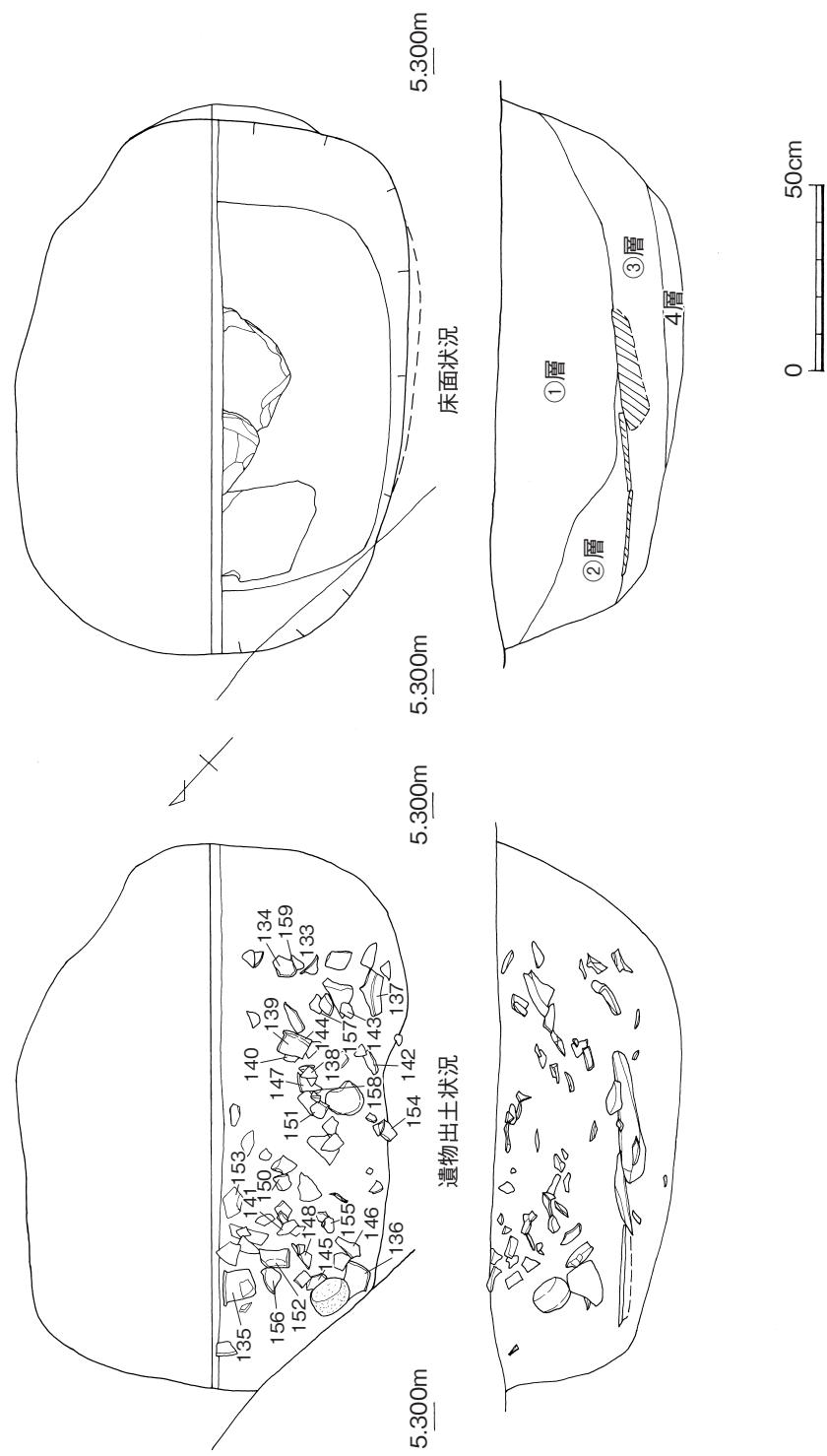
##### 【土坑内堆積】

- ①層：黒褐色（7.5YR3/1）粘質土。粘性大。しまり普通。炭化物を多く含む。土器片等遺物を多く含む。
- ②層：黒褐色（7.5YR3/2）粘質土。粘性大。しまりやや強い。炭化物を多く含む。土器片等を含む。
- ③層：暗褐色（10YR3/3）粘質土。粘性大。しまりやや強い。炭化物、土器片等を含む。土質はやや細かい。
- ④層：灰黄褐色（10YR4/2）粘質土。粘性大。しまり強い。炭化物含む。微細な土器片をわずかに含む。

##### 【遺物】（図25）

- ・③層  
須玖Ⅱ式甕口縁（133）、底部（134）が出土した。
- ・②層  
須玖Ⅱ式甕口縁（135）、蓋（136）が出土した。
- ・①層  
須玖Ⅱ式甕口縁（137～150）、底部（151～157）、高杯口縁部（159）が出土した。

图24 14号土坑 (1 / 20)



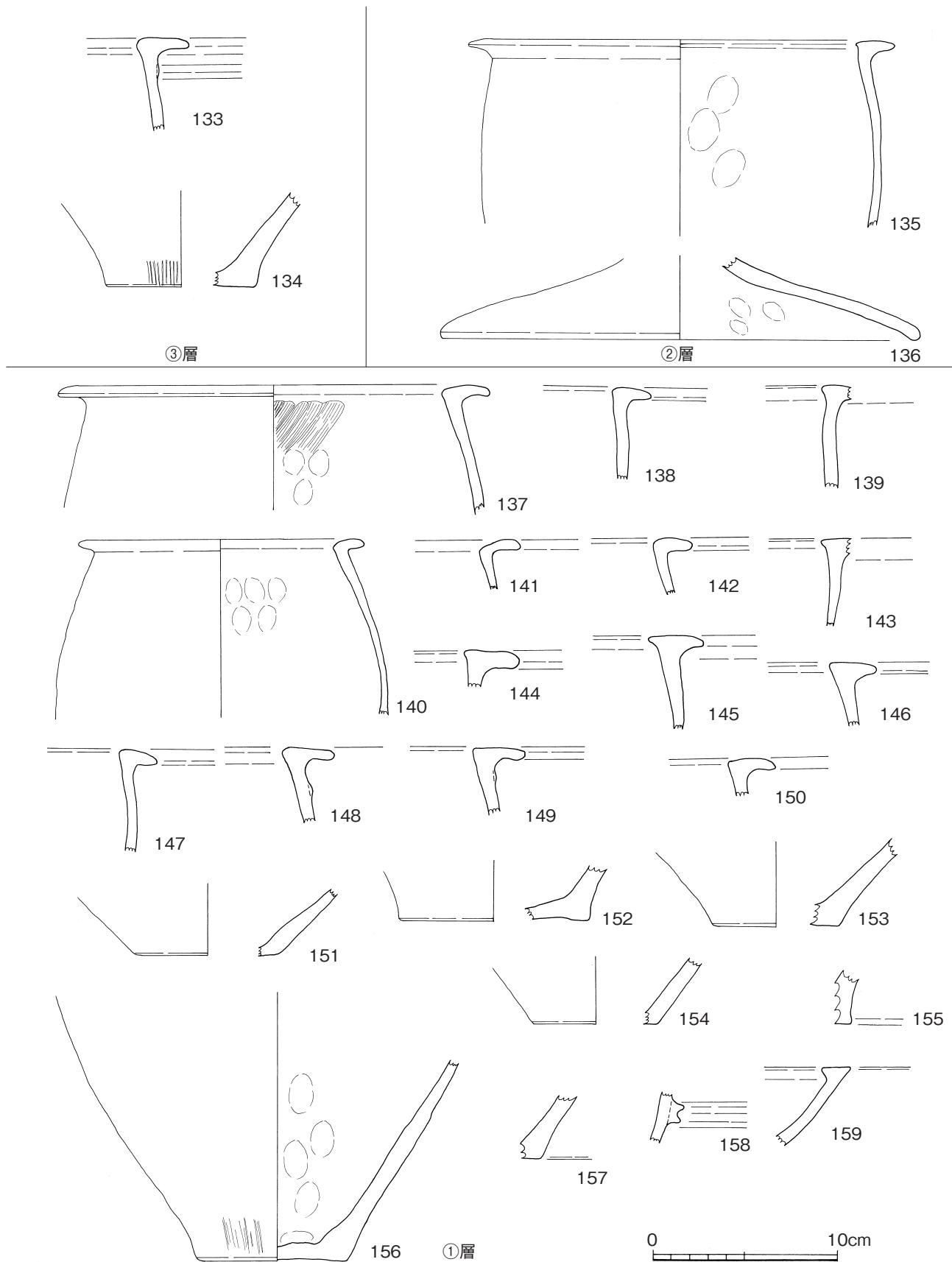


図25 14号土坑出土遺物 (1 / 20)

### 【時期】

①～③層の遺物は須玖Ⅱ式が主体を占め、かつ最新遺物であることから弥生時代中期後葉に構築・廃絶したものと考えられる。

### 4 区土坑出土遺物（図26、写真7）

- ・15号土坑  
高杯脚部（160）、断面M字突帯（161）が出土した。
- ・16号土坑  
須玖Ⅱ式甕口縁部（162）が出土した。

### 5 区土坑出土遺物（図27、写真8）

- ・20号土坑  
須玖Ⅱ式甕口縁部（163）が出土した。
- ・23号土坑  
須玖Ⅱ式甕口縁部（164）、底部（165）が出土した。
- ・24号土坑  
須玖式甕口縁部（166）が出土した。
- ・25号土坑  
須玖Ⅱ式甕口縁部（167～169）、底部（170）が出土した。
- ・29号土坑  
須玖Ⅱ式甕口縁部（171、172）が出土した。

### (3) 溝

1a区で2条、2a区で1条の溝を確認した。

#### 1号溝（図28、写真9、10）

##### 【調査】

1a区3層で検出した。1a区西側に位置する。完掘した。

##### 【構造】

北東一南西方向に伸びる。検出面での幅は107cmである。残存深は8～18cmで、底面標高は4.68～4.75mである。断面形態は緩やかな弧線状である。

##### 【溝内堆積】

覆土は1層である。褐灰色（7.5YR4/2）粘質土に黒色（7.5YR1.7/1）が混じる。覆土からは比較的遺存状況の良い弥生土器も出土している。

##### 【遺物】（図30）

須玖Ⅱ式甕口縁部（173～175）、底部（176）が出土している。175は鋤先口縁であるが、粘土の下端を接着させず、粘土帶のようにみえるものである（写真11）。外面にはハケメ調整がなされる。粘土帶土器そのものではないが、模倣したものである可能性もある。片岡宏二の分類による擬朝鮮系無

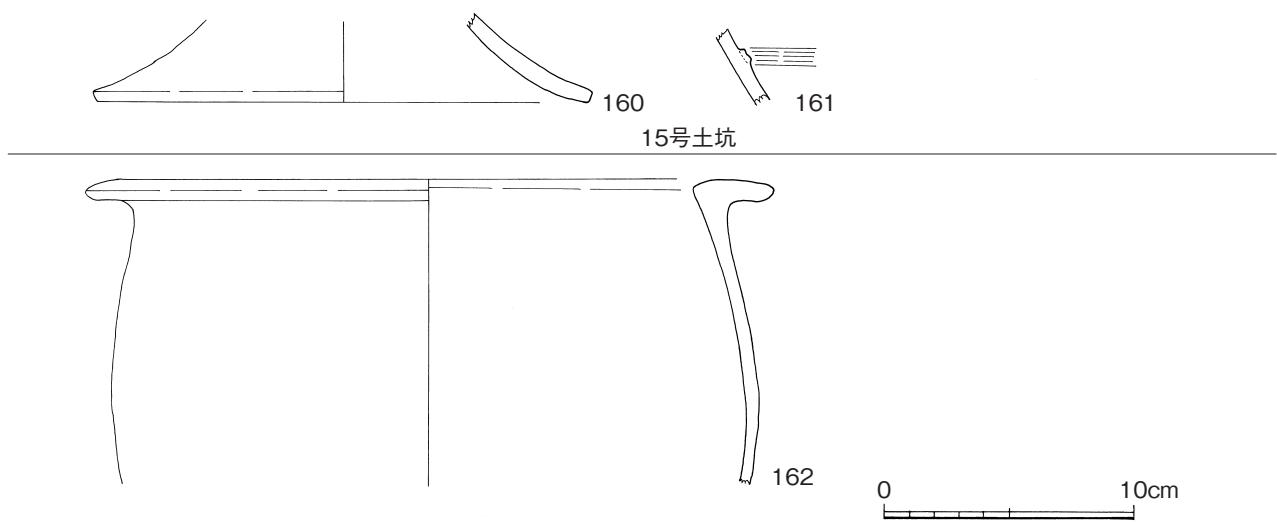


図26 4区土坑出土遺物 (1 / 3)

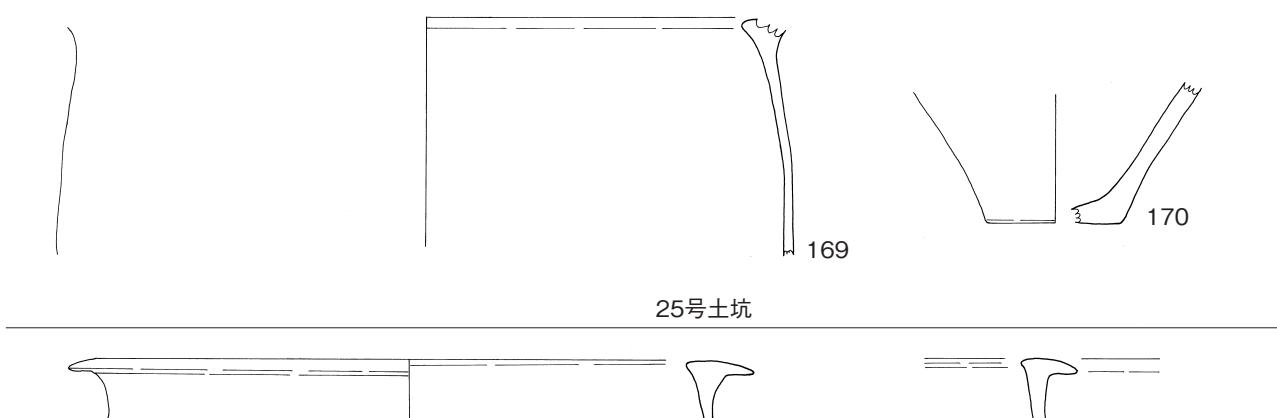
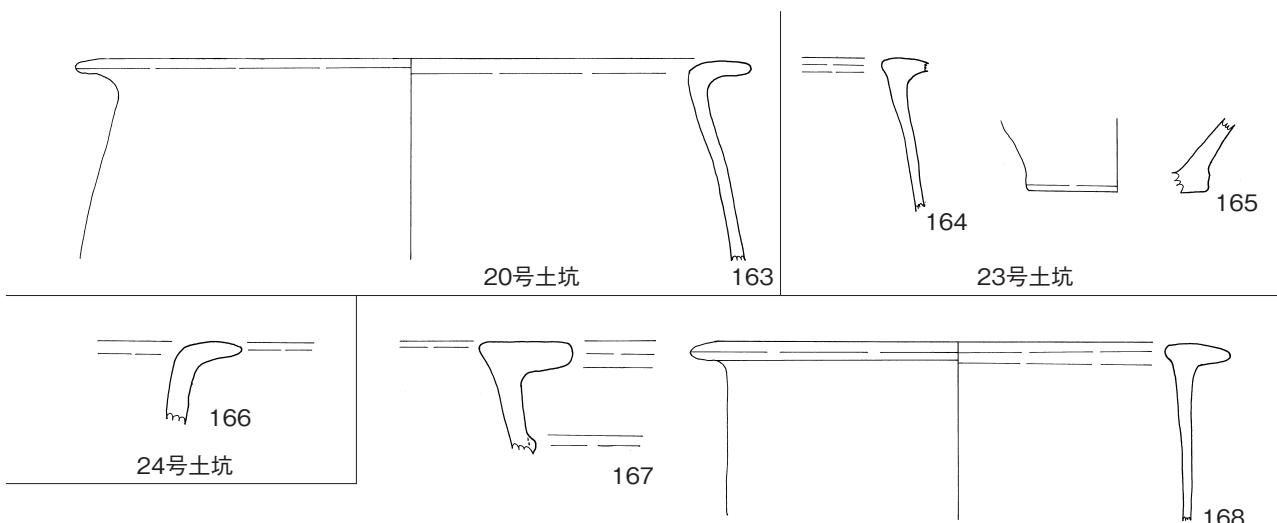


図27 5区土坑出土遺物 (1 / 3)

表3 3～5区土坑・ピット

遺構番号	調査区・層位	調査	平面形態	直径等		覆土	切合関係
				長軸	短軸		
1号土坑	3区3層	半截	不整形				
2号土坑	3区3層	未掘削	楕円形	166cm	108cm	A	
3号土坑	3区3層	未掘削	不整形		86cm	A	
4号土坑	3区3層	未掘削	楕円形	117cm	—	A	
5号土坑	3区3層	未掘削	隅丸方形	122cm	60cm	B	6号土坑を切る
6号土坑	3区3層	未掘削	不整形	—	86cm	A	5号土坑に切られる
7号土坑	3区3層	未掘削	隅丸方形	136cm	116cm	A	
8号土坑	3区3層	未掘削	円形		78cm	A	
9号土坑	3区3層	未掘削	不整形	—	124cm	A	
10号土坑	3区3層	未掘削	楕円形	84cm	40cm	B	
11号土坑	3区3層	未掘削	楕円形	104cm	70cm	B	12号土坑に切られる
12号土坑	3区3層	未掘削	楕円形	168cm	88cm	A	11号土坑を切る
13号土坑	3区3層	未掘削	隅丸方形	—	—	A	
14号土坑	4区3層	半截	楕円形				
15号土坑	4区3層	未掘削	楕円形	139cm	75cm		
16号土坑	4区3層	未掘削	楕円形	108cm	42cm		
17号土坑	4区3層	未掘削	隅丸方形	200cm	84cm		
18号土坑	4区3層	未掘削	不整形	142cm	64cm		
19号土坑	4区3層	未掘削	不整形	84cm	54cm		
20号土坑	5区7層	未掘削	楕円形	—	110cm	C	
21号土坑	5区7層	未掘削	円形	—	—	C	
22号土坑	5区7層	未掘削	長方形	134cm	69cm	C	
23号土坑	5区7層	未掘削	隅丸方形	82cm	64cm	C	
24号土坑	5区7層	未掘削	楕円形	108cm	68cm	C	
25号土坑	5区7層	未掘削	不整形	190cm	72cm	C	
26号土坑	5区7層	未掘削	不整形	110cm	110cm	C	
27号土坑	5区7層	未掘削	長方形	152cm	100cm	C	
1号不明遺構	3区3層	未掘削	方形?	—	—	D	
2号不明遺構	3区3層	未掘削	隅丸方形	—	—	A	66・67・68・69・87号ピットに切られる
3号不明遺構	5区7層	未掘削	不整形	58cm	52cm	焼土	
4号不明遺構	5区7層	未掘削	楕円形	66cm	58cm	焼土	
1号ピット	3区3層	未掘削	円形		26cm	C	
2号ピット	3区3層	未掘削	円形		28cm	C	
3号ピット	3区3層	未掘削	円形		22cm	B	
4号ピット	3区3層	未掘削	円形		28cm	A	
5号ピット	3区3層	未掘削	円形		28cm	A	
6号ピット	3区3層	未掘削	楕円形	20cm	16cm	B	
7号ピット	3区3層	未掘削	円形		16cm	B	
8号ピット	3区3層	未掘削	円形		20cm	C	9号ピットに切られる
9号ピット	3区3層	未掘削	楕円形	40cm	20cm	B	8号ピットを切る
10号ピット	3区3層	未掘削	楕円形	58cm	36cm	C	11号ピットに切られる
11号ピット	3区3層	未掘削	円形		25cm	B	10号ピットを切る
12号ピット	3区3層	未掘削	楕円形	21cm	18cm	C	
13号ピット	3区3層	未掘削	楕円形	30cm	20cm	B	
14号ピット	3区3層	未掘削	円形		30cm	B	
15号ピット	3区3層	未掘削	円形		24cm	B	16号ピットを切る
16号ピット	3区3層	未掘削	円形		26cm	B	15号ピットに切られる
17号ピット	3区3層	未掘削	円形		16cm	A	
18号ピット	3区3層	未掘削	円形		33cm	E	1号不明遺構を切る
19号ピット	3区3層	未掘削	円形		20cm	C	21号ピットに切られる
20号ピット	3区3層	未掘削	円形		16cm	A	21号ピットに切られる
21号ピット	3区3層	未掘削	不整形	52cm	24cm	B	19・20号ピットを切る
22号ピット	3区3層	未掘削	楕円形	26cm	14cm	C	
23号ピット	3区3層	未掘削	円形		24cm	C	
24号ピット	3区3層	未掘削	円形		20cm	C	
25号ピット	3区3層	未掘削	円形		30cm	C	26号ピットに切られる
26号ピット	3区3層	未掘削	円形		32cm	B	25号ピットを切る
27号ピット	3区3層	未掘削	円形		20cm	A	
28号ピット	3区3層	未掘削	円形		16cm	A	
29号ピット	3区3層	未掘削	楕円形	22cm	18cm	A	
30号ピット	3区3層	未掘削	円形		16cm	A	6号土坑を切る
31号ピット	3区3層	未掘削	円形		36cm	C	32号ピットに切られる
32号ピット	3区3層	未掘削	円形		15cm	B	33号ピットに切られる
33号ピット	3区3層	未掘削	楕円形	26cm	22cm	A	32・34号ピットを切る
34号ピット	3区3層	未掘削	楕円形	32cm	24cm	B	33号ピットに切られる
35号ピット	3区3層	未掘削	楕円形	32cm	22cm	C	
36号ピット	3区3層	未掘削	円形		22cm	A	

遺構番号	調査区・層位	調査	平面形態	直径等		覆土	切合関係
				長軸	短軸		
37号ピット	3区3層	未掘削	楕円形	28cm	22cm	A	38号ピットに切られる
38号ピット	3区3層	未掘削	円形		18cm	A	37号ピットを切る
39号ピット	3区3層	未掘削	楕円形	36cm	28cm	B	40号ピットを切る
40号ピット	3区3層	未掘削	楕円形	24cm	18cm	B	39号ピットに切られる
41号ピット1	3区3層	未掘削	円形		32cm	C	
42号ピット	3区3層	未掘削	円形		24cm	B	
43号ピット	3区3層	未掘削	円形		26cm	C	
44号ピット	3区3層	未掘削	楕円形	40cm	20cm	A	
45号ピット	3区3層	未掘削	楕円形	32cm	24cm	A	
46号ピット	3区3層	未掘削	円形		28cm	B	47号ピットに切られる
47号ピット	3区3層	未掘削	楕円形	32cm	22cm	A	46号ピットを切る
48号ピット	3区3層	未掘削	楕円形	-	26cm	A	
49号ピット	3区3層	未掘削	楕円形	24cm	18cm	B	
50号ピット	3区3層	未掘削	円形		30cm	B	51号ピットに切られる
51号ピット	3区3層	未掘削	円形		22cm	A	50号ピットを切る
52号ピット	3区3層	未掘削	円形		28cm	C	
53号ピット	3区3層	未掘削	楕円形	24cm	20cm	A	
54号ピット	3区3層	未掘削	楕円形	32cm	24cm	C	
55号ピット	3区3層	未掘削	円形		12cm	B	
56号ピット	3区3層	未掘削	円形		20cm	B	57号ピットに切られる
57号ピット	3区3層	未掘削	楕円形	26cm	20cm	A	56号ピットを切る
58号ピット	3区3層	未掘削	円形		18cm	A	
59号ピット	3区3層	未掘削	楕円形	48cm	32cm	B	60号ピットに切られる
60号ピット	3区3層	未掘削	楕円形	50cm	32cm	B	59号ピットを切る
61号ピット	3区3層	未掘削	円形		20cm	B	62号ピットに切られる
62号ピット	3区3層	未掘削	円形		41cm	B	63号ピットに切られる
63号ピット	3区3層	未掘削	円形		32cm	A	62号ピットを切る
64号ピット	3区3層	未掘削	円形		22cm	B	65号ピットに切られる
65号ピット	3区3層	未掘削	楕円形	40cm	22cm	B	66号ピットに切られる
66号ピット	3区3層	未掘削	楕円形	26cm	20cm	A	65号ピット・2号不明遺構を切る
67号ピット	3区3層	未掘削	円形		14cm	A	2号不明遺構を切る
68号ピット	3区3層	未掘削	楕円形	32cm	22cm	A	69号ピット・2号不明遺構を切る
69号ピット	3区3層	未掘削	円形		32cm	A	68号ピットに切られる
70号ピット	3区3層	未掘削	楕円形	42cm	20cm	A	
71号ピット	3区3層	未掘削	円形		30cm	A	
72号ピット	3区3層	未掘削	円形		22cm	B	
73号ピット	3区3層	未掘削	長方形	-	32cm	A	13号土坑を切る
74号ピット	3区3層	未掘削	不整形		30cm	A	11号土坑に切られる
75号ピット	3区3層	未掘削	不整形	55cm	32cm	B	
76号ピット	3区3層	未掘削	長方形	-	26cm	A	
77号ピット	3区3層	未掘削	円形		22cm	A	
78号ピット	3区3層	未掘削	円形		25cm	B	79号ピットに切られる
79号ピット	3区3層	未掘削	円形		20cm	A	78号ピットを切る
80号ピット	3区3層	未掘削	円形		50cm	A	81号ピットに切られる
81号ピット	3区3層	未掘削	円形		26cm	A	80号ピットを切る
82号ピット	3区3層	未掘削	円形		20cm	A	
83号ピット	3区3層	未掘削	円形		10cm	A	
84号ピット	3区3層	未掘削	円形		20cm	C	
85号ピット	3区3層	未掘削	不整形	58cm	38cm	A	
86号ピット	3区3層	未掘削	楕円形	20cm	16cm	B	
87号ピット	3区3層	未掘削	円形		22cm	A	2号不明遺構を切る
88号ピット	3区3層	未掘削	円形		30cm	A	89号ピットを切る
89号ピット	3区3層	未掘削	円形		26cm	C	88号ピットに切られる
90号ピット	3区3層	未掘削	楕円形	34cm	26cm	A	
91号ピット	3区3層	未掘削	円形		32cm	A	
92号ピット	3区3層	未掘削	円形		22cm	B	
93号ピット	3区3層	未掘削	円形		12cm	A	
94号ピット	4区3層	未掘削	円形		26cm		
95号ピット	4区3層	未掘削	円形		24cm		
96号ピット	4区3層	未掘削	円形		18cm		
97号ピット	4区3層	未掘削	楕円形	32cm	26cm		
98号ピット	4区3層	未掘削	円形		24cm		
99号ピット	4区3層	未掘削	円形		24cm		
100号ピット	4区3層	未掘削	円形		16cm		
101号ピット	4区3層	未掘削	円形		14cm		102号ピットに切られる
102号ピット	4区3層	未掘削	円形		12cm		101号ピットを切る
103号ピット	4区3層	未掘削	円形		12cm		

遺構番号	調査区・層位	調査	平面形態	直径等		覆土	切合関係
				長軸	短軸		
104号ピット	4区3層	未掘削	楕円形	24cm	16cm		
105号ピット	4区3層	未掘削	円形		24cm		
106号ピット	4区3層	未掘削	円形		32cm		
107号ピット	4区3層	未掘削	円形		20cm		
108号ピット	4区3層	未掘削	円形		32cm		109号ピットに切られる
109号ピット	4区3層	未掘削	楕円形	20cm	16cm		108号ピットを切る
110号ピット	4区3層	未掘削	円形		28cm		111号ピットに切られる
111号ピット	4区3層	未掘削	円形		36cm		110号ピットを切る
112号ピット	4区3層	未掘削	隅丸方形	62cm	28cm		
113号ピット	4区3層	未掘削	円形		13cm		
114号ピット	4区3層	未掘削	円形		33cm		
115号ピット	4区3層	未掘削	楕円形	49cm	40cm		
116号ピット	4区3層	未掘削	円形		16cm		
117号ピット	4区3層	未掘削	円形		25cm		
118号ピット	4区3層	未掘削	円形		18cm		
119号ピット	4区3層	未掘削	円形		17cm		
120号ピット	4区3層	未掘削	楕円形	28cm	22cm		
121号ピット	4区3層	未掘削	楕円形	28cm	20cm		
122号ピット	4区3層	未掘削	円形		16cm		123号ピットを切る
123号ピット	4区3層	未掘削	円形		30cm		122号ピットに切られる
124号ピット	4区3層	未掘削	円形		20cm		
125号ピット	4区3層	未掘削	円形		28cm		17号土坑に切られる
126号ピット	4区3層	未掘削	円形		22cm		127号ピットに切られる
127号ピット	4区3層	未掘削	円形		18cm		126号ピットを切る
128号ピット	4区3層	未掘削	楕円形	54cm	-		
129号ピット	4区3層	未掘削	円形		15cm		
130号ピット	4区3層	未掘削	円形		16cm		
131号ピット	4区3層	未掘削	楕円形	20cm	10cm		
132号ピット	4区3層	未掘削	円形		19cm		
133号ピット	4区3層	未掘削	楕円形	30cm	24cm		
134号ピット	4区3層	未掘削	円形		16cm		
135号ピット	4区3層	未掘削	円形		16cm		136号ピットを切る
136号ピット	4区3層	未掘削	円形		12cm		135号ピットに切られる
137号ピット	4区3層	未掘削	円形		16cm		
138号ピット	4区3層	未掘削	円形		14cm		
139号ピット	4区3層	未掘削	円形		16cm		
140号ピット	4区3層	未掘削	円形		19cm		
141号ピット	4区3層	未掘削	円形		20cm		
142号ピット	4区3層	未掘削	円形		14cm		
143号ピット	4区3層	未掘削	円形		16cm		
144号ピット	4区3層	未掘削	不整形	24cm	18cm		
145号ピット	4区3層	未掘削	円形		20cm		
146号ピット	4区3層	未掘削	楕円形	-	12cm		
147号ピット	4区3層	未掘削	円形		30cm		
148号ピット	4区3層	未掘削	円形	-	-		
149号ピット	4区3層	未掘削	円形		30cm		
150号ピット	4区3層	未掘削	円形		18cm		
151号ピット	4区3層	未掘削	円形		28cm		
152号ピット	4区3層	未掘削	円形		18cm		
153号ピット	4区3層	未掘削	楕円形	21cm	16cm		
154号ピット	4区3層	未掘削	楕円形	26cm	21cm		
155号ピット	4区3層	未掘削	円形		17cm		
156号ピット	4区3層	未掘削	円形		16cm		
157号ピット	4区3層	未掘削	円形		20cm		
158号ピット	4区3層	未掘削	不整形	18cm	16cm		
159号ピット	4区3層	未掘削	不整形	24cm	14cm		
160号ピット	4区3層	未掘削	楕円形	21cm	18cm		
161号ピット	4区3層	未掘削	円形		18cm		
162号ピット	4区3層	未掘削	楕円形	20cm	14cm		
163号ピット	4区3層	未掘削	円形		16cm		
164号ピット	4区3層	未掘削	円形		26cm		
165号ピット	4区3層	未掘削	円形		21cm		
166号ピット	4区3層	未掘削	円形		16cm		
167号ピット	5区7層	未掘削	円形		28cm	C	
168号ピット	5区7層	未掘削	円形		22cm	C	
169号ピット	5区7層	未掘削	不整形	50cm	46cm	C	
170号ピット	5区7層	未掘削	円形		52cm	C	

文土器II - 2類に形態が近いものがある（片岡2001）。しかし、原の辻遺跡では量は多くないもののこのような口縁の須玖II式がしばしば認められるため、韓半島系土器ではない可能性もある。

#### 【時期】

遺物は弥生時代中期後葉の資料のみが出土している。しかし、弥生時代中期の河川堆積層が完全に埋没した後に構築されていることから、河川堆積の年代よりも新しい時期となる。なお、層位上2号溝より新しい。

### 2号溝（図28、写真9、12）

#### 【調査】

1a区5層で検出した。1a区東側に位置する。完掘した。

#### 【構造】

北東—南西方向に伸びる。検出面での幅は73cmである。残存深は54cmで、底面標高は4.74mである。断面形態は緩やかな弧線状である。

#### 【溝内堆積】

覆土は1層である。灰褐色（5YR4/2）粘質土に黒色（5YR1.7/1）が混じる。覆土からは弥生土器片がわずかに出土している。

#### 【遺物】（図30）

須玖II式甕口縁部（177）、底部（178）が出土している。

#### 【時期】

遺物は弥生時代中期後葉の資料のみが出土している。しかし、弥生時代中期の河川堆積層が完全に埋没した後に構築されていることから、河川堆積の年代よりも新しい時期となる。なお、層位上1号溝より古い。

### 3号溝（図31、写真13）

#### 【調査】

2a区9層で検出した。2a区東側に位置する。完掘した。

#### 【構造】

北東—南西方向に伸びる。検出面での幅は66cmである。残存深は4cmで、底面標高は4.60mである。断面形態は緩やかな弧線状である。

#### 【溝内堆積】

覆土は1層である。黒褐色（7.5YR3/2）粘質土。粘性やや強い。しまり強い。覆土からは遺物は確認されていない。

#### 【遺物】

出土なし。

【時期】弥生時代の河川堆積層である9層を切り、上部に中世層である7層が堆積しているため、弥生時代～中世の所産と考えられる。

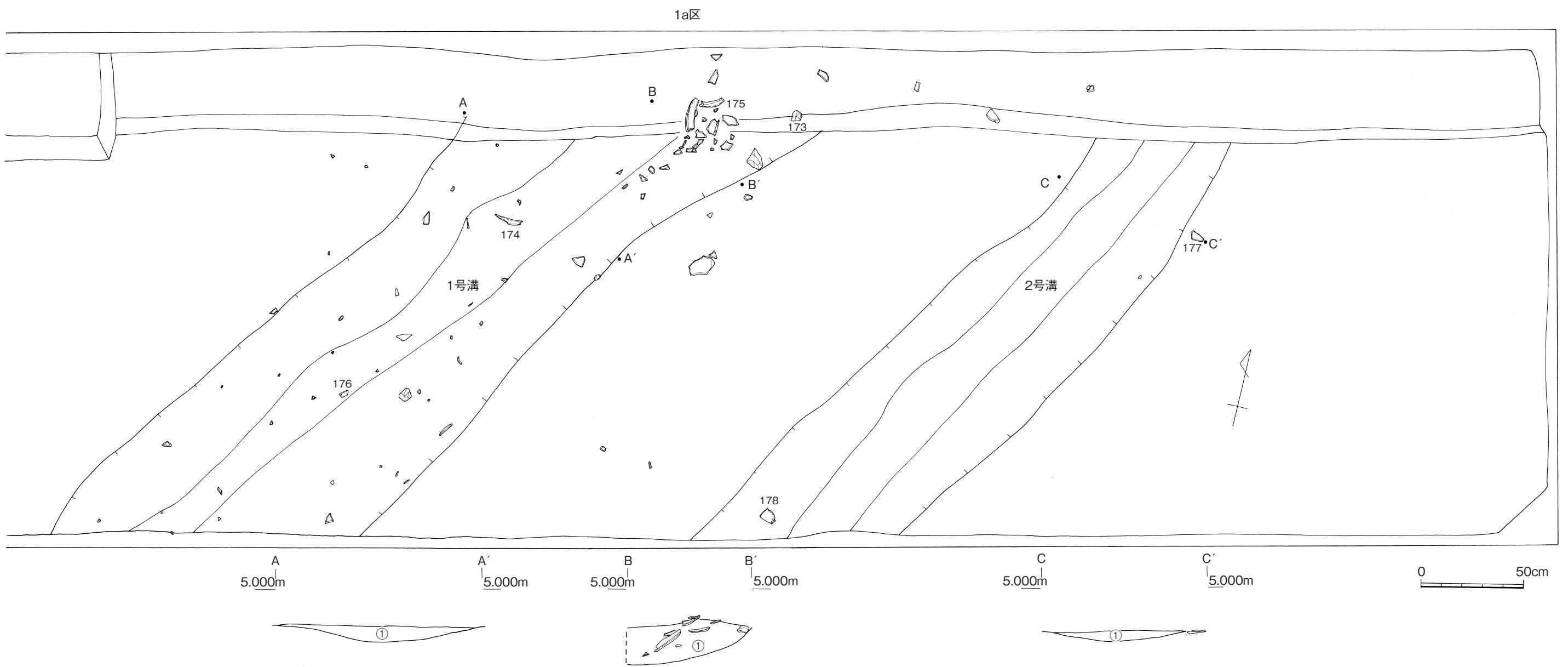


図28 1号溝・2号溝 (1/20)

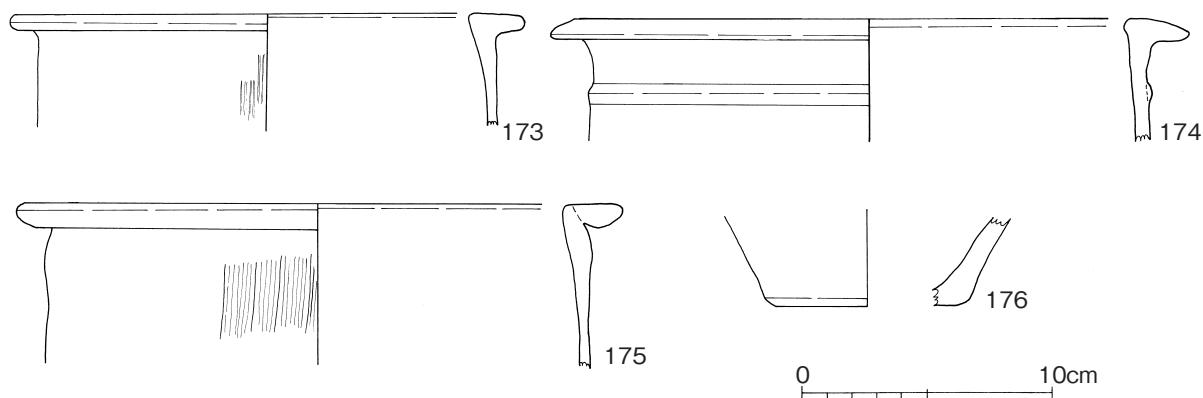


図29 1号溝出土遺物（1/3）

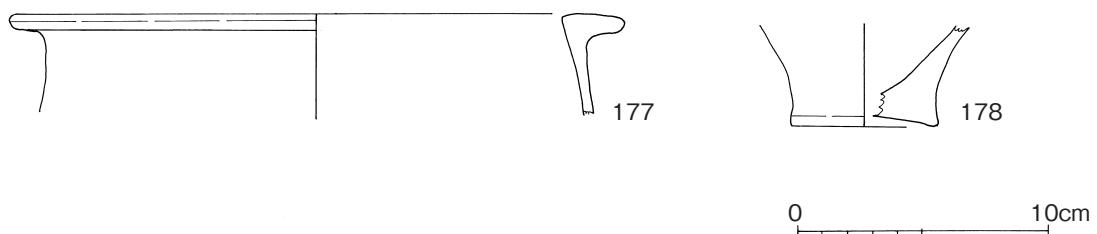


図30 2号溝出土遺物（1/3）

#### (4) 暗渠跡

1号暗渠跡（図32、写真14）

##### 【調査】

2b区2a層で検出した。2b区東側に位置する。完掘した。

##### 【構造】

北西—南東方向に伸びる。幅30cm程度の範囲に直径6cmの竹4または5本を配し、周囲を女竹などで覆っている。このうち1本の竹は節が抜かれ、貫通しており、通水のための長方形の孔が切り抜かれている。残りの4本の竹は節が抜かれていなかった。この暗渠が埋置された掘肩は検出面で幅120cm程度である。暗渠跡の最底面は標高4.52mである。

##### 【堆積】

旧河川跡を埋め立てた2h層、2g層、2f層、2e層を掘り込んで、竹で構築した暗渠を設置後、2a層により埋めている。

##### 【遺物】

出土なし

##### 【時期】

1939年の河川改修に伴い旧河川が埋め立てられた後、水田を造成するために設置された暗渠であると考えられるため、1939年以降の埋設であるとみられる。旧河川を埋め立てた土である2e～2i層と暗渠を埋置した土である2a層の土質は極めて類似しており、暗渠埋置のために掘りあげた水田土を再度埋め戻したものとみられる。

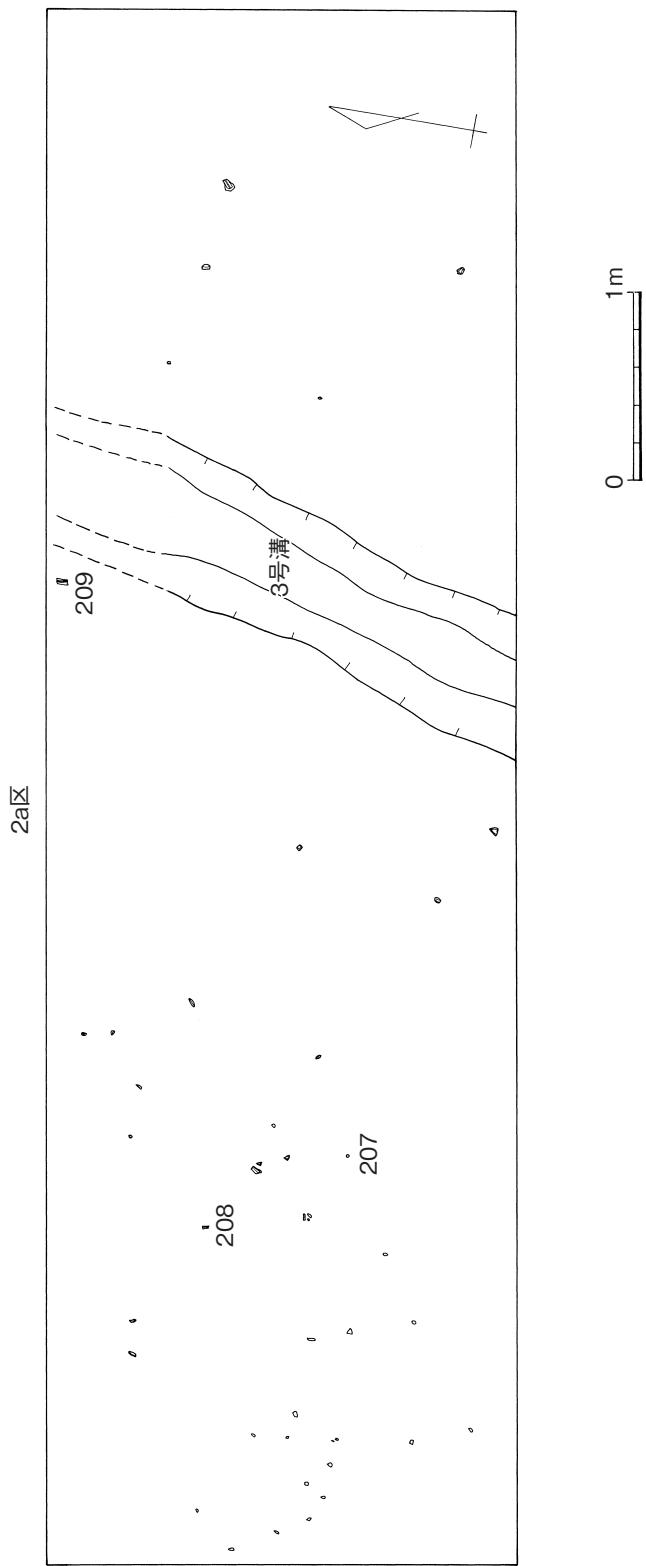


图31 3号溝 (1/40)

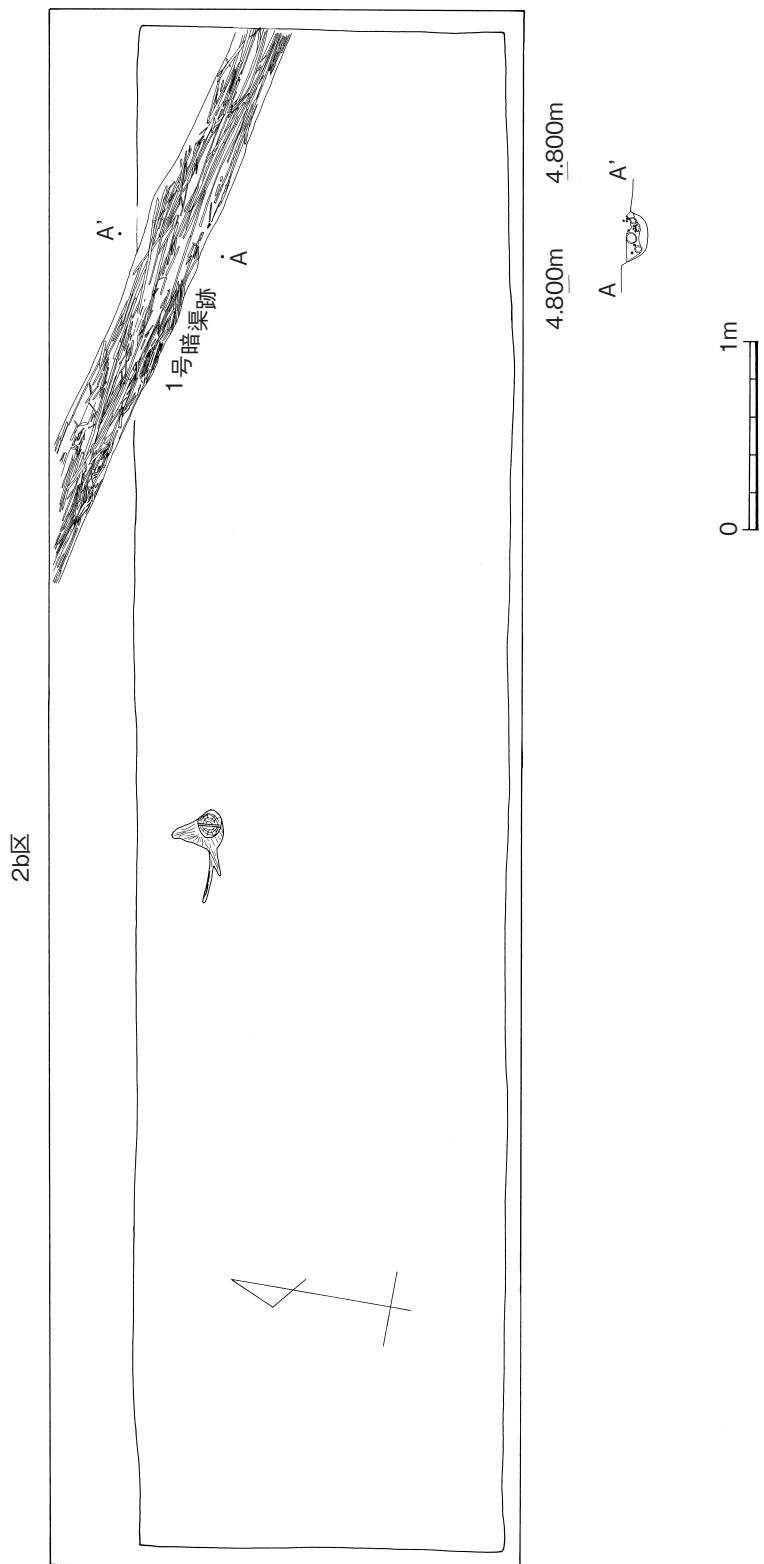


図32 1号暗渠跡 (1/40)

## 4. 自然河川跡及び自然河川跡に伴う遺物

### (1) 弥生時代の河川跡

#### ○河川跡の構造

1994年度川原畠地区調査において弥生時代の河川跡が検出されていたが、その北側の調査区である今次の調査においては当該河川跡の延伸状況を確認することができた。河川による堆積土層は1a区、2a区で確認された。1a区と2a区で検出された河川跡は同一の河川跡であるとみられる。なお、1a区と2a区の中間地点である2b区では弥生時代の河川跡は確認されていないが、近代の河川跡が確認されており、水流により削平されたものとみられる。5区ではこれまでの調査の状況から河川跡が確認される可能性があったが、5区東側は標高4.80mの地点まで近世以降の堆積層がみられ、調査期間等の事情により、その下層を調査することができなかつたため、河川跡の有無は不明である。ただし、5区西側及び中央部では弥生時代以前の無遺物層が確認され、この層を掘りこむ弥生時代の土坑・ピット群が検出されているため、河川跡が存在したとすると5区東側に河川西岸があるものとみられる。

1a区の5～21層、2a区の6～9層が河川堆積層に該当する。また、河川堆積層（1a区20層）下部には青灰色系の砂質土がみられ河床面であるとみられる。河川堆積土層はおおむね黒褐色を呈するのが、川原畠地区では一般的であり、2a区の10層などは典型的な事例であるが、1a区では灰黄色～オリーブ褐など必ずしも黒色ではない河川堆積層がみられる。

1a区西側（最低部）の河床面の標高は2.56mである。2b区東側11層下面の標高は4.10mであるが、調査期間等の事情により、河床面に到達しておらず、河川堆積層は更に下面に続くものと考えられる。

#### ○河川跡からの遺物出土傾向及び出土遺物

河川跡から出土した遺物は、基本的に平面図化及び標高測量を行い、出土位置情報を把握している。紙幅及び時間的制約から全てを報告することはできないが、調査区ごとに特徴的な出土傾向がみられたので、以下では調査区・層位ごとに記述する。

##### ・ 1a区 6～7層（図33、写真15、16）

現在、残存している河川堆積層における最上面である。川岸から約3.2m東側の地点から西側にかけて遺物が多く分布する。遺物の大部分は細片で、磨耗を受けているおり、6層及び7層出土遺物は河川により2次堆積したものとみられる。

##### 【遺物】（図34）

6層では須玖Ⅱ式壺口縁部（183）と底部（184）が出土している。7層では甕底部が出土している（181、182）。

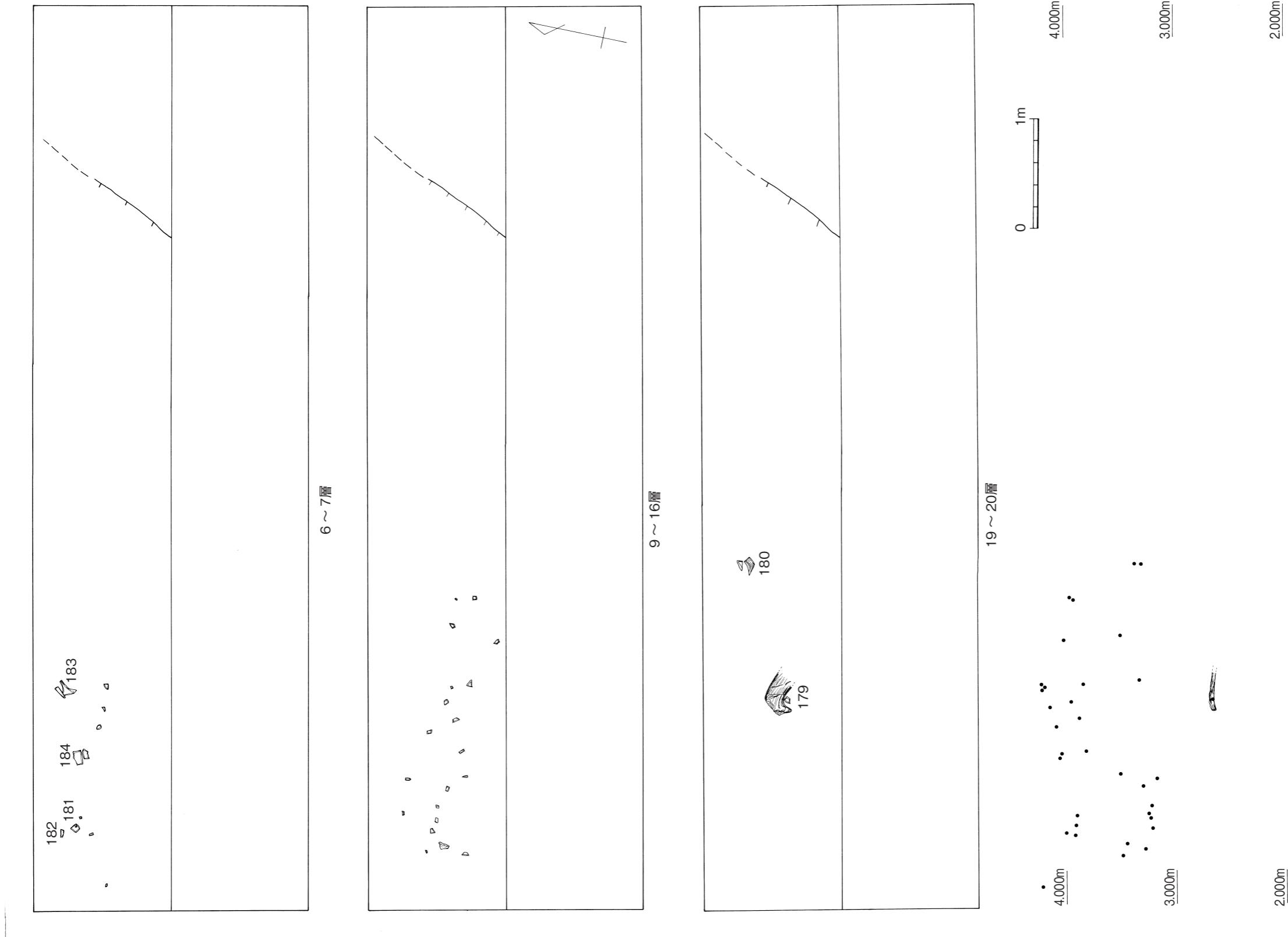


図33 1a区河川跡遺物出土状況 (1/40)

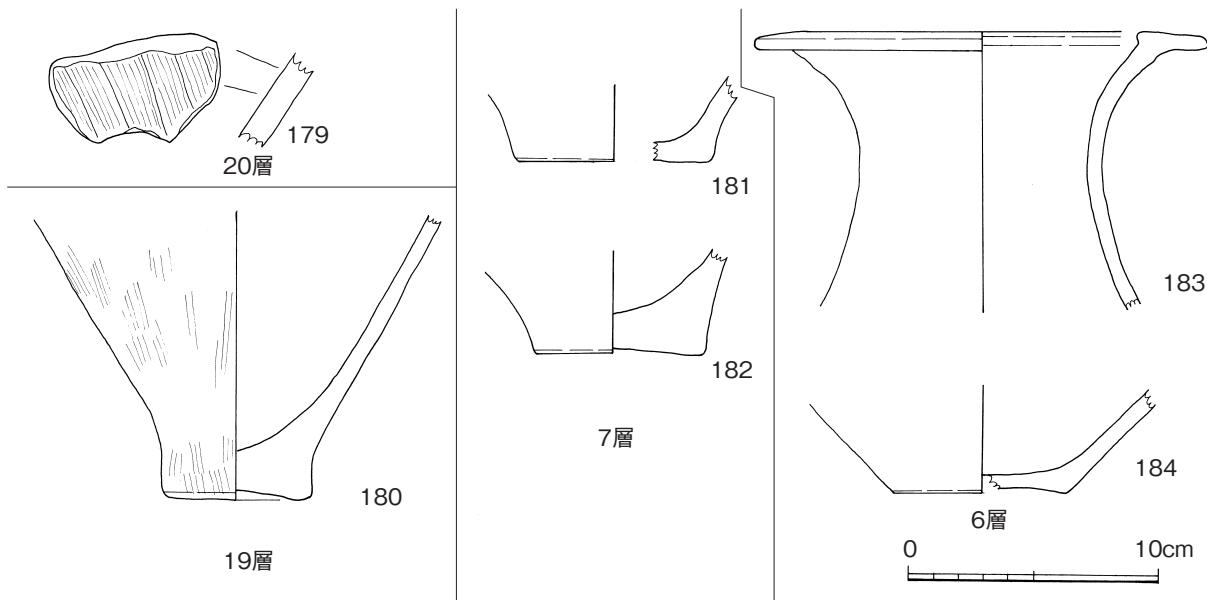


図34 1 a 区河川跡出土遺物 (1/3)

・ 1 a 区 9～16層 (図33、写真15、16)

現在、残存している河川堆積層における中位である。川岸から約2.5m東側の地点から西側にかけて遺物が多く分布する。遺物の遺存状況は6～7層と比較しても不良である。9～16層出土遺物は河川により2次堆積したものとみられる。

**【遺物】**

細片が多く図示しえなかつたが、弥生土器が出土している。

・ 1 a 区19～20層 (図33、写真15、16)

河床面及び下位の河川堆積層である。川岸から約2.5m東側の地点から西側にかけて遺物が分布する。遺物量は非常に少ないものの、遺存状況は1 a 区河川跡内で最も良好である。河床面で自然木や木葉が良好な遺存状況で確認された。

**【遺物】 (図34)**

19層では弥生時代中期の甕底部 (180) が出土している (写真18)。20層では自然木に張り付くようにハケメのある甕胴部片 (179) が出土している (写真17)。

・ 2 a 区 9層 (図35、写真19)

現在、残存している河川堆積層における最上面である。川岸からやや離れた地点に遺物が分布する1区とは異なり、2 a 区 9層では川岸から東側にかけて遺物は満遍なく分布している。遺物の大部分は細片で、磨耗を受けているおり、6層及び7層出土遺物は河川により2次堆積したものとみられる。

**【遺物】 (図36)**

須玖Ⅱ式甕口縁部 (194、195)、底部 (196～203)、砥石 (204)、黒曜石剥片 (205)、鉄片 (206) が出土している。

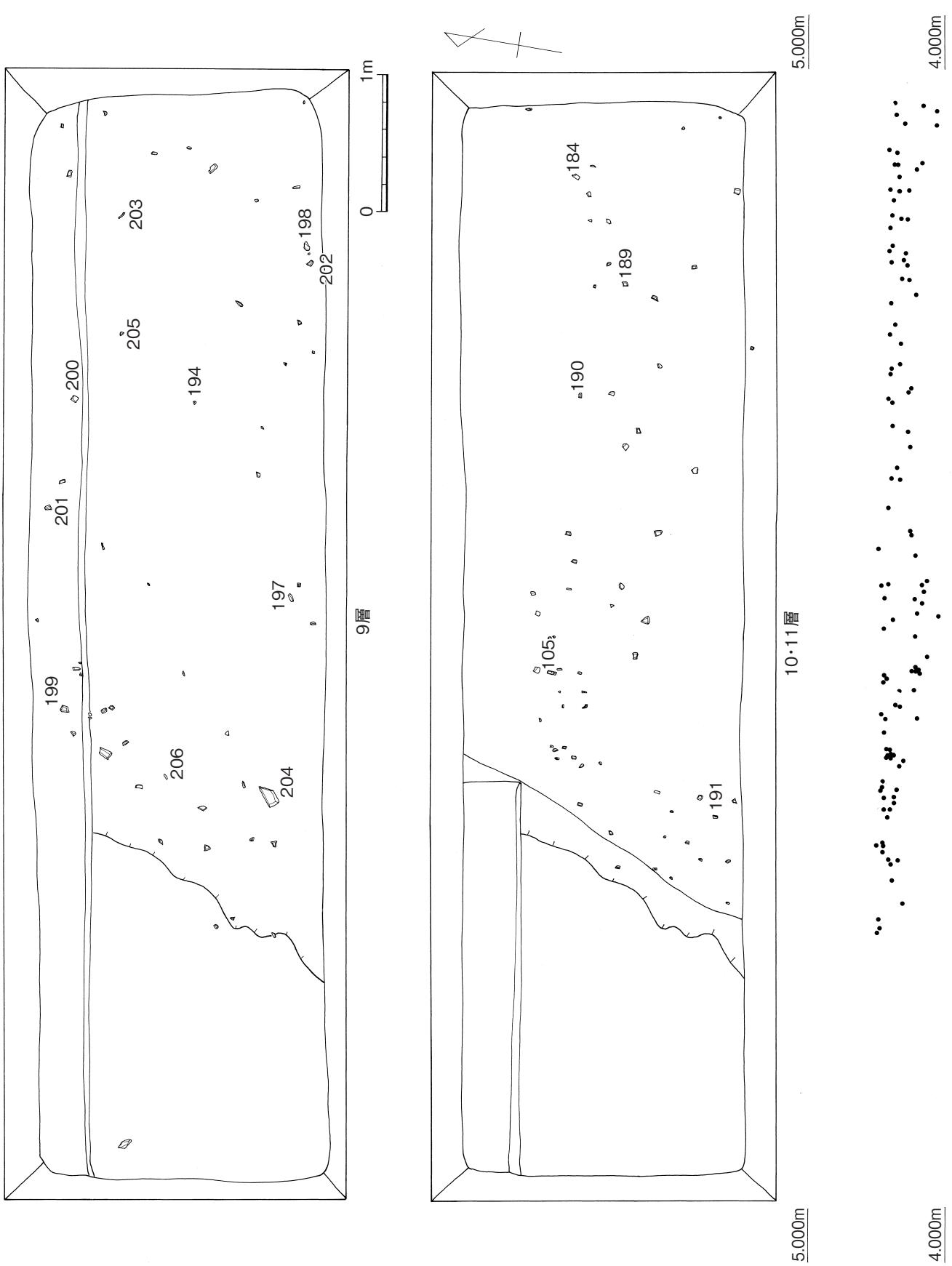


図35 2a区河川跡遺物出土状況 (1/40)

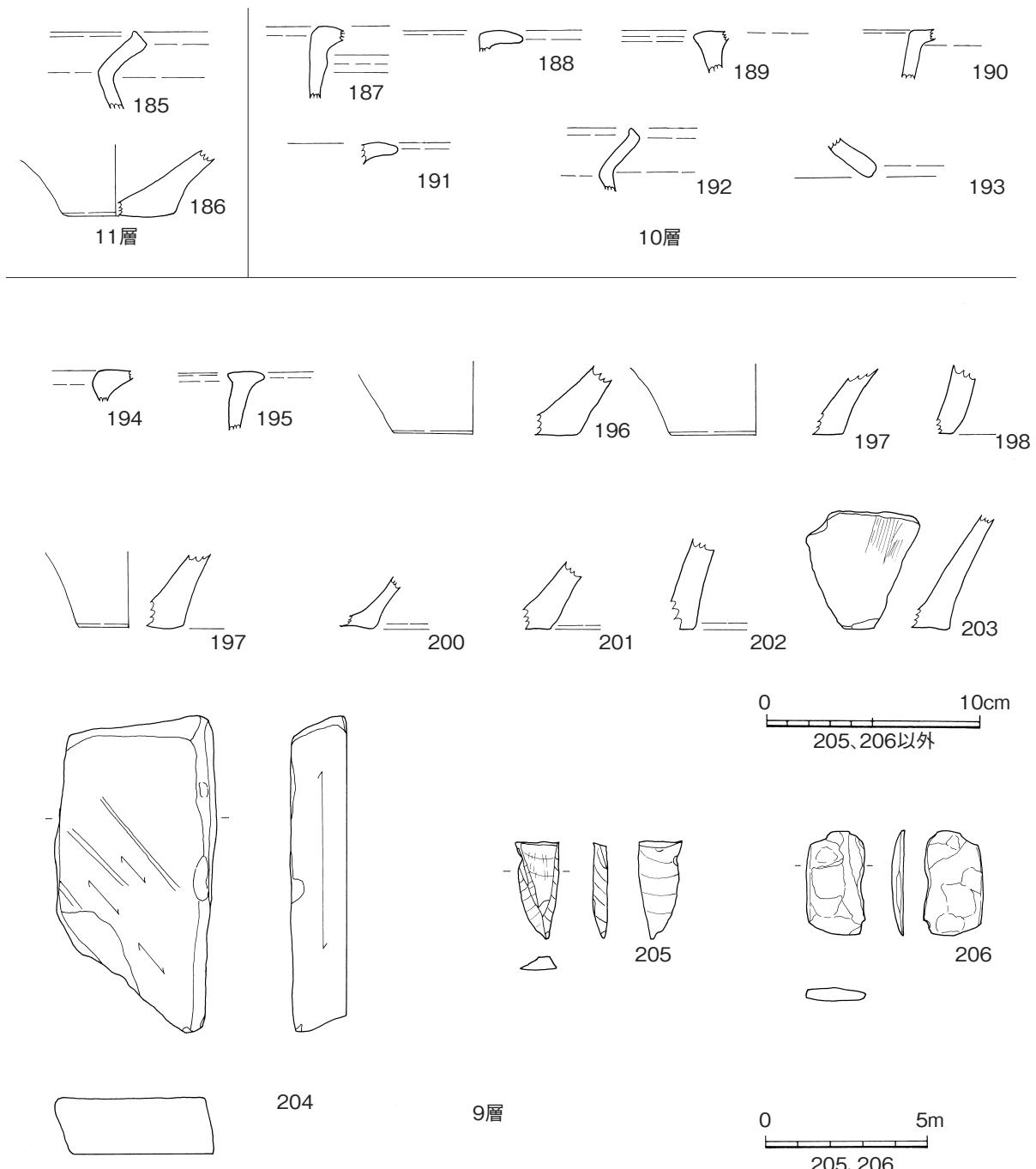


図36 2 a 区河川跡出土遺物 (1 / 3、1 / 2)

・ 2 a 区10～11層（図36、写真20）

現在、残存している河川堆積層における中位である。2 a 区9層と同様に川岸から東側にかけて遺物は満遍なく分布している。遺物の大部分は細片で、磨耗を受けているおり、6層及び7層出土遺物は河川により2次堆積したものとみられる。

【遺物】

10層では須玖Ⅱ式甕口縁部（187～192）、脚部（193）が出土した。遠賀川以東系の甕（192）も含まれる。

11層では遠賀川以東系須玖Ⅱ式甕口縁部（185）と底部（186）が出土した。

【時期】

河川堆積層から出土した遺物は、須玖Ⅱ式以外の時期の遺物は確認されていない。このため河川の時期は弥生時代中期後葉を中心とする時期であるものとみられる。ただし、川原畠地区の竪穴建物跡、土坑・ピット群では須玖Ⅱ式期以外の時期の遺物がほとんど出土しておらず、人々の活動自体が須玖Ⅱ式を中心とする時期に限定されており、河川に流入する遺物があるとすれば、須玖Ⅱ式となってしまうため、河川の存続時期を決定することは難しい。

(2) 近世・近代の河川跡（図9、写真21）

2 b 区で確認した。河床面（最底面）の標高は2.88mである。近世の層である3層を切っている。河川に堆積している2層は自然の河川堆積土ではなく、1939年に幡鉢川の河川改修により埋め立てられた土であるとみられる。斜面には樹木が生えていたため、旧地表面であると判断される。樹木の多くに伐採痕がみられた。径が大きい樹木の伐採痕には受け口と追い口が観察され、伐倒方向は傾斜に対して真下になっている。このことは樹木を伐採した理由が材を得るためではなく、除去であったことを示す（註2）。このような伐採痕の観察と、本書民俗的環境で述べた河川改修前の川岸にヤナギやポプラの木が生えていたという聞き取り調査結果から、これらの伐採痕のある樹木は旧河川の川岸に生えていた樹木であり、河川改修により旧河川を埋め、水田化するときに伐採されたものと考えられる。遺物は出土していないが、河床面では貝が出土した。

## 5. 中世～近世包含層出土遺物

(1) 2区6層（図9、図31、図37）

207は細石刃核である。上下は折れており打面は観察できない。楔形細石刃核であるとみられる。

208は中国青磁である。このことから2区6層は中世の堆積層であるとみられる。

(2) 2区4層（図9、図31、図37）

209は中世陶器である。このことから2区4層は中世の堆積層であるとみられる。

(3) 2区3層（図9、図31、図37）

210は近世の瓦である。平瓦または棟瓦である。211は近世の染付である。このことから2区3層は近世の堆積層であるとみられる。

(4) 2区2c層（図9、図31、図37）

212は近世磁器である。土層は1939年の河川改修に伴う埋め立てによるものであるため、混在遺物

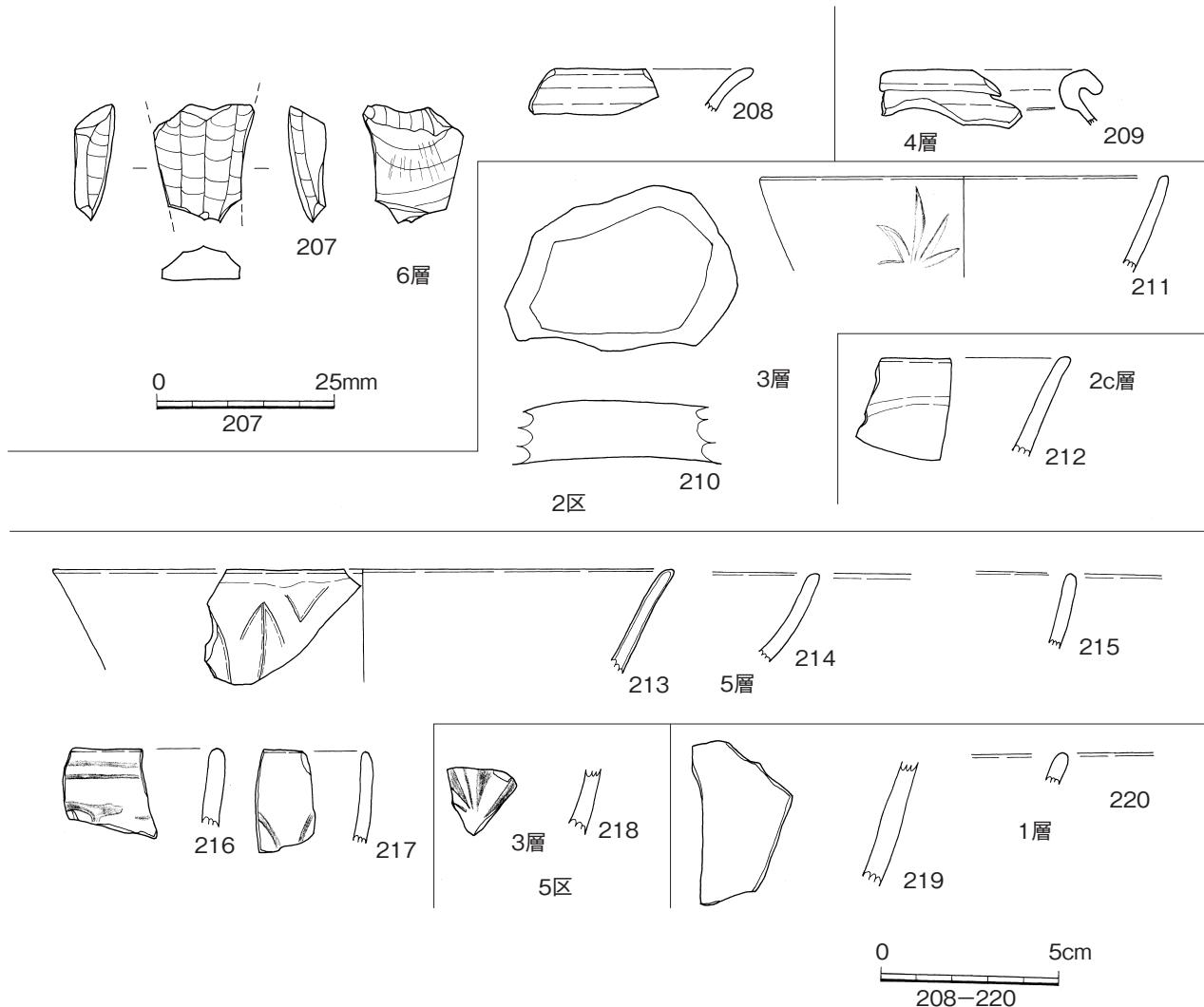


図37 遺物包含層出土遺物（1/1、1/2）

である。

#### (5) 5区5層（図12、図37）

213は14世紀龍泉窯産鎬蓮弁青磁碗である。214、215は近世磁器である。216、217は近世染付である。以上から5区5層は近世堆積層であるとみられる。

#### (6) 5区3層（図12、図37）

218は近世染付である。以上から5区7層は近世堆積層であるとみられる。

#### (7) 5区1層（図12、図37）

219は古代須恵器片である。220は中国青磁である。3層が近世層であるため、これらの遺物は混在遺物である。

## 6. 1b区の調査

1b区では表土と客土をバックホウにより掘削したところ、既に弥生時代以前の土層が確認された。弥生時代の遺構は1b区にはみられないことが明らかであった。そこで、弥生時代の原の辻遺跡を構成している基本的な土層を明らかにする目的で、1b区の調査を行った。

### (1) 土層（カラー写真7）

詳細な土色・土質については図9を参照いただきたい。ここでは、土層の成因等について説明する（註3）。

22層は約100cm程度堆積しており、土質は極めて均質である。湖沼堆積のような流速がほとんどない状況での水成堆積が考えられる。遺物としては22層最上部（客土直下）で玄武岩製の凹石1点が出土しているが、遺物を多量に含む客土からの落ち込みであるとみられ、22層は基本的に無遺物である。

23層は22層と24層の漸移層である。24層は1b区東側では客土下でみられ、東側に大きくせりあがる。

25層～31層は基本的に砂質が強い層で、砂層と粘質層が互層になっている。河川堆積によるものと考えられる。31層で水生生物によるサンド・パイプが少数みられるが、海棲生物が残すほどの多くのサンド・パイプはみられないため海水は進入していないと考えられる。28層で採取した炭化物の放射性炭素年代の測定結果は未補正年代が $6430 \pm 40$ 年BP、補正年代が $6420 \pm 40$ 年BPである。この年代は棄畠光博による近年のAMS放射性炭素年代測定値の集成（棄畠2014）によれば、轟A式の年代に該当するため、縄文時代早期末頃の河川堆積層とみることができる。遺物は31層上面で細石刃1点が出土した（図38、写真22）。細石刃の出土標高は3.774mである。これまで、原の辻遺跡では弥生時代以降の層から細石刃関連遺物が出土しており、本例は弥生時代以前の層から出土した初例であるものの、年代的・堆積的にみて、二次堆積である。

32層は鉄を多く含む厚さ80cmに及ぶ粘質土層である。粘土粒子が均質な液状化現象でみられる噴砂が随所にみられる（写真23）。このような噴砂はマグニチュード6以上の直下型地震か、震源が離れていても長周期震動があった場合にみられるという。遺物は出土していない。

33層と34層は不整合で、34層以下は更新統である。34層では遺存状況の良好な自然木が1b区中央で出土した（図39、写真24）。この自然木の放射性炭素年代の測定結果は現時点での測定限界である43500年BPより古い年代であった。自然木の出土標高は2.50mである。36層は礫が多く含まれた砂礫層が70cm以上堆積した層である。

### 註

- 1) 遠賀川以東系・以西系の区分は田崎博之の分類（田崎1985）に従う。
- 2) 樹木を切り倒す場合は傾斜に対して斜め下方か真横に倒すべきであるとされる。真上に倒した場合は木がすべり作業者に危険が生じるため、また下方に倒した場合は衝撃で材が割れたり、より下方に滑り落ちる可能性があるためである。
- 3) 本項執筆にあたっては九州大学理学研究院下山正一助教、（株）火山灰考古学研究所早田勉所長のご教示を得た。

片岡宏二 2001「海峡を往来する人と土器－壱岐原の辻遺跡出土の擬朝鮮系無文土器を中心に－」『中山英彦先生退職記念論文集勾玉』

棄畠光博 2014「轟式土器の編年と鬼界アカホヤテフラ（K-Ah）の年代」『九州における縄文時代早期末～前期前葉の土器様相』第24回九州縄文研究会大分大会発表要旨・資料集

田崎博之 1985「須玖式土器の再検討」『史淵』122

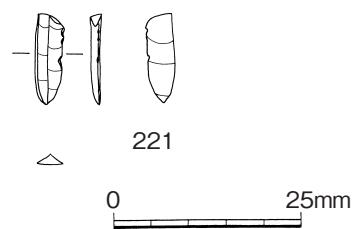


図38 1 b 区31層出土遺物 (1 / 1)

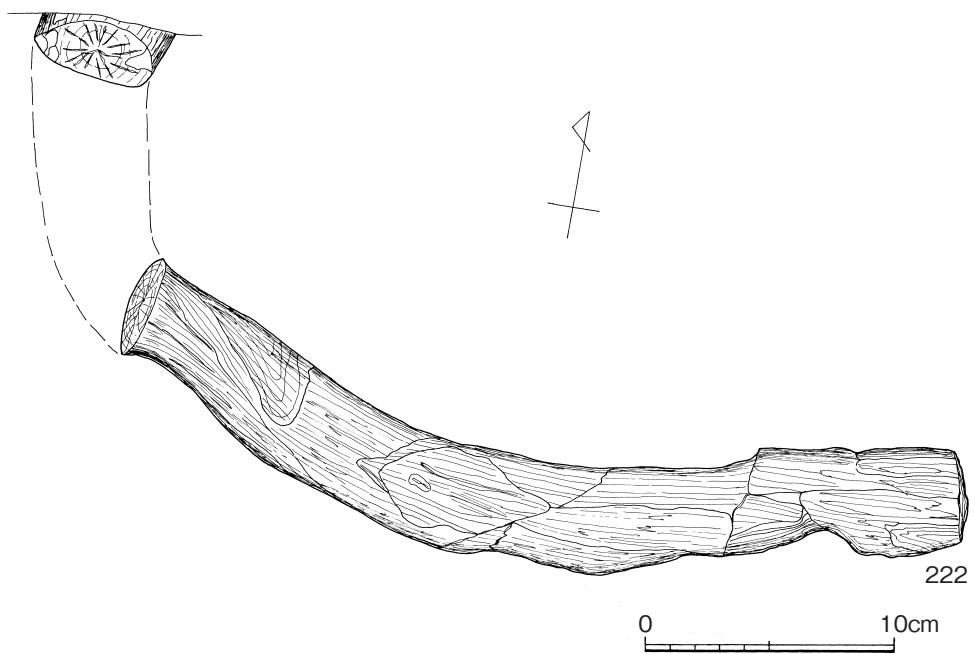


図39 1 b 区34層自然木出土状況 (1 / 3)









表5 遺物観察表（石器）

報告番号	調査区	遺構・層位	器種	石材	重量	長さ	幅	厚さ
3	3 区	1号竪穴建物跡②層	支脚	火山岩	2160 g	135.0mm	123.0mm	121.0mm
4	3 区	1号竪穴建物跡②層	支脚	火山岩	1880 g	148.0mm	134.0mm	98.0mm
5	3 区	1号竪穴建物跡②層	凹石	砂岩	620 g	95.0mm	90.0mm	46.0mm
86	3 区	1号竪穴建物跡①層	錘	頁岩	20.0 g	93.0mm	13.5mm	15.5mm
87	3 区	1号竪穴建物跡①層	凹石	砂岩	1260 g	125.0mm	109.0mm	60mm
88	3 区	1号竪穴建物跡①層	台石	砂岩	10960 g	319.0mm	203.0mm	110.0mm
121	3 区	3号土坑	凹石	砂岩	700 g	101.0mm	93.0mm	45.0mm
124	3 区	4号土坑	凹石	砂岩	975 g	109.0mm	103.0mm	53.0mm
204	2 a 区	河川跡9層	砥石	砂岩	452.51 g	144.0mm	74.0mm	26.0mm
205	2 a 区	河川跡9層	剥片	黒曜石	1.84 g	30.0mm	14.0mm	4.5mm
207	2 a 区	6層	細石刃核	黒曜石	1.17 g	16.0mm	14.0mm	5.5mm
221	1 b 区	31層	細石刃	黒曜石	0.01 g	11.76mm	3.96mm	1.03mm

表6 遺物観察表（鉄器）

報告番号	調査区	遺構・層位	器種	重量	長さ	幅	厚さ
89	3 区	1号竪穴建物跡①層	鉄片	14.68 g	34.15mm	21.12mm	8.63mm
90	3 区	1号竪穴建物跡①層	鋸造鉄斧片？	9.98 g	39.51mm	14.76mm	8.04mm
91	3 区	1号竪穴建物跡①層	刀子？	28.15 g	104.38mm	21.42mm	7.86mm
206	2 a 区	河川跡9層	鉄片	2.77 g	31.92mm	17.30mm	3.86mm

## IV. 総 括

### 1. 壺穴建物跡について

今次の川原畠地区の調査では、壺穴建物跡1基が検出された。この建物跡中央で、炉跡とみられる遺構が検出されている。これまで原の辻遺跡では多くの壺穴建物跡が確認されているが、炉跡は建物内中央に設置される事例、建物の壁際に設置される事例、建物の隅にカマド状遺構が設置される事例などが確認されている。建物内に炉跡が設置される箇所として最も事例が多いのは建物内中央に設置される事例である。

原の辻遺跡で検出された炉跡または焼土が建物内中央部にみられる壺穴建物跡を集成したものが表7である。時期は、弥生時代中期中葉から古墳時代初頭に及ぶ。弥生時代後期の事例は少ないものの、確認されているため、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけて炉を中央部に設置する壺穴建物は連綿と構築されたものと考えられる。

このような炉跡または焼土を中央部に持つ壺穴建物跡の平面形は弥生時代中期では円形、隅丸方形、長方形がみられ、弥生時代後期では長方形、古墳時代初頭では長方形または方形がみられる。炉跡が確認されていないものも含めて壺穴建物跡の変遷を検討した中尾篤志によると、弥生時代中期には円形・方形・隅丸方形があり、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて方形・長方形と変遷することが明らかにされており（中尾2003）、平面形の変遷は炉跡の有無に関わらず同一であることが確かめられる。

1号壺穴建物跡の炉跡自体の構造としては、直径約139cmの円形の壺穴で深さは14cmである。これまで発見された建物内での炉跡と比較すると、平面はやや大きく、深さもやや深い。

本炉跡で特筆されるのは、支石として用いられたものと推定される被熱痕跡のある石が2点確認されていることと、底部を打ち欠いた壺が供献されていることである。被熱痕跡のある石（3、4）は定型化された石製支脚（クド石）ではないが、背部が直線状となっており、後に定型化されるクド石の祖形となる可能性がある。被熱石の間隔は24cmで、炉跡における使用状況を示す貴重な事例であると考えられる。未掘削部分に更に存在する可能性がある。また、壺（1）の出土状況は床面直上で、残存状況は良好であるにも関わらず、底部片は全く出土しなかったことから、底部を打ち欠いたものと判断した。しかし、壺自体に被熱痕跡はなく、本来壺は火にかける器種ではないことから、炉跡廃絶後に供献したものと考えられる。これまでの調査では炉跡における遺物の出土状況を記録した調査が少ないこともあり、炉跡に壺を供献した事例は確認されていない。2006年度調査高元地区SC02で弥生時代後葉の甕が潰された格好で出土したことがある（松見・山口・田中2007）が、今次の事例とは器種と時期が異なる。今後の検出事例を注視していきたい。

今次の調査で検出された1号壺穴建物跡は出土遺物から弥生時代中期後葉の所産であるとみられるが、平面形が円形を呈することや炉跡の位置、構造からも時期比定に大きな問題がないものと考えられる。また、平面形の規模、炉跡の存在から当該遺構は壺穴建物跡と考えて支障はない。

表7 中央部に炉・焼土をもつ竪穴建物跡

調査年度	地区	竪穴建物跡	時期	竪穴建物			炉・焼土				文献
				平面	長辺	短辺	平面	長軸	短軸	深さ	
1996	原	6号竪穴住居跡	須玖Ⅰ式	隅丸方形	3.6m	2.6m	不整形	66cm	48cm	-	宮崎編1999
2005	原	SC1	弥生時代中期中葉	長方形	5.54m	4.35m	円形	56cm	10cm	松見・山口編2006	
2003	高元	SC5	弥生時代中期後半	隅丸長方形	4.2m	2.5m	不整形	96cm	84cm	地床炉	中尾編2004
1999	原	2号竪穴住居跡	弥生時代中期後半	隅丸長方形	5.2m	4.3m	不整形	84cm	36cm	-	山口編2001
1999	原	1号竪穴住居跡	弥生時代中期	長方形	3.3m	3.2m	-	-	-	-	山口編2001
1999	原	3号竪穴住居跡	弥生時代中期	円形	-	-	不整形	138cm	72cm	-	山口編2001
2000	原	6号竪穴住居跡	弥生時代中期	方形	4.5m	4.5m	円形	48cm	12cm	山口編2001	
2000	原	11号竪穴住居跡	弥生時代中期	円形	-	-	円形	120cm	15cm	山口編2001	
2006	高元	SC02	弥生時代後期中葉	長方形	5.45m	5.25m	不整形	88cm	80cm	-	松見・山口・田中編2007
2000	原	15号住居跡	弥生時代後期	方形	5.4m	5.1m	円形	120cm	-	山口編2001	
2001	原	1号住居跡	弥生時代中期後半～後期	隅丸方形	3.4m	3.3m	円形	60cm	4cm	山口編2002	
2000	原	1号竪穴住居跡	弥生時代中期～古墳時代	長方形	8.6m	5.4m	正方形	30cm	30cm	6cm	山口編2001
2000	原	2号竪穴住居跡	弥生時代後期～古墳時代	長方形	4.2m	3.2m	円形	70～80cm	9cm	山口編2001	
2000	原	8号竪穴住居跡	弥生時代後期～古墳時代	長方形	5.8m	4.1m	楕円形	80cm	65cm	-	山口編2001
1995	原	1号竪穴住居跡	古墳時代初頭	隅丸長方形	2.26m	1.68m	円形	50cm	9cm	宮崎編1999	
1995	原	2号竪穴住居跡	古墳時代初頭	長方形	7.3m	6m	(中央)円形	30cm	-	宮崎編1999	
1996	原	1号竪穴住居跡	古墳時代初頭	方形	3m	2.8m	不整形	90cm	15cm	-	宮崎編1999
2009	高元	SC04	古墳時代初頭	長方形	4.56m	3.73m	楕円形	104cm	82cm	10cm	田中・山口編2011

## 2. 土坑・ピット群について（図40）

今次の川原畠地区の調査では、多数の土坑・ピット群が検出された。平面分布としては3区、4区、5区にみられる。3区、4区では全面に土坑・ピット群が確認された。5区では近世層の堆積のため東側の状況は不明であるが、西壁から約9.5mまでの範囲では弥生時代の基盤層である5区7層が確認され、土坑やピットが確認されている。

これまでの調査でも川原畠地区では多くの土坑・ピット群が検出されている。1994年度川原畠地区の調査（山下2997）ではB区、D区で土坑・ピットが集中して検出され、2012年度川原畠地区の調査（古澤編2013）では1区、3区、5区といった調査区東側で集中して検出されている。今次の調査で調査区中央や西側に位置する3、4、5区で土坑・ピット群が発見されたことにより、1994年度調査川原畠地区B区周辺を中心に、河川に挟まれた土地に土坑・ピット群の集中域が存在することが明確となった。

今次の調査で検出されたほとんど全ての土坑・ピットは上面が削平を受けているものとみられ、本来の掘り込み面の標高は不明である。平面形態は円形、楕円形、不整形が多いが、長方形のものもある。これらの土坑・ピット群の時期は須玖Ⅱ式が主体的に出土していることから弥生時代中期後葉であるとみられる。半截した土坑である1号土坑と14号土坑では土坑内から出土する土器は磨耗が甚だしいことや、断面を観察すると土層の堆積に沿って遺物も分布していることから土坑に廃棄後しばらくして土層が堆積したものとみられる。ただし、土器型式の時期幅は大きくないため、弥生時代中期後葉には既に埋没していたことは確実である。

1号土坑の底面の標高は4.83m、14号土坑の底面の標高は4.63mで、地点や土坑の性格によって床面の標高が異なる可能性がある。

14号土坑では少なくとも3点の30～40cm大の板石が床面からやや浮いた状態で出土しているが、これまでの調査では確認されたことのない事例である。

### 3. 弥生時代の自然河川跡について（図40）

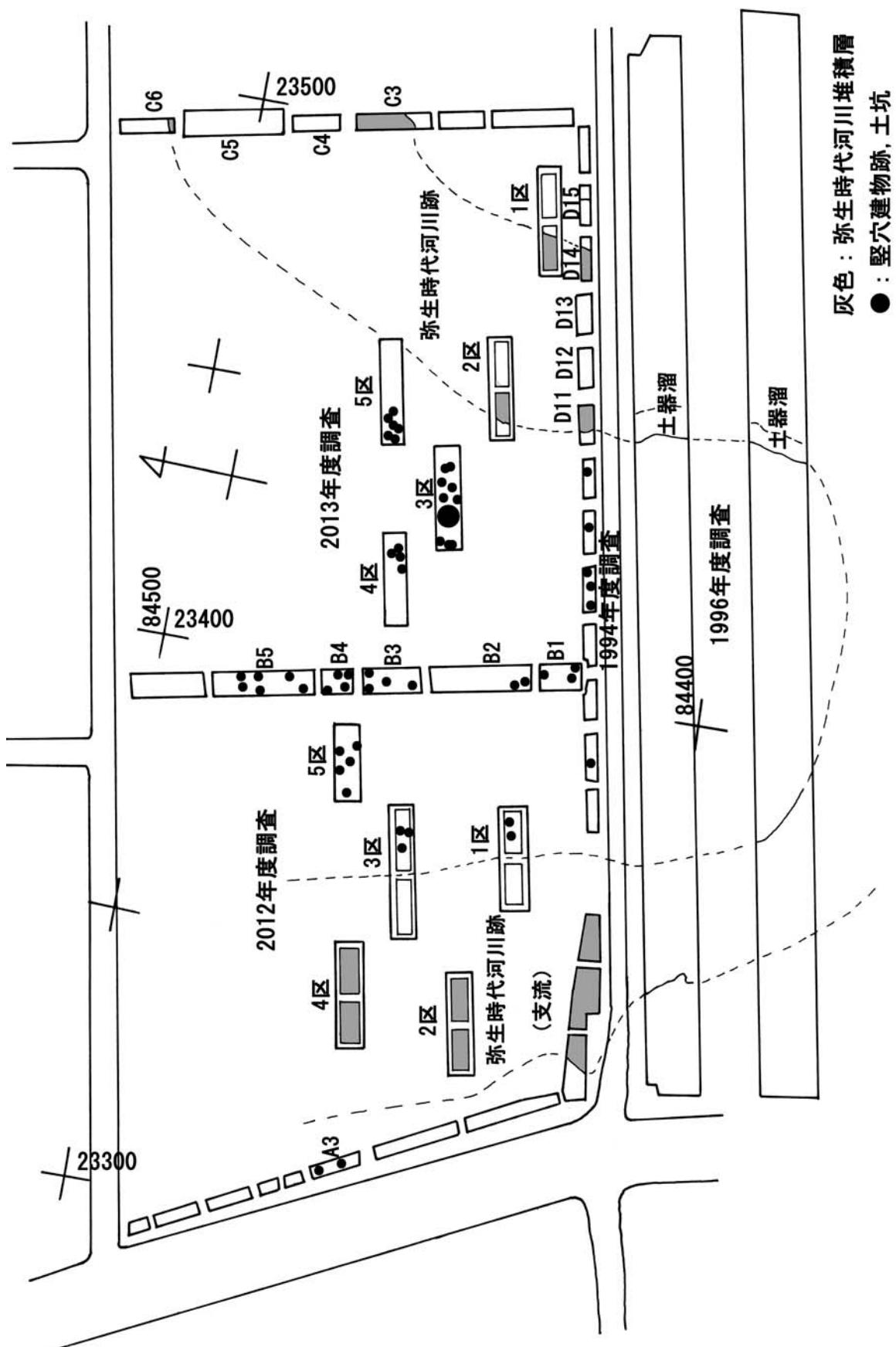
弥生時代の河川跡は1a区と2a区で確認されている。この2箇所の河川跡は一連のものであると考えられ、河川幅は約35mとなる。1a区では河床面まで調査しており、河床面の標高は2.56mである。この標高は隣接の1b区の土層を参照すると、ほぼ更新統の上面であり、更新統のしまりが強い硬い土層まで侵食されている。1a区と2a区の川岸の落ち込みを比較すると、1a区が比較的急に落ち込むのに対し、2a区では比較的緩やかに落ち込むという差異がある。

のことと河川堆積土層からの遺物の出土傾向には相関関係があるものと考えられる。1a区では岸から3.2m離れた地点から西側にかけて遺物が多く分布する一方、2a区は川岸に多く遺物が分布する。このことは1a区の方が流速が早かったため、侵食が甚だしく、落ち込みが急となり、遺物が川岸にほとんど分布しない一方、2a区の方が流速が緩慢で、侵食度合いも低く、遺物が多く堆積したという状況を反映しているものと考えられる。比較的近接した調査区である1a区と2a区の流速に差異があることは、流路が必ずしも直線的ではなく、西側に曲流していることを示すものと考えられる。河川はこれまでの調査結果から推測すると大きく東に曲流しているが、1a区と2a区という非常に限定された箇所に限ってみれば西側に振れる箇所もあったものと推測される。

これまでの調査成果との対応は図40のとおりである。北側の河川跡の延伸状況としては、1994年度調査C6区とC3区で河川堆積土及び川岸の立ち上がりが確認されている。今次調査の5区では近世堆積土のため弥生時代の河川跡があったか不明瞭であるが、5区の中央附近まで弥生時代中期の土坑・ピット群が存在するため、5区中央部以東の地点に川岸があったものと考えられる。南側の河川跡の延伸状況としては、1994年度D11区とD14区で河川堆積土層が確認されているため、これに接続するものと考えられる。更に南側には1996年度調査区があるが、この調査では河川跡の西岸は把握されており、おおむね今次調査2a区、1994年度調査D11区で確認された西岸に接続することがわかる。1996年度調査区では西岸附近で土器溜が確認されているが、今次調査区検出河川跡での遺物出土状況は全て二次堆積によるもので、様相が異なる。河川における土器溜としては2012年度調査4区で確認されたことがある。

河床面の標高は1994年度C6区で3.49m、1994年度C3区で3.25m、今次2a区で2.56m、1994年度D14区で2.93m、1996年度北側調査区で1.95m、1996年度南側調査区で2.12mとなっている。これまで、1994年度C6区、C3区側を下流と想定してきたが、理解の難しい結果となっている。河川の一部に深い部分があった可能性もある。

弥生時代の河川跡の時期としては、今次の調査で弥生時代中期後葉の時期の遺物が出土しているため、弥生時代中期後葉に河川の堆積があったものと考えられる。しかし、今次の調査区では堅穴建物跡、土坑・ピット群から弥生時代中期後葉の遺物が圧倒的に多く出土しており、河川に流れ込む遺物があるとすれば、弥生時代中期後葉の遺物にほぼ限定されるという状況にあり、河川跡がいつまで存続したのかは河川堆積層出土遺物では判断できない。この弥生時代の河川跡の上層で1a区1号溝及び1a区2号溝、2a区3号溝が確認されているが、1号溝と2号溝では弥生時代中期後葉の遺物しか確認されていない。また3号溝では遺物が出土していない。1号溝、2号溝、3号溝の年代は層位上、弥生時代中期後葉以降、中世以前ということがわかるのみで、河川跡の最終的な堆積時期を詳細に決定することはできない。ただし、次に述べる近代の河川跡が弥生時代の河川跡とほぼ重なる範囲



にみられることは、弥生時代の河川跡の地が相対的に低いという状況は後世にまで存続した可能性が高い。

#### 4. 近代の自然河川跡について（図41）

深江田原を西から東へ流れる幡鉾川は、大きく蛇行を繰り返す河川であったことが1861年成立の『夷岐名勝図誌』卷之七「津合橋」の状景や1920年の陸軍地図からわかる。これによれば津合橋からほぼ直線的に東流していた河川は途中で大きく流路を変えてほぼ直角に北流して、川原畠から閨縁地区の東端を流れ、玉主壳の墓の下で再度蛇行する。1939年、遺跡周辺で大規模な河川改修が行われ、津合橋の周辺から下流の坊主橋付近まで幡鉾川は直線化された。その結果、川原畠・閨縁地区の近代河川は埋められて新しい耕地が作られた。

今年度の調査において、2 b区より近代河川の一部が検出された。それは川岸のラインが北東方向に走っており、陸軍の地図とするとおよそ35m東にずれることができた。陸軍の地図では今年度調査の3・4・5区を通っているが、いずれの調査区においても近代河川は確認されなかった。また1994年度の川原畠地区の調査において、D12区で左岸が、D13区で右岸附近が確認されており、その川幅は約13mである。つまりD12区と2 b区の左岸を結んだ線が近代の河川のルートである。その幅からすると今次調査の1区と2区の間に右岸があることになる。古老からの聞き取りによると、改修前の川は川幅が狭く、両岸には柳やポプラの木が植わっていたというが、今回の調査における伐採痕のある立木などの出土状況はそれと符合している。

近代の河川跡は弥生時代の河川跡より川幅は狭く、弥生時代の河川跡の範囲におおむね収まるものと考えられる。

#### 5. 1 b区の土層について

1 b区は表土を剥ぐとすぐに沖積層となり遺構がまったく検出されなかった。そこで懸案であった平野部の基本土層を確認するため、深度発掘を行うことにした。結果地表から3.8m掘り下げた。

低地部は後期更新世の幡鉾川層と完新世の原の辻層という2層からなる。

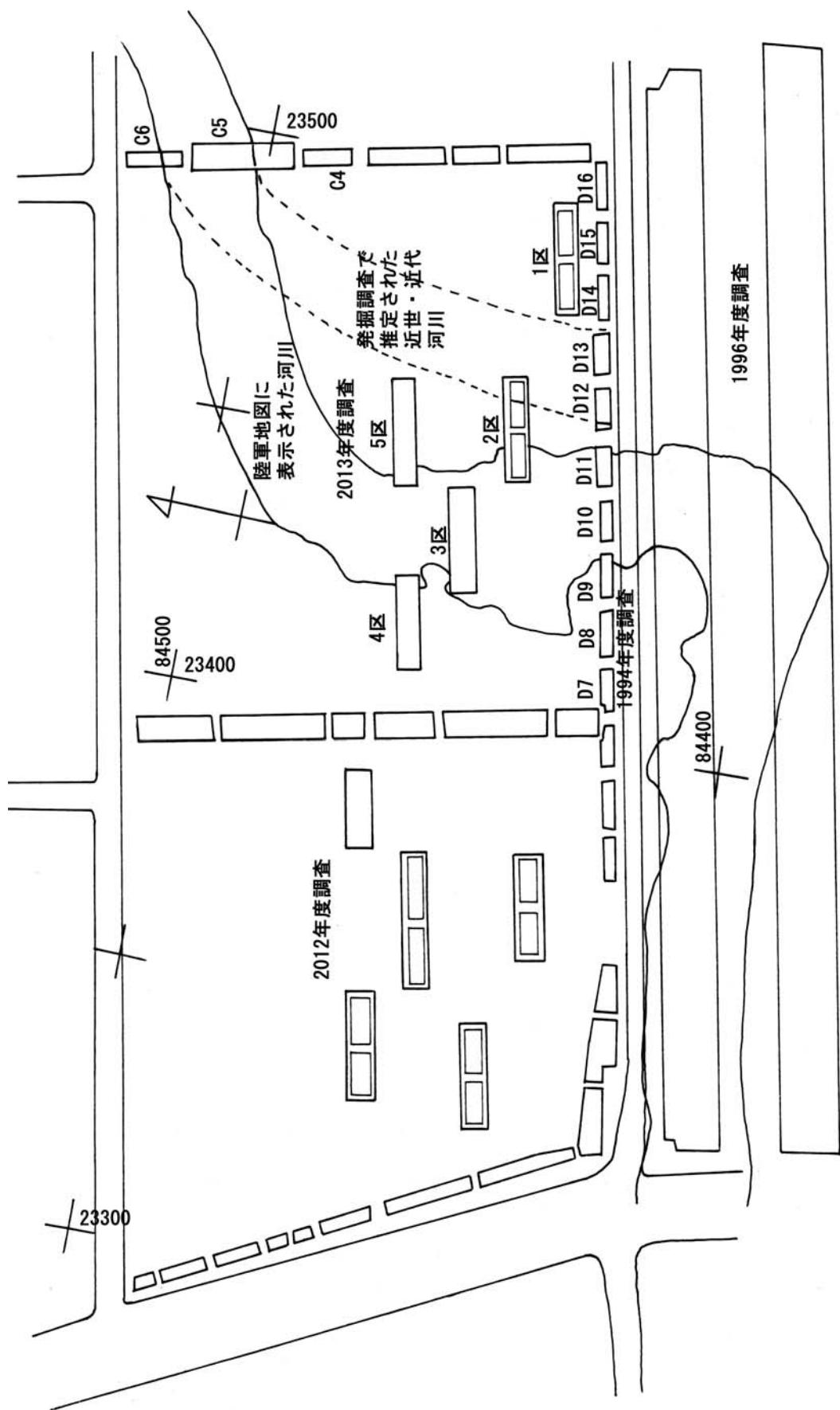
##### ①幡鉾川層

最上面の高さは標高2.55mである。これは稻田らが報告した第2地点（1 b区の南約10m）のナウマンゾウやオオツノジカの出土層準とほぼ同じである。このことは他の調査区のデータと照合して、津合橋が高く下流側が緩やかに低くなることを示している。

ナウマンゾウやオオツノジカの出土層準は、幡鉾川層最上部の砂質もしくは砂礫層である。1 b区では青灰色の色調を呈している。今次調査では哺乳動物化石は検出されなかったが、自然木が出土した。そして、花粉分析のデータが得られている。それによると樹木花粉として、モミ属、トウヒ属、マツ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、トネリコ属等25種類の花粉が検出されている。草本類ではカヤツリグサ科が優越している。弥生時代の旧河川ではシイ属マテバシイ属が卓越しており顕著な相違がみられる。<sup>14</sup>C年代の結果と併せると最終氷期最寒冷期以前の植生が想定される。

##### ②原の辻層

原の辻層の形成年代について新しい知見が得られた。従来、長岡らの提出した見解では、津合橋下



の原の辻層最下部の木材の14C年代、 $4200 \pm 40$ yBP (GX-24661、長岡未公表資料)とされていた。1 b 区28層から得られた炭化物の補正14C年代は、 $6420 \pm 40$ yBP (Beta-371844) であった。28層の下位には原の辻層が1 m弱堆積していることからこの地区の原の辻層の堆積年代は2000年以上さかのぼることは確実である。それにしても現在までのところ低地部では後期旧石器時代から縄文時代草創期に該当する年代の土層は検出されていない。

1 b 区32層は、約80cmの厚さをもつ黄褐色粘質砂層である。この層にみられる沈着した鉄分は砂パイプによって擾乱されている。砂パイプはマグニチュード6クラスの大地震か長周期震動によって生じた液状化現象と思われる。原の辻遺跡で地殻変動の痕跡が確認されたのは初めてである。

## 6. 出土遺物について

今次の川原畠地区における調査では弥生時代土器をはじめ多量の遺物が出土した。遺物は須玖Ⅱ式を中心とする時期の遺物が多い。甕には遠賀川以西系の逆L字口縁の甕が多くみられるが、遠賀川以東系の跳ね上げ口縁の甕も一定量認められる。半截した遺構における遠賀川以東系の口縁部個体比率は1号堅穴建物跡で7.5%、1号土坑で20%であった。1994年度川原畠地区調査においても遠賀川以東系の跳ね上げ口縁甕が多く出土し、多く出土した土坑では20%前後の出現率を示しており、また2012年度の川原畠地区調査でも安定して遠賀川以東系土器が出土している。これらのことから、川原畠地区では遠賀川以東の地域との関係がみられることが特徴の一つとしてみられることが確定的となつた。なお、遠賀川以東系の跳ね上げ口縁の口縁部（頸部直上）に、鋭い木片状の工具痕が残る例が多いことを2012年度の報告書で特記したが、今次の調査資料でも同様の資料が認められた(45、102)。

なお、今次の川原畠地区の調査では、韓半島・中国大陸系といった地域からの搬入土器の出土はみられなかった。今次の調査で主体的に出土した須玖Ⅱ式段階は併行関係からみると、粘土帶土器や滑石混入土器を含む楽浪系土器が該当する。これまでの調査結果（古澤2010）と照らしても川原畠地区における外来系土器の比率は高くなく、また、弥生時代中期の外来系土器は不條地区に集中し、弥生時代中期の段階における不條地区での渡来人の集住が想定されてきた（宮崎2000）。今次の調査で外来系搬入土器の出土がみられなかつことはこれまでの出土傾向を補強するものであるといえる。しかし、今次の調査では韓半島粘土帶土器の影響を受けた可能性があり擬弥生土器ともみられる須玖Ⅱ式甕が1号溝で1点出土しており、多くの粘土帶土器が集中して出土している不條地区との関係を考える必要がある。

## 7. 川原畠地区における時期的変遷

### 後期更新世

1 b 区36層～34層が形成された。過去の調査で1 b 区南側約10mの地点でナウマンゾウやオオツノジカの化石が発見されているが、1 b 区34層では自然木が出土した。

### 縄文時代草創期から弥生時代

1 b 区33層～22層が堆積した。32層では液状化現象によるとみられる噴砂痕跡がみられ、大規模または長周期の地震があつたものとみられる。31～23層は河川堆積により形成されている。28層の放射

性炭素年代値は縄文時代早期末を示しているが、測定資料は土層中の炭化物であり、この時期を中心とする時期に河川が流れていたものと考えておく。22層は湖沼堆積のような流速がほとんどない堆積状況を示しており、湿地状であったものとみられる。

人工遺物としては1 b 区31層（縄文時代早期末を中心とする時期）で出土した細石刃および2 a 区6層（中世）で出土した細石刃核が挙げられる。いずれも原位置での出土ではないが、縄文時代草創期の遺物であり、調査区附近で縄文時代草創期に人間の活動が行われたことを示す。これまで細石刃文化期の遺物は不條地区などで集中的に発見されているが（川道2014）、今次調査の川原畠地区にも活動の痕跡が拡がるものとみられる。一方、早期以降の縄文時代遺物は今次の調査では確認されていない。原の辻遺跡で出土する縄文時代早・前期の遺物としては石匙や石鏃などが挙げられるが（古澤・田中2014）、川原畠地区ではこれまでほとんど確認されておらず、縄文時代早期末頃に河川が流れ、その後湖沼状の湿地が形成されていたものの、人間活動は積極的に行われていないものとみられる。

### 弥生時代中期後葉

調査区東側を中心に幅約35m程度の河川が流れていた。河川堆積土には須玖Ⅱ式段階の土器が主体的に包含されていることから、弥生時代中期に堆積が始まっている。河川東岸の1 a 区では河川の流速が比較的速く、河川西岸の2 a 区では河川の流速が比較的遅かったことが遺物の出土状況から窺える。1 a 区の河川堆積土である20層の花粉分析からでは樹木花粉が85%を占め、シイ属—マテバシイ属が優占することから河川の周囲がスダジイ林に覆われていたと推測されている。

一方、3区・4区・5区といった調査区西側では、土坑・ピット群が多く築かれた。1994年度及び2012年度の調査でも多くの土坑・ピット群が検出されているが、これらの土坑・ピット群と一連のものである。土坑の多くは廃棄土坑であるとみられる。このような土坑・ピット群の中に竪穴建物跡が1基築かれている。周辺で竪穴建物跡が発見されていないことから、建物跡が集中する丘陵部とは対照的にやや独立した建物であったものとみられる。この竪穴建物跡内部では中央に炉がみられる。また、この建物跡では出土遺物から鉄器も使用されていたことがわかる。

### 弥生時代後期・古墳時代

今次の調査ではこの時期の遺構、遺物とも認められなかった。今次の調査区における人間の活動は弥生時代中期後葉が中心であったものと思われる。

### 古代

今次の調査ではこの時期の遺構は発見されなかった。近世層である5区1層で須恵器片が1点出土しているのみである。

### 中世

2 a 区6層、2 a 区4層では貿易陶磁や陶器片などが出でおり、中世の包含層が形成された。このほか近世層である5区7層でも龍泉窯青磁が出土している。2012年度の調査区では貿易陶磁の中でも韓半島産陶磁の出土が目立ったが、今次の調査区では中国産青磁の出土が多い。

### 近世

2 a 区3層、4区1層、5区7～1層が形成された。染付片、瓦片などが出土している。

### 近・現代

調査区東側に川幅13m程度の河川が流れていた。2 b 区に西岸がみられる。川岸には樹木が繁茂していた。1939年に川が埋め立てられ、水田として活用された。この際、1号暗渠が敷設された。

## 8. 2013年度川原畠地区の調査成果

2013年度の川原畠地区の調査の成果としては、①従来の調査で確認されていた弥生時代の河川の状況の確認、②従来の調査で確認されていた弥生時代中期の土坑・ピット群の面的な広がりの確認、③川原畠地区では初例となる竪穴建物跡の確認、④近・現代における河川及び土地利用の状況の確認、⑤弥生時代以前の土層形成の確認等が挙げられる。これらの成果にみられるように、今後、史跡整備にあたって貴重な資料を得ることができた。

### 引用文献

- 川道寛2014「旧石器時代～縄文時代草創期の原の辻遺跡」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』4  
田中聰一・山口優編2011『特別史跡 原の辻遺跡』壱岐市文化財調査報告書第16集  
中尾篤志2003「(5) 小結」『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第26集  
中尾篤志編2004『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第28集  
古澤義久2010「壱岐における韓半島系土器の様相」『日本出土の朝鮮半島系土器の再検討－弥生時代を中心  
に－』 第59回埋蔵文化財研究集会発表要旨集  
古澤義久編2013『原の辻遺跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第9集  
古澤義久・田中聰一2014「縄文時代の原の辻遺跡」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』4  
松見裕二・山口優編2006『特別史跡 原の辻遺跡』壱岐市文化財調査報告書第9集  
松見裕二・山口優・田中聰一編2007『特別史跡 原の辻遺跡』壱岐市文化財調査報告書第10集  
宮崎貴夫編1999『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集  
宮崎貴夫2000「原の辻遺跡の朝鮮半島系土器について」『原の辻ニュースレター』5  
山口優編2001『特別史跡 原の辻遺跡』芦辺町文化財調査報告書第12集  
山口優編2002『特別史跡 原の辻遺跡』芦辺町文化財調査報告書第13集  
山下英明1997「原の辻遺跡（平成6年度川原畠地区）の調査」『原の辻遺跡・安国寺前A遺跡・安国寺前B  
遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第1集

## 2013 年度原之辻遗址川原畠地区的考古发掘

2013 年 10 月 17 日至 12 月 27 日为了明确土地利用状况, 对原之辻遗址北侧洼地进行了考古发掘。发掘区域为; 南北 5 米、东西 20 米的五个区域, 编为 1 之 5 区。之前, 在调查区域的周围发现过弥生时代中期的河流, 灰坑及小灰坑群等。

通过共发现房址 1 座, 灰坑 27 座, 小灰坑 171 座, 沟 3 条, 河流 1 条等。在调查区中央和东侧发现了弥生时代的河流。弥生时代中期的灰坑、小灰坑主要集中在调查区的西侧。大部分的灰坑是用来丢弃生活用具的。

本此次发掘出土的遗物主要有; 绳文时代草创期的细石叶、细石核、弥生陶器、弥生时代石器、中世的中国青瓷和近世的陶瓷等。

(訳: 古澤義久, 校: 王達來)

## 2013 年도 하루노쓰지 (原の辻) 유적 카와하라바타케(川原畠)지구

### 발굴 조사 성과

2013 년 10 월 17 일~12 월 27 일에 걸쳐, 하루노쓰지유적 북측 저지부 토지 이용을 밝히는 것을 목적으로 발굴조사를 실시하였다. 발굴조사구는 남북 5m × 동서 20m 조사구 5 개소를 설정하고, 1 구에서 5 구까지 번호를 지정하였다. 현재까지 발굴구 주변 조사에서는 야요이시대 중기의 하천, 토갱 · 구멍 등이 발견되었다.

이번 발굴조사에서는, 수혈주거지 1 기, 토갱 27 기, 구멍 171 기, 구상유구 3 조, 하천 등이 발견되었다. 조사구 중앙 및 동측에서는 야요이시대의 하천이 발견되었다. 조사구 서측에서는 야요이시대 중기의 토갱 · 구멍이 집중적으로 발견되었다. 대부분의 토갱은 생활 용구를 폐기한 것으로 추측된다.

출토 유물로는 죠몽시대 초창기의 세석인, 세석핵, 야요이 토기, 야요이시대 석기, 중세 중국 청자, 근세 도자기 등이 있다.

(訳: 古澤義久)



写真 2 1号竪穴建物跡遺物出土状況（2）



写真 4 1号土坑完掘状況

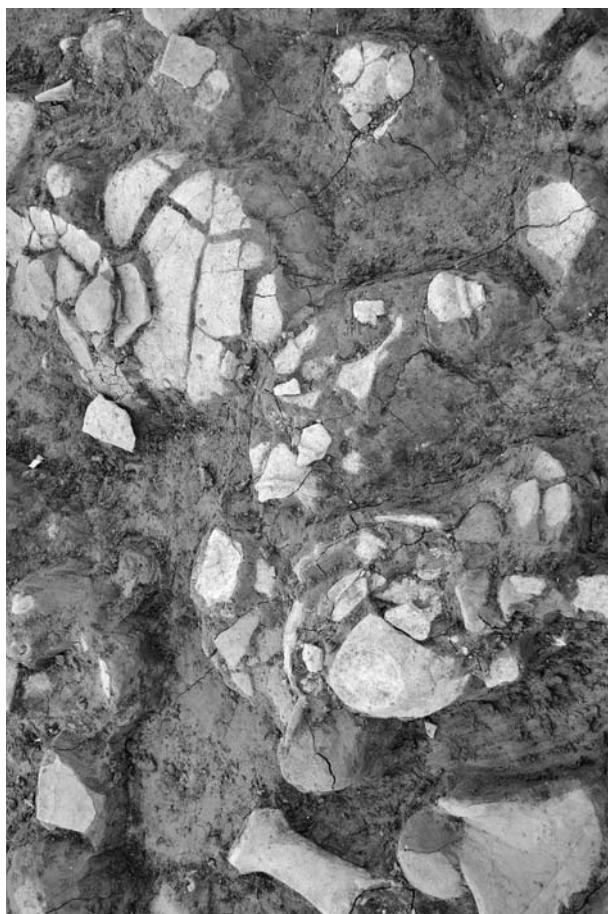


写真 1 1号竪穴建物跡遺物出土状況（1）



写真 3 1号土坑遺物出土状況



写真6 14号土坑完掘状況



写真8 5区土坑・ピット群検出状況



写真5 14号土坑遺物出土状況



写真7 4区土坑・ピット群検出状況



写真10 1号溝遺物出土状況



写真12 2号溝完掘状況



写真9 1号溝・2号溝検出状況



写真11 1号溝土器 (175) 出土状況



写真14 1号暗渠跡断面



写真16 1a区河川跡立ち上がり状況



写真13 3号溝完掘状況



写真15 1a区河川跡堆積土層

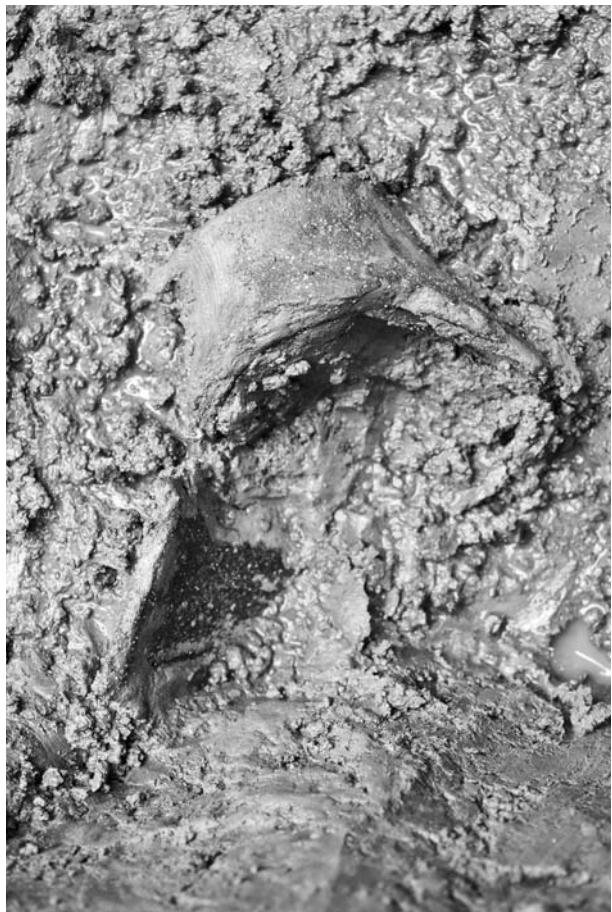


写真17 1 a 区河川堆積土 (20層) 土器 (179)・自然木出土状況



写真18 1 a 区河川堆積土 (19層) 土器 (180) 出土状況



写真19 2 a 区河川堆積土 (9層) 遺物出土状況

写真20 2 a 区河川堆積土 (10層・11層) 遺物出土状況



写真22 1b区31層出土細石刃



写真24 1b区34層自然木 (222) 出土状況



写真21 2b区近代河川跡



写真23 1b区32層噴砂現象

# 平成25年度原の辻遺跡調査研究事業発掘調査における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

## I. 花粉分析

### 1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。しかし花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

ここでは、原の辻遺跡川原畠地区における植生と堆積環境を検討する目的で、花粉分析を実施した。

### 2. 試 料

分析試料は、下に示す2点である。

- ・試料1 川原畠1a区20層（河川堆積土、黒褐色砂質シルト）
- ・試料2 川原畠1b区34層（堆積土）

各試料の粒度組成をみると、試料1は砂が最も多く、泥（シルト・粘土）もやや多い。砂は中粒砂にピークがあり、水流による淘汰を受けて堆積している。有機質含有量は低いが、炭化および分解質の微細植物遺体片が多く含まれ、風化および土壤生成を受け分解の行われた堆積物が堆積したものである。試料2はシルト・粘土が多く、砂もやや多い。砂は細粒砂から中粒砂でピークがあり、水流による淘汰を受けているが、シルト・粘土が多く、微細植物遺体では炭化および分解質の遺体もやや高密度で未分解の遺体も高密度であり、分解を受けた堆積物と受けていない堆積物の双方の要素を有し、風化や土壤化を受けた後に堆積したものと水域の直接取り込まれ堆積したものがあると考えられる。

### 3. 方 法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から 1 cm<sup>3</sup>を採量
  - 2) 0.5% リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
  - 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
  - 4) 25% フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
  - 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
  - 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
  - 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製
  - 8) 検鏡・計数
- 検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、

属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉（1973）、中村（1980）を参照して行った。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

#### 4. 結 果

##### (1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉33、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉14、シダ植物胞子2形態の計52である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、周辺の植生を復原するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図2に示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

###### 〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属、マツ属複維管束亜属、マツ属单維管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、ノグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属-マテバシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、サンショウ属、モチノキ属、ニシキギ科、カエデ属、ツバキ属、グミ属、ハイノキ属、モクセイ科、トネリコ属、タニウツギ属、イスノキ属、スイカズラ属

###### 〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、マメ科、ニワトコ属-ガマズミ属

###### 〔草本花粉〕

ガマ属-ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ネギ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、カラマツソウ属、ワレモコウ属、ツリフネソウ属、セリ亜科、キク亜科、ヨモギ属

###### 〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

##### (2) 花粉群集の特徴

###### 1) 試料1 川原畠1 a区20層

樹木花粉が85%以上を占め、シイ属-マテバシイ属が卓越する。他にクリ、コナラ属アカガシ亜属が低率に出現する。草本花粉では、イネ科、セリ亜科、ヨモギ属などが出現する。

###### 2) 試料2 川原畠1 b区34層

樹木花粉が31%、草本花粉が62%を占める。樹木花粉では、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ、モミ属、クマシデ属-アサダ、トネリコ属、ハシバミ属、コナラ属アカガシ亜属、スギ、マツ属複維管束亜属、カバノキ属などが低率に出現し、トウヒ属、マツ属单維管束亜属が出現する。草本花粉では、カヤツリグサ科が優占し、次にイネ科が多く、ヨモギ属、セリ亜科、キク亜科が出現する。

## 5. 花粉分析から推定される植生と環境

### 1) 川原畠 1 a 区20層（試料1）

シイ属-マテバシイ属が優占する。生態からみてスダジイが考えられ、周囲はスダジイ林が分布し、堆積地である河川の周囲もスダジイ林に覆われていたと推定される。他にはクリやコナラ属アカガシ亜属（カシ類）なども森林要素として生育していた。草本は少なく、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、セリ亜科などが林縁に生育していた。

### 2) 川原畠 1 b 区34層（試料2）

草本が多く、カヤツリグサ科、イネ科を主にヨモギ属、キク亜科、セリ亜科などが分布する。樹木は少ないが多様で、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ、クマシデ属-アサダ、トネリコ属、ハシバミ属、カバノキ属の落葉広葉樹、コナラ属アカガシ亜属の照葉樹、モミ属、スギ、マツ属複維管束亜属の針葉樹が森林の主要要素である。なお、トウヒ属とマツ属単維管束亜属の寒冷種が検出されており、これらは最終寒冷期の堆積物からの二次的な誘導化石（dirinved fossil）とみなされる。したがって、寒冷種が多いモミ属、湿地林を構成する種類や寒冷種を含む落葉広葉樹、寒冷な湿原で優占する草本のカヤツリグサ科、イネ科、ヨモギ属なども同様に誘導化石と推定される。

## 6. まとめ

以上から、川原畠 1 a 区20層（試料1）では、シイ属-マテバシイ属（スタジイ林）の優勢な分布が示唆された。川原畠 1 b 区34層（試料2）では寒冷種ないし沼沢種が含まれ、二次的な誘導化石（dirinved fossil）の含有が示唆された。

## 参考文献

- 土質工学会編（1979）土質試験法, p. 2-5-1～2-5-23, 4-2-1～4-3-11.
- 金原正明・金原正子（2013）植生と農耕における土壤層分析の実証的研究、日本文化財科学会第30回大会研究発表会要旨集、p. 112-113.
- 金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原、新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店, p. 248-262.
- 中村純（1967）花粉分析、古今書院, p. 82-102.
- 島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態、大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.
- 中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として、第四紀研究, 13, p. 187-193.
- 中村純（1977）稻作とイネ花粉、考古学と自然科学、第10号, p. 21-30.
- 中村純（1980）日本産花粉の標識、大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

## II. 放射性炭素年代測定

### 1. はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素(<sup>14</sup>C)の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の<sup>14</sup>C濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により<sup>14</sup>C年代から曆年代に較正する必要がある。

ここでは、原の辻遺跡川原畠地区における年代を検討する目的で、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行った。測定にあたっては、米国 Beta Analytic Inc. の協力を得た。

### 2. 試料と方法

測定試料は、川原畠1 b区の28層より出土した堆積物、同34層より出土した自然木の2点である。

放射性炭素年代測定の手順は以下のとおりである。

まず、試料に二次的に混入した有機物を取り除くために、以下の前処理を行った。

- 1) 蒸留水中で細かく粉碎後、超音波および煮沸により洗浄
- 2) 塩酸(HCl)により炭酸塩を除去後、水酸化ナトリウム(NaOH)により二次的に混入した有機酸を除去
- 3) 再び塩酸(HCl)で洗浄後、アルカリによって中和
- 4) 定温乾燥機内で80°Cで乾燥

前処理後、試料中の炭素を燃焼して二酸化炭素に変え、これを真空ライン内で液体窒素、ドライアイス、メタノール、n-ペンタンを用いて精製し、高純度の二酸化炭素を回収した。こうして得られた二酸化炭素を鉄触媒による水素還元法でグラファイト粉末とし、アルミニウム製のターゲットホールダーに入れてプレス機で圧入しグラファイトターゲットを作製した。これらのターゲットをタンデム加速器質量分析計のイオン源にセットして測定を行った。測定試料と方法を表1にまとめた。

表1 測定試料及び処理

試料名	出土地点・層位	種類	前処理・調整	測定法
No.1	1 b 区 28層	堆積物	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.2	1 b 区 34層	木 材	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS

※AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

### 3. 結 果

年代測定の結果を表2に示す。

#### 1) <sup>14</sup>C年代値

試料の<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比から、単純に現在(AD1950年)から何年前かを計算した値。<sup>14</sup>Cの半減期は国際的慣例により Libby の5568年を使用した(実際の半減期は5730年)。

#### 2) δ<sup>13</sup>C測定値

試料の測定<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比を補正するための炭素安定同位体比(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)。この値は標準物質(PDB)

表2 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	未補正 <sup>14</sup> C年代 <sup>1)</sup> (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ <sup>2)</sup> (‰)	補正 <sup>14</sup> C年代 <sup>3)</sup> (年BP)	暦年代(西暦) <sup>4)</sup>
No 1	371844	6430±40	-25.9	6420±40	交点: cal BC5460, BC5450, BC5380 1 σ: cal BC5470~5360 2 σ: cal BC5480~5320
No 2	371845	NA	-27.7	>43500	交点: - - - 1 σ: - - - 2 σ: - - -

BP: Before Physics (Present), BC: 紀元前

の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

### 3) 補正<sup>14</sup>C年代値

試料の炭素安定同位体比 (<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C) を測定して試料の炭素の同位体分別を知り、<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定値に補正值を加えた上で算出した年代。試料の  $\delta^{13}\text{C}$  値を -25 (‰) に標準化することによって得られる年代である。

なお、 $\delta^{13}\text{C}$  値は加速器質量分析計によって自動的に測定・計算される。

### 4) 暦年代 Calendar Age

<sup>14</sup>C年代値を実際の年代値（暦年代）に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中<sup>14</sup>C濃度の変動および<sup>14</sup>Cの半減期の違いを較正する必要がある。具体的には、年代既知の樹木年輪の<sup>14</sup>Cの詳細な測定値、サンゴの U/Th (ウラン／トリウム) 年代と<sup>14</sup>C年代の比較、湖の縞状堆積物の年代測定により補正曲線を作成し、暦年代を算出する。<sup>14</sup>C年代の暦年較正には、Beta Analytic 社オリジナルプログラムである BETACAL09 (較正曲線データ: IntCal09) を使用した。暦年代の交点とは、補正<sup>14</sup>C年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ (68%確率) と 2σ (95%確率) は、補正<sup>14</sup>C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の 1σ・2σ 値が表記される場合もある。

## 4. 所 見

原の辻遺跡川原畠 1 b 区で出土した堆積物と自然木について、加速器質量分析法 (AMS 法) により放射性炭素年代測定を行った。その結果、28層出土の堆積物は 6420±40 年 BP (2σ の暦年代で BC 5480~5320 年) の年代値が得られた。一方、34層出土の自然木は現時点での測定限界である 43500 年 BP より古い年代であった。

## 文献

- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), 425-430.
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.
- Heaton TJ, Blackwell PG, Buck CE. (2009) A Bayesian approach to the estimation of radiocarbon calibration curves: the IntCal09 methodology. Radiocarbon, 51(4), 1151-1164.
- 中村俊夫 (1999) 放射性炭素法. 考古学のための年代測定学入門. 古今書院, p. 1 -36.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎：日本先史時代の<sup>14</sup>C年代編集委員会編「日本先史時代の<sup>14</sup>C年代」：3-20、日本第四紀学会。

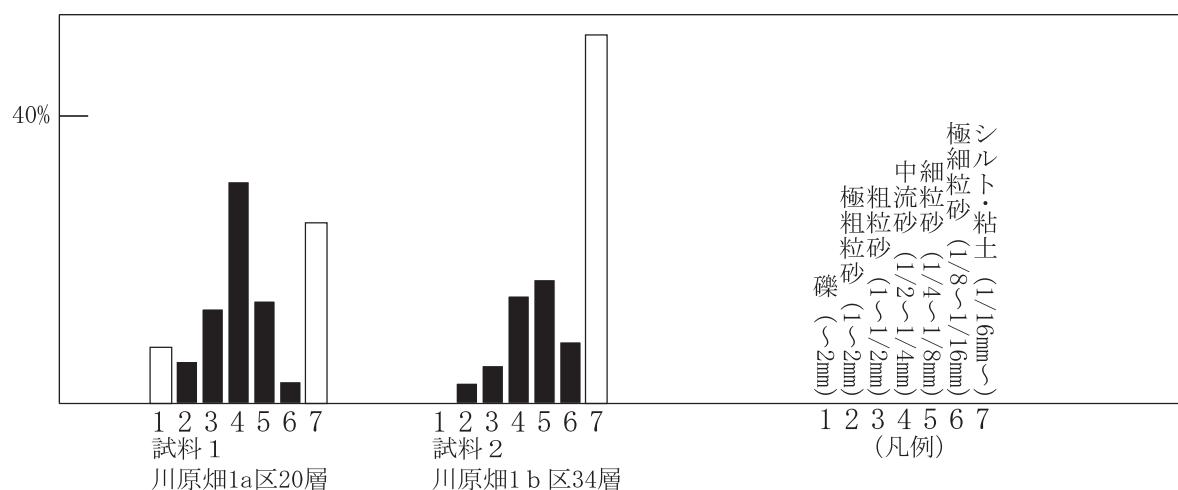
Paula J Reimer et al., (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

表1 原の辻遺跡：川原畠地区における花粉分析結果

学名	分類群 和名	試料1		試料2
		川原畠 1a20層	川原畠 1b34層	
Arboreal pollen	樹木花粉			
<i>Podocarpus</i>	マキ属	2		
<i>Abies</i>	モミ属		10	
<i>Picea</i>	トウヒ属		2	
<i>Tsuga</i>	ツガ属		1	
<i>Pinus</i>	マツ属		1	
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管東亜属	1	5	
<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyylon</i>	マツ属單維管東亜属		1	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	2	6	
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		1	
<i>Salix</i>	ヤナギ属		3	
<i>Platycary astrolobilacea</i>	ノグロミ	1		
<i>Alnus</i>	ハンノキ属		16	
<i>Betula</i>	カバノキ属		4	
<i>Corylus</i>	ハシバミ属		6	
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ		6	
<i>Castanea crenata</i>	クリ	17		
<i>Castanopsis-Pasania</i>	シイ属-マテバシイ属	354		
<i>Fagus</i>	ブナ属		1	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	3	15	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	7	5	
<i>Ulmus-Zelkovaserrata</i>	ニレ属-ケヤキ			12
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウウ属	1		
<i>Ilex</i>	モチノキ属	1		
Celastraceae	ニシキギ科		1	
<i>Acer</i>	カエデ属		1	
<i>Camellia</i>	ツバキ属	1		
<i>Elaeagnus</i>	グミ属	1		
<i>Symplocos</i>	ハイノキ属	3	1	
Oleaceae	モクセイ科		2	
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属		8	
<i>Weigela</i>	タニウツギ属		1	
<i>Distylium</i>	イスノキ属		1	
<i>Lonicera</i>	スイカズラ属		1	
Arboreal-Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	1		
Leguminosae	マメ科	2		
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属		2	
Nonarboreal pollen	草本花粉			
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属	1	3	
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	1	1	
Gramineae	イネ科	14	58	
<i>Oryza</i> type	イネ属型	1		
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1	114	
<i>Allium</i>	ネギ属		1	
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節		3	
<i>Rumex</i>	ギシギシ属	1		
<i>Thalictrum</i>	カラマツソウ属		1	
<i>Sanguisorba</i>	ワレモコウ属		1	
<i>Impatiens</i>	ツリフネソウ属		1	
<i>Apioideae</i>	セリ亞科	11	8	
<i>Astroideae</i>	キク亞科		8	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	9	25	
Fern spore	シダ植物胞子			
Monolate type spore	单条溝胞子	9	24	
Trilate type spore	三条溝胞子	14		
Arboreal pollen	樹木花粉	394	111	
Arboreal-Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	3	2	
Nonarboreal pollen	草本花粉	39	224	
Total pollen	花粉総数	436	337	
Pollen frequencies of 1 cm <sup>3</sup>	試料1 cm <sup>3</sup> 中の花粉密度	1.2 ×10 <sup>4</sup>	1.7 ×10 <sup>3</sup>	
Unknown pollen	未同定花粉	8	15	
Fern spore	シダ植物胞子	23	24	
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	
Stone cell	石細胞	(-)	(-)	
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	
Charcoal-woods fragments	微細炭化物・微細木片	(<+)	(+)	

(1) 粒度組成



(2) シルト・粘土組成比、有機物・有機遺体の含有量

試料 層準	シルト ・ 粘 土 (%)	有 機 物 含 有 (%) 量	微細植物遺体片 ( $\times 10^5$ grains/cm <sup>3</sup> )	花粉 ( $\times 10^4$ grains/cm <sup>3</sup> )	寄生虫卵
試料 1 川原畑1a区20層	30	1	炭化および分解質: 2.0 未分解: 0.5	1.0	(-)
試料 2 川原畑1b区34層	50	7	炭化および分解質: 2.5 未分解: 0.2	0.2	(-)

図1 試料(堆積物)性状図

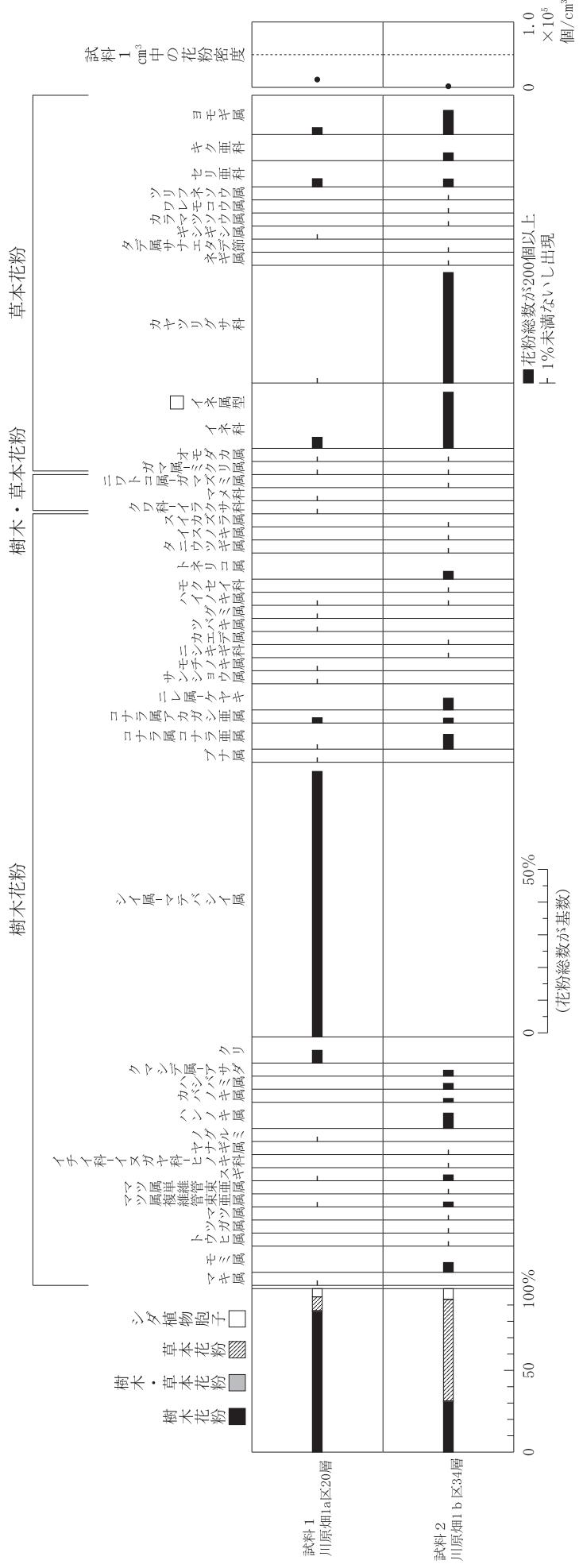
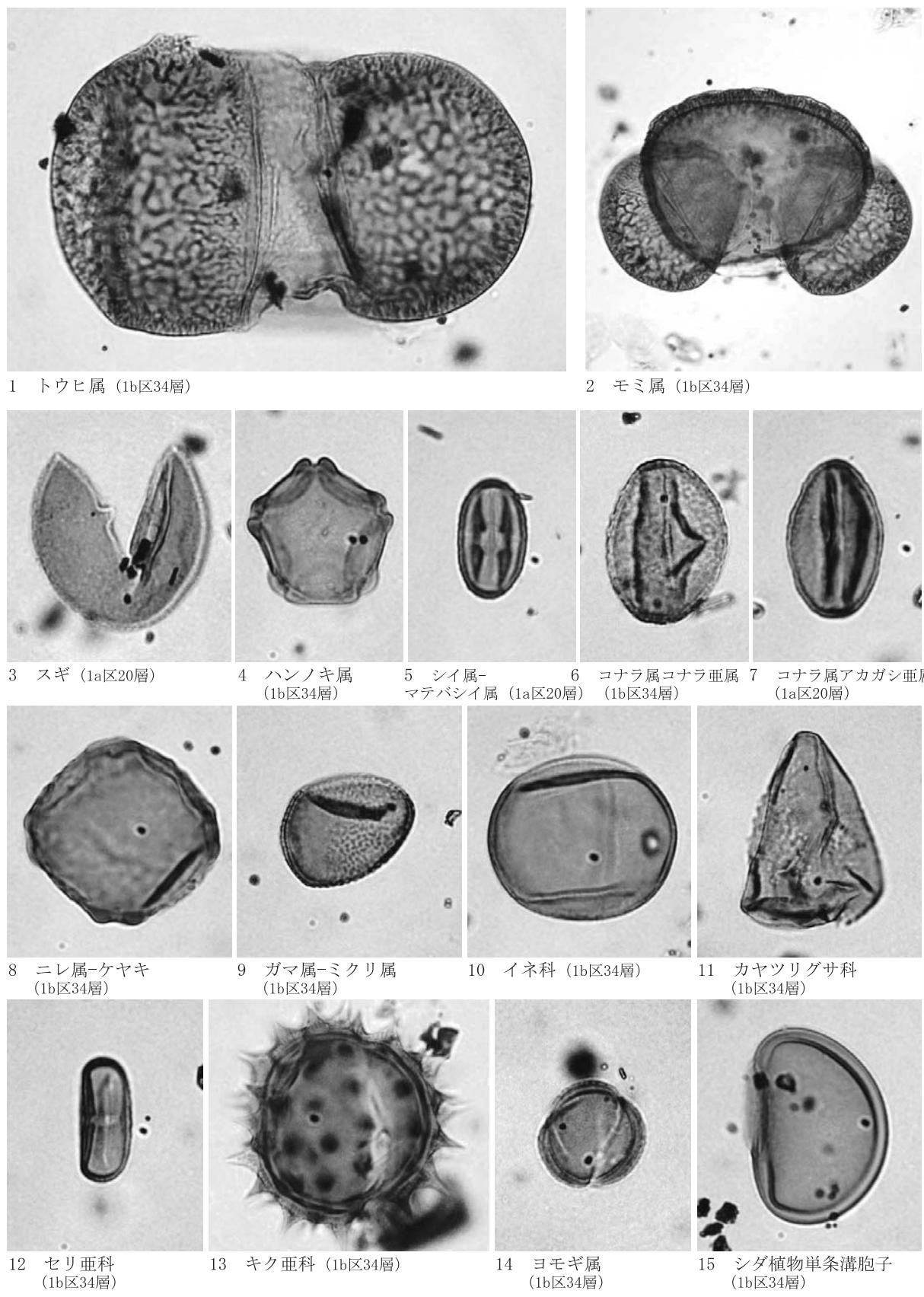


図2 原の辻遺跡：川原畑地区における花粉ダイアグラム

原の辻遺跡：川原畠地区の花粉・胞子



1、3-15 —— 10  $\mu$  m, 2 —— 10  $\mu$  m

## 報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき								
書名	原の辻遺跡								
副書名	原の辻遺跡調査調査研究事業調査報告書								
卷次									
シリーズ名	長崎県埋蔵文化財センター調査報告書								
シリーズ番号	第12集								
編著者名	古澤義久(編)・川道寛								
編集機関	長崎県埋蔵文化財センター								
所在地	〒811-5322 長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触515番地1 電話0920(45)4080								
発行年月日	西暦2014年3月28日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積	調査原因	
はるのつじ 原の辻遺跡	ながさきけん いきし 長崎県壱岐市 あしへちょう 芦辺町 ふかえつるきふれ 深江鶴亀触	市町村	遺跡番号	42424	72-92	33°45'30" 129°45'55"	2013.10.17 ～ 2013.12.27	500m <sup>2</sup>	原の辻遺跡調査研究事業 (国庫補助事業)
収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
原の辻遺跡 (川原畑地区)	集落	縄文時代・ 弥生時代・ 古代・中世・ 近世	竪穴建物跡・土 坑・ピット・ 溝・自然河川跡 等	細石刃、弥生土 器、弥生時代石 器、鉄器、古代 須恵器、中世貿 易陶磁、近世陶 磁器 等					

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第12集  
**原の辻遺跡**

2014（平成26）年3月28日

発行 長崎県教育委員会  
長崎市江戸町2番13号

印刷 株式会社 昭和堂